

平成 27 年度
全国生活協同組合連合会助成事業

第 24 回
環太平洋社会福祉セミナー

日本社会事業大学 70 周年記念プレ・セミナー
アジア型ソーシャルワークを構築する

- ・ 宗教とソーシャルワーク～仏教の場合～
- ・ 宗教とソーシャルワーク～イスラム教の場合～

平成 27 年度 全国生活協同組合連合会助成事業

第 24 回 環太平洋社会福祉セミナー 報告書

日本社会事業大学 社会事業研究所

日本社会事業大学 社会事業研究所

アジア福祉創造センター

MARCH 2016

主催：日本社会事業大学 社会事業研究所

共催：淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター

※本事業は全国生活協同組合連合会の助成を得て行われたものです。

平成 27 年度

全国生活協同組合連合会助成事業

第 24 回 環太平洋社会福祉セミナー

日本社会事業大学 70 周年記念プレ・セミナー
「アジア型ソーシャルワークを構築する」



主催：日本社会事業大学 社会事業研究所

共催：淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター

はじめに

本学の社会事業研究所が主催する環太平洋社会福祉セミナーは、今年度で24回目を数えることとなりました。特に、今年は、日本社会事業大学70周年プレ・セミナーと位置づけて、今後さらに本学が国際的なハブ校としての使命を果たす契機にできれば、と考えました。平成28年度(2016年度)に、本学は、創立70周年を迎えますが、この間の国際的な交流の歴史を振り返るよい機会になると思います。今年度のセミナーも、これまでの本学とのつながりを継続してきた多くのアジアの国からの研究者をお招きすることができました。

本セミナーは、初日の12日には、仏教という観点から、宗教とソーシャルワークを検討いたしました。また、二日目の13日には、イスラム教という観点から、宗教とソーシャルワークを検討いたしました。我々が暮らすアジアは、仏教、イスラム教、キリスト教、儒教等多くの宗教をベースに置いて、地域での慣習、生活様式や文化を構築してきました。地域や文化に根差した「アジア型ソーシャルワーク」を構築するというこのために、宗教とソーシャルワークの関連を検討することは欠かせない視点であると認識しています。

西洋を中心として発展してきたスタンダードなソーシャルワークが、様々な国の中に定着していく際には、それぞれの地域や宗教的背景を踏まえて、その特徴や歴史に敬意を持って統合をしていくことが重要であると考えられます。また、その地域には、その地域固有の文化や歴史的背景があり、それを踏まえつつも、スタンダードなソーシャルワークが定着していくプロセスの解明が重要です。これは、ソーシャルワーク教育の自国化ということで、本学でも継続して行ってきたテーマであります。さらに、その地域が行ってきた、(宗教活動や宗教的考えなど)古来からの社会活動や生活習慣、対人関係の慣習などの中に、これまでのスタンダードなソーシャルワークの考えと非常に近い考えやそれを凌駕する考えが含まれている可能性があります。それらを解明することで、西洋発祥のソーシャルワークが見落としていた「本来のソーシャルワーク」のあり方が見えてくると考えられますし、それこそが「アジア型ソーシャルワーク」の検討作業であると考えられます。このような考えやテーマは、日本社会事業大学、淑徳大学の秋元 樹客員教授を中心として研究プロジェクトが生まれ、検討されてきました。本報告書のなかの秋元客員教授のご発表の中に、その重要性が端的に述べられています。

その地域に根差したソーシャルワークの解明の一つが、「宗教とソーシャルワーク」であり、今回のセミナーでは仏教とイスラム教を取り上げました。今後は、イスラム教とソーシャルワークをさらに掘り下げ、また、他の宗教も分析、解明の対象にしていくことが望まれます。これまでの研究交流の蓄積から、このテーマについて多くの研究者がアジア各国から参画していただきました。そこでは、多くの議論がなされ、仏教あるいはイスラム教の観点からソーシャルワークを捉えなおすという画期的な内容での発表がなされました。この報告書を皆様にお届けできることを心から嬉しく思っています。この報告書を機会に、さらに、宗教とソーシャルワーク、特に、仏教あるいはイスラム教とソーシャルワークの議論が深まることを願っています。

今回は、全国生活協同組合連合会助成事業の一環として、事業助成を受けて開催することができました。ここに記して、心からお礼申し上げます。アジア型ソーシャルワークを構築するというのが、本学の長年の

使命であり、そのテーマで助成を受けることができたのは望外の喜びであります。また、本セミナーは、淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センターと共催で開催することができました。今後も、このような両大学間の連携がさらに深まることを心から祈っています。また、発表者、シンポジスト以外にも、スリランカ、インドネシア、新潟、大阪など国内外からこのセミナーにご参加いただき、活発な議論をしていただきました。ご参加いただいた方々皆様に心から感謝申し上げます。

この報告書は、アジア各国の研究者と淑徳大学と日本社会事業大学との共同研究の成果です。関係の皆様のご努力に心から感謝申し上げます。特に、この研究プロジェクトをリードしていただいた淑徳大学、日本社会事業大学の秋元 樹客員教授、研究プロジェクトの取りまとめに大きな貢献をしていただいた日本社会事業大学共同研究員松尾加奈さん、セミナーの準備と実施にご尽力いただいた日本社会事業大学共同研究員ヴィラーク・ヴィクトルさん、淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター研究員菊池 結さんはじめ多くの方々に心から感謝申し上げます。そして、多くの業務をこのセミナーの準備、実施、報告書作成に割いていただきました社会事業研究所研究調整事務室スタッフに心から感謝申し上げます。この報告書をきっかけとして、活発な議論がなされることを、改めて、心から祈っております。

平成 28 年 3 月 3 日

日本社会事業大学
社会事業研究所長
藤岡孝志

目 次

平成 27 年 12 月 12 日(土)

宗教とソーシャルワーク ～仏教の場合～

はじめに — 日本社会事業大学研究所 所長 藤岡孝志	…………… (1)
学長挨拶 — 日本社会事業大学 学長 大嶋 巖	…………… (3)

◆ 基調講演

秋元 樹 「アジアにおける“仏教ソーシャルワーク”研究の現在地と意義」	…… (5)
H. M. D. R. Herath「仏教からみたソーシャルワーク」	…………… (15)

◆ 円卓会議 …………… (22)

H. M. D. R. Herath (スリランカ) , Adi Fahrudin(インドネシア) , Muhammad Samad(バン
グラディシュ), Zulkarnain Hatta(マレーシア) , Melba L. Manapol(フィリピン),
Wanwadee Poonpoksint(タイ), 秋元樹, 藤岡孝志, 有村大士, 松尾加奈

目 次

平成27年12月13日(日)

宗教とソーシャルワーク ～イスラム教の場合～

◆ 基調報告

Adi Fahrudin 「インドネシアからの報告」 (45)
Zulkarnain Hatta 「マレーシアからの報告」 (50)
Muhammad Samad 「バングラディッシュからの報告」 (65)
Melba L. Manapol 「フィリピンからの報告」 (70)
Wanwadee Poonpoksini 「タイからの報告」 (75)

◆ 円卓会議 (84)

H. M. D. R. Herath (スリランカ) , Adi Fahrudin(インドネシア) , Muhammad Samad(バングラディッシュ) , Zulkarnain Hatta(マレーシア) , Melba L. Manapol(フィリピン) , Wanwadee Poonpoksini(タイ) , 秋元樹, 藤岡孝志, 藤森雄介, 木村容子, 有村大士, 贅川信幸, 松尾加奈

日本社会事業大学 70 周年記念プレ・セミナー

アジア型ソーシャルワークを構築する

テーマ：宗教とソーシャルワーク

～仏教の場合～

日時：平成 27 年 12 月 12 日（土）

場所：日本社会事業大学（第 3 会議室）

基 調 講 演 (13:20 – 14:50)

「アジアにおける“仏教ソーシャルワーク”研究の現在地と意義」

秋元 樹（日本社会事業大学 客員教授・

淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター長）

「仏教からみたソーシャルワーク」

H.M.D.R. Herath (Head of the Department of Sociology,

University of Peradeniya)

円 卓 会 議 (16:00 – 17:30)

H.M.D.R.Herath (University of Peradeniya), Adi Fahrudin (University of Muhammadiyah Jakarta), Muhammad Samad (University of Information Technology & Sciences (UITS)), Zulkarnain Hatta (Universiti Sains Malaysia), Melba L.Manapol (Ateneo de Davao University), Wanwadee Poonpoxsin (Thammasat University), 秋元樹（日本社会事業大学・淑徳大学）, 藤岡孝志（日本社会事業大学）, 有村大士（日本社会事業大学）, 松尾加奈（日本社会事業大学）

宗教とソーシャルワーク ～仏教の場合～



大嶋 巖学長



藤岡 孝志教授 / 社会事業研究所所長

藤岡 それでは時間になりましたので、始めさせていただきます。まずこの準備を。

藤岡 ご準備できたようでございますので、同時通訳でございますので、私は日本語でお話をさせていただきます。司会をさせていただきます。社会事業研究所長の藤岡でございます。どうぞよろしくお願いいたします。それから、隣におります一緒に司会させていただきます共同研究員の松尾でございます。どうぞよろしく。

松尾 皆さま、日本によろこそ。お目にかかれて光栄です。今日は藤岡先生とともに司会進行をさせていただきます。

藤岡 それでは、早速プログラムのほうに入らせていただきます。まずは開会のごあいさつということで、本学の学長であります、大嶋巖のほうから歓迎のごあいさつをさせていただきます。よろしくお願いいたします。



松尾 加奈氏

大嶋 日本社会事業大学学長の大嶋です。まず主催者を代表して、このセミナーにお集まりいただきました皆さまに対しまして、心より歓迎のごあいさつをさせていただきます。今日は年末のご多忙の中、よろこそ日本へ、そして日本社会事業大学へお集まりいただきました。きょうは美しい晴天の下で、環太平洋社会福祉セミナー 2015 を開催できますことを、とてもうれしく思っております。2年前にこのセミナーを開きましたときには、大雪でセミナーを開催いたしましたけれども、きょうは本当に気持ち

の良い冬晴れで、気持ちよく活発な議論ができることを期待しております。このセミナーには、アジアの各国、インドネシア、マレーシア、タイ、スリランカ、バングラデシュという5カ国から、本セミナーのテーマである、アジア型ソーシャルワーク、宗教とソーシャルワークにお詳しい6名の先生がたにお集まりいただき、研究成果を共有していただきます。日本からは、アジア太平洋ソーシャルワーク教育連盟 APASWE、前会長の秋元樹先生。共催団体である淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センターの先生がた。そして主催団体である日本社会事業大学から、藤岡孝志社会事業研究所長をはじめ、アジア型ソーシャルワークに関心を持つ、多くの関係者にお集まりいただきました。皆さまがたとともに、あらためて今日、日本において社会的関心が高まっている宗教とソーシャルワークの課題を、共に議論できることをうれしく思っております。

この環太平洋社会福祉セミナーは、今年で第24回を迎えます。数年前までは都心でセミナーを開いてきましたけれども、前々回から清瀬に開催場所を移して、セミナーを開催いたします。主催校の日本社会事業大学としては、積極的に教職員の参加を得て、このセミナーを位置付けたいと考えてきました。特に来年本学は、創立70周年を迎えます。日本社会事業大学70周年記念事業に繋がるプレ企画として、このセミナーを位置付けさせていただいています。70周年記念事業の一環として、このセミナーに対して助成をいただきました、全国生活協同組合連合会さまには、この場を借りて心より御礼を申し上げます。本セミナーのテーマは、先ほど触れたように宗教とソーシャルワークです。その趣旨はアジア型ソーシャルワークを構築することにあります。アジアの国々では、今日、多様な宗教や文化的背景にある価値や理念を基盤に、社会の発展状況を

踏まえながら、その国や地域にふさわしいソーシャルワークのあり方を追求していくことが求められています。本学では秋元先生の主導によって、淑徳大学、ベトナム、タイ、スリランカをはじめとする国内外の多くの大学と共同して、仏教を基礎に置くソーシャルワーク研究を進めてきました。

その成果をこのセミナーでは、共有できることを期待しております。年末の慌ただしい中ではありますが、きょう、そして明日の2日間、よりよいアジア型ソーシャルワークの在り方を検討する、活発で生産的な議論を交わしていただけると幸いです。どうぞ2日間、よろしくお願い申し上げます。

藤岡 ありがとうございます。それでは続きまして、本当セミナーの趣旨につきまして、私のほうから簡単にご説明を申し上げたいと思います。先ほど学長のごあいさつにもありましたが、平成28年度に本学は開学70周年を迎えます。セミナーも今回で24回を数え、その果たすべき役割は、さらに重要となっているというふうに認識しています。今回70周年記念事業の先駆けとしても、このセミナー開催を位置付けて、アジア型ソーシャルワークを模索するというテーマとして掲げました。特に宗教とソーシャルワークを重要な課題として、多様な宗教や文化の背景にある理念、価値、ソーシャルワーク実践を検討し、専門的なソーシャルワークにとどまらない、地域に根差したソーシャルワークの展開を検討できる。そういう会議にできるとうれしく思っています。この会議は、宗教、文化、地域の多様性の重要性をうたいあげたソーシャルワークの、国際的な新しい定義の検討をさらに展開するものとして位置付けています。これまでこのテーマにつきまして、スリランカ、マレーシア、ベトナム、バングラデシュ、インドネシア、タイ、フィリピン、

そして国内では淑徳大学をはじめとする、多くの国内外の大学との共同研究を行ってきました。特にここ4年行ってきました、仏教を基礎に置くソーシャルワークに関する研究の成果を踏まえ、今年度新たにイスラム教に基礎を置く、ソーシャルワークに関する研究を立ち上げました。

今回のセミナーでは、その両方の成果をご発表いただき、このご参加いただいた皆さまと、議論ができればうれしく思っております。先ほど学長もごあいさついただきましたが、淑徳大学との共同開催ができましたことも、秋元先生はじめ、皆さまに心から感謝を申し上げたいと思います。この会議の席では、専門的な仏教用語や、イスラム教用語が飛び交うかもしれませんが、できるだけその都度、分かりやすく解説していただき、宗教的な背景が違う国々のかたがたと、グローバルなソーシャルワークの模索、アジア型ソーシャルワークの構築という、大きなテーマを皆さんと一緒に掘り下げることができたらと、考えております。最後になりましたが、お忙しい中、会場にお越しいただきました一般参加のかたがた、本学教職員のかたがた、そして学生の皆さまにも、心から感謝を申し上げます。皆さま、この2日間、どうぞよろしく願いいたします。

それでは早速スケジュールということでございまして、本日はお二方から、ご講演をいただくことになっております。まず日本社会事業大学客員教授、淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター長、秋元樹先生から、基調講演をよろしく願いできればと思います。よろしく願いいたします。

◆基調講演「アジアにおける“仏教ソーシャルワーク”研究の現在地と意義」秋元樹（日本社会事業大学客員教授・淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター長）

秋元 アーユーボーワン、スラムマツ・トウンガハリ、アッサラム・アライクム、スラムマツ・シアン、サワディ・カッ(プ)、こんにちは。日本語での、こんにちはという言葉も、忘れるべきではないでしょう。本日は過半数のかたがたが外国からの参加者でありますので、英語でお話をしたいと思います。特にジャパニーズ・イングリッシュでお話ししたいと思います。こちらのほうが日本の参加者にとっても、ご理解がよいかと思います。

この私のプレゼンテーションの目的は、私ども仏教グループの今までの成果、ここ数年間の成果を皆さんにお伝えをするということです。皆さんイスラムグループとも、今後共同作業ができるように、私も期待をいたしております。



秋元 樹氏

ブディストソーシャルワークの先行研究

皆さん、この言葉、ブディストソーシャルワーク、仏教ソーシャルワークという言葉をお聞きになったことがあるでしょうか。私、Google 検索をしてみました。52万6000というヒット数がありました。これは仏教のやっているソーシャルワーク類似行為、ブディストとソーシャルワークのそれぞれの前後に“ ”（クォーテーションマーク）を付けました。それからまた、Google Scholar でありますと1

万 4000 件のヒットがありました。しかしこの二つの言葉、ブディストという言葉とソーシャルワークという言葉を組み合わせて、クォーターションマークでくくって、“ブディストソーシャルワーク”で検索しますと、Google Scholar の場合は 36 件のヒット数しかありませんでした。

今度はソーシャルワークアブストラクトという、これはアメリカの NASW のサイトであります、こちらのほうで見えますと 45 ぐらいのソーシャルワークの関係の雑誌の中を、検索してくるものがありますけれども、“ブディストソーシャルワーク”では 2 件しかヒットできませんでした。また、『ソーシャルワーク』—これは NASW の雑誌の名前ですが—で探してみますと 0 でありました。今度は『エンサイクロペディア・オヴ・ソーシャルワーク』、これは NASW が出しておりますソーシャルワーク百科事典というところですが、これで検索をしてみますと、10 行、全体 1900 ページの中から、“フェイス・ベイスト・ソーシャルワーク”の項目にその 1 パラグラフが見つかりました。しかしキリスト教とか、ユダヤ教とかは、非常に多くの記述がありました。イスラムの人たちに、私はちょっと嫉妬心を覚えます。ページ数が多いじゃありませんか。アメリカの百科事典なのに。ヒンズー教、仏教というのは、ちょっと小さなスペースしか与えられていないと思いました。

ということで、多くの文献が、“仏教”×“ソーシャルワーク”については存在しております。すなわち仏教に関係するソーシャルワークということでは相当の文献がある。Google、Google Scholar、それからソーシャルワーク・アブストラクトなどいろいろあったわけですが、しかしながら、これを一つにまとめて見る、“ブディストブレストソーシャルワーク”を一つのクォーターションマークで区

切って見ますと、非常に少ない数のヒット数しかなかったわけです。

仏教の行う西洋ソーシャルワーク (WPSW)

これら全て、実際のところ全てではないかもしれませんが一私、この文献を全部見たわけではありませんので一私の今までの経験に照らして考えると、こういった文献のほとんどは、ソーシャルワークではあるが、しかし仏教寺院、あるいは仏教僧、あるいは尼僧、あるいはまた仏教を信じる人たちが行っているソーシャルワークについてのものと思われま。著者、筆者の中には、どのようにソーシャルワークに寄与すればいいか、それを仏教サイドから考えている人もいます。いずれにしろ、ソーシャルワークそのものについては、何も疑問を呈していない。ソーシャルワークというのは、もう所与のものとして受け入れている。ですからこういったものの全てというか、ほとんどはソーシャルワークについてはもう当たり前のものとして、当然視をしております。

多くのものは、とにかく自らの仏教のやっているソーシャルワークは、authentic なソーシャルワークであると。所与のソーシャルワークを尺度として用いている。ですから多くのあるいはまた少なからぬ著者は、仏教のあれこれの特定の概念を持ってきて、欧米型、西洋型のソーシャルワークの概念、例えばエンパワーメント、社会正義、人権、こういったものはその(仏教の)言葉あるいは概念の中に含まれていると自らのソーシャルワークとしての authenticity を主張する。例えば日本ですと共生、共生(ともい)き、これは interdependency、coexistence とでも訳すのでしょうか、いろいろな仏教用語、特別な仏教用語があるわけです。われわれのあれこれという概念の中には、欧米の何とかという概念と同等である、それらはカバーされる、と。

であるからわれわれのものもソーシャルワークとして authentic なものであると許しを乞う。この欧米型、西洋型のソーシャルワークに合致しているのだと、そういう意味です。

しかしわれわれの関心は別のところにあります。われわれは疑問を呈するのです。そのソーシャルワークそのものに疑問を呈します。「ソーシャルワーク」ということばは、ちょっと今（ここで）の議論においては混乱を招くかもしれません。ですから私は、この西洋型のソーシャルワーク、すなわち私たちが教室で教えているもの、われわれが実践しているもの、書いているもの、そういうソーシャルワーク、通常は別にこのように形容詞をソーシャルワークの前に付けてはしませんが、しかし今日は WPSW(Western-rooted Professional Social Work) という言葉を使ってみたいと思います。欧米、あるいは西洋に根ざすソーシャルワークというふうに、こういう形容詞を付けてみたいと思います。

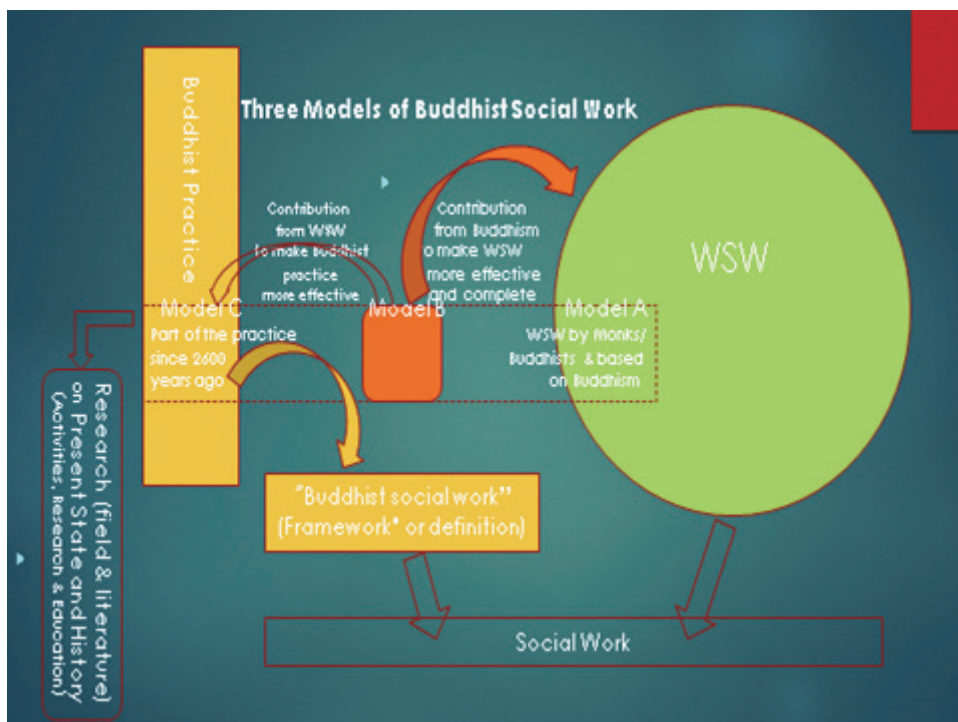
ですからわれわれは、そのこういうふうな西洋に根差す、西洋から発生したソーシャルワークをコ

ピーするということに関心があるわけではない、われわれは向こうのモデルに合わせるということに関心があるわけではない。すなわち測定の尺度は、向こうのものではないと、われわれとしてはわれわれ独自の測定尺度を使いたいと。われわれは当然、向こうから学ぶ用意はあります。学びたいとは思いますが。しかしわれわれを向こうに合わせるというか、われわれは向こうからソーシャルワークとして認めてもらふこと、このソーシャルワークという言葉を使わせてほしいと許しを乞う、そういう許可を得る必要はないわけです。

仏教ソーシャルワーク三つのモデル

これ（PPT）はモデルです。われわれが、今までのところで、達成してきた状況です。仏教ソーシャルワークには三つのモデルがあります。

（1）緑の部分（PPT）、これは欧米、西洋に根差すソーシャルワークです。冒頭で述べた Google 検索での 52 万の“ブディスト”×“ソーシャルワーク”、多くはここにあたります。いろいろと議論がありま



す。要は文献がたくさんあるというわけです。こちらのほうの議論は、例えばアメリカにおきましては、キリスト教の教会がたくさんソーシャルワークを行っている。いい仕事をたくさんしている。そしてもちろん、多くの仏教寺院もアメリカには存在しています。そしてそういった人たちは、キリスト教の活動を見ている。われわれも同じことをすべきじゃないか。われわれも類似したことはすべきではないか。いやもうすでに同じようなことをやっている、というふうに考えるわけです。

ですからこういった文献、そういった仏教徒の実践、それは別にソーシャルワークそのものに疑問は呈しておりません。ソーシャルワークそのもの、恐らくこの西洋型のソーシャルワークと同じと。大体99パーセント(?)の文献は、この種類の議論を行っているわけです。

(2) ただ他のグループの学者あるいは研究者の人たちもおります。基本的な考え方は同じです。その基礎は欧米型のソーシャルワークですけれども、しかしながら、現在のこのWPSWの現状には満足していません。仏教側のほうから、WPSWをさらに効率的、効果的にするために寄与をしたい。より完璧なものにするために寄与をしたい、貢献をしたいと考えているわけです。ですからこういうWPSWを、より有効なものに、より完璧なものにしていきたいと、おそらく仏教側から、何らかの貢献ができるのではないかと、そういうふうに考えています。一つの典型的な例は、ベトナムの一研究者です。われわれもベトナムについて調査を行いました。ベトナムの社会において、仏教は一掃されていないというか、われわれは仏教文化の中に何千年も昔からあった。だから心理的にも単に私の心理というだけではなく一精神的にも、あるいはまたもっと道徳的なレベルにおいて、あるいは人の行動、習慣のレ

ベルにおいても、日常生活においても、その概念と
いうか考え方というか、あるいは感じ方というか、その仏教の感じ方、考え方は、もうわれわれの生活の一部としてしみ込んでいるということなのです。それは仏教徒でない人たちの間においてもそうなのです。それがベトナムだという。ですから仏教に目を注ぐことなく、WPSWがまともに、効果的に機能することなど不可能であろうということです。これが仏教ソーシャルワークに関心を持つ二つ目のグループです。

(3) ただわれわれの関心を持っているのは、そのどちらでもありません。われわれが関心を持っているのは、この黄色の部分(PPT)です。黄色というのは仏教側という意味です。仏教徒は非常に似たような活動、ソーシャルワーク、欧米のソーシャルワークに似たような活動をもう2000年以上実践してきました。しかしわれわれはこういうWPSWをしてきたのではない。似ているかもしれない、同等かもしれない。また部分的に同じかもしれない。しかしわれわれはこういったことを、われわれの仏教の実践の一部としてやってきたのです。例えば仏教の僧侶は、朝に通り、町に托鉢に出る。あるいは勤行を行う。あるいは掃除をする。例えば寺の庭を掃除したりします。同じように、外に出て行って村の人々に仕える。村人の役に立つわけです。そういった行為をするわけです。村人も日常生活にいろいろな問題、困難を抱えている。そういった人たちに対し役に立ちます。

しかしここでの問題は、こういった行いは僧侶にとっては単にその日常生活、実践の一部である、一部として溶け込んでいる。従ってこの具体的な一群の活動を独立したひとつのカテゴリーとして切り離し概念化することが難しい。非常に難しいけれども、しかし、一時あるいはその仮説的にでも、この部分

を切り取って一概念的に一われとしては、仏教ソーシャルワークの概念、あるいはまた、仏教ソーシャルワークの枠組みを作りたい。これをここでモデルCと名付けているわけです。

仏教ソーシャルワークの構築に向けて

ですからこの仏教ソーシャルワークの概念的な枠組みを、近々ぜひ構築したいと思います。この目標達成のために、多くの活動を行う必要があります。いろいろな努力を払って、例えば事実関係の把握、究明。あるいは経験的、歴史的検討。あるいは理論的検討。あるいは議論、討論、それからまた比較検討も必要でしょう。いろいろな取り組みを行わなければいけません。当面少なくとも4点です。1. まず、われわれ自身について学ぶ必要がある。われわれはどういうものなのか、われわれがこういった活動を、どういうふうにやっているのか。それからまたどれくらいやっているのかということも分らなければいけません。2. つづけてまた2600年間、われわれのこういう活動はどのように変わってきたか、われわれの実践はどう変わってきたかを知らなければなりません。なのです。教科書は、WPSWは工業化の落とし子だ、工業化の中で生まれてきたといいます。そのような大きな社会変化が一つの契機となって、この専門職、ソーシャルワークができてきたというのです。が、しかしわれわれのソーシャルワークに関する活動というか、ソーシャルワークのような活動、そのように見える活動は、われわれの場合はもう2600年ずっとやってきている。その間当然多くの大きな社会変化はあったはず。単に工業化だけではないでしょう。しかしそういうふうな大きな社会的変化があった中で、われわれの活動はどのように変わったのか。われわれの実践はどう変わったのか。私としては、本当に信じられない

ことですが、2600年、全くやり方が変わっていないのかもしれませんが。これはある種の仮定ではなくて、これもまた仮説で、これは排除すべき仮説かもしれませんが、しかし受け入れられる可能性もあるでしょう。われわれはそういうふうな歴史を検討する必要があります。3. 3点目は、我々はなぜこういった活動をするのか、です。宗教が世俗的活動に関わる理由です。これは今日は省略します。4. 4点目。われわれの特異性・独自性です。本当の仏教ソーシャルワークのエッセンスは何でしょうか。われわれとしてはイスラムソーシャルワークの研究から学びたいと思います。こういう仏教的な特性、あるいは仏教的な土台、基本とは何なのか。しかしほとんどはひよっとすると、他の宗教と共通なのかもしれない。あるいはまた、非宗教的な活動とも共有できるのかもしれませんが。

研究の3つの源流+1

われわれはこの仏教グループの中で、どう数年間動いてきたのか、ちょっと報告をいたします。三つのルーツ、源流があります。一つはこの日本社会事業大学のアジア福祉創造センターのプロジェクト、二つ目はベトナム、それから三つ目はスリランカのプロジェクトです。この三つのプロジェクトが一つに合わされました。合流しました。それが2カ月前、10月です。千葉においてでした。簡単にこの点をご紹介します。

(1) 皆様ご存じですが、新たなグローバルな定義がIASSWとIFSWから出てきております。前の国際定義をどのように新しいものに変えればいいのか、というような話し合いをしたときに、このキャンパスでアジア太平洋ソーシャルワーク教育連盟(APASWE)の会議を持ちました。4、5年前のことでした。ハタ先生、そしてサマド先生だったのでしょうか。今日

ここにおられる何人かのかたがたがその歴史的な機会に参加されました。当時、とにかくわれわれがどこに行こうか、以前のソーシャルワークの国際定義に対して同じような声が聞かれました。インドネシアでもマレーシアでも聞かれました。「これは西洋、欧米のものだ」、「われわれのとは違う」、「なにかおかしい」「どこかあわない」と。そういう意見をよく聞きました。同時に、社会変革、社会問題解決、あるいは人間関係、それからまたエンパワーメント、解放。こういったことはソーシャルワークの目標、あるいは活動として適切なのか。二項対立的考え方、たとえば、人対環境といった考え方はいいのだろうか、どうだろうか。

それからまた、個人主義、あるいはまた個人中心的な考え方、例えば個々人の自己実現、潜在可能性を開花させるというような考え方、そういう考え方でいいのだろうか。逆に社会の安定、人間関係における調和、他者の尊敬・尊重、独自の伝統・文化の強調、そして責任の強調、またソーシャルワークにとっての家族・地域の重要性。こういった語句、概念はソーシャルワークの中核的な要素ではないのでしょうか。あるいはこういった例えば調和ですとか、伝統の独自性ですとか、そういったことが本当にソーシャルワークの中核的な要素なのでしょう。これまでの定義の中では、こういった考え方が入っていませんでした。いや新しいものにも入っていない。さらに英語以外の言葉を入れるというのはどうだろうか。例えば日本語の「共生」を入れる。日本語でなくても、こういったキータムを入れることができるかもしれません。各国それぞれ母国語があります。これを入れてもいい、あるいは入れるべきなのかもしれません。言語に関する疑問。基本的な言語問題に論及されることもありました。あるいは人権、あるいは社会正義、これをソーシャルワーク

の本当の根本的な原理とすることに異議はないのでしょうか。これまでの定義の行間からは西洋民主主義、キリスト教、そして近代主義がうかがえます。そしてまた、精神性 (Spirituality) の要素は抜けております。

それだけではありません、これは先進国のモデルです。ソーシャルワークの定義をするといいながら、「ソーシャルワーク専門職は～を推進する」等とはじめていいのか、あるいはソーシャルワークというのは、専門職とイコールなのか、そういった疑問もありました。新しい定義ですけれども、最初の1行目、ソーシャルワークは専門職である、というふうに書かれています。私はアメリカ人ではありません。私はアメリカ生まれでもありません。洗脳されているかもしれません。先生は、「ソーシャルワークは何なのか」と聞いてきます。そうしたら私たち学生は答えなければいけません、「それはひとつの専門職である」と。そうでなければ、学生たちは単位を取ることができないでしょう。ですが一体ソーシャルワークとは何なのか、ということをまず考える必要があるのかもしれません。専門職が何なのか、ソーシャルワーク専門職が何なのかということを考える前に、そもそもソーシャルワーク自体は何なのか、ということを考える必要があるかもしれません。

以上は皆 2010 年に会議を行ったときに出ていた発言です。5年以上前にこのような疑問が呈されていたわけです。

(2) この定義のプロジェクトを始めた後、すぐベトナムにまいりました。そして仏教という言葉はそこで初めて口にしました。ベトナムは仏教の国だからです。ベトナムの大学の先生がのちにひとつの調査研究プロジェクトの提案を出してくれました。仏教のソーシャルワークへの貢献についての提案を出してくださったのです。これが私の、本日の

先の2番目のモデルです。

そしてこちらの日本社会事業大学のほうで、「(専門職) ソーシャルワークとその機能代替」に関する研究をいたしました。そしてソーシャルワークはソーシャルワークである。フットボールはフットボールである、というふうに考えました。スラムの小さな空き地で、子どもたちがボールを蹴ってもサッカー(フットボール)はサッカー(フットボール)でしょう。豪華なすばらしいスタジアムの中で、プロの選手たちが、もちろん私の月給よりも何十倍、何百倍の給料の支払を受けて、やってもサッカー(フットボール)はサッカー(フットボール)です。専門職のソーシャルワーカーだけでなく、世界の他のかたがたもやはり類似の活動をしているのではないかと、という疑問が浮かび上がります。例えばがんに関する支援を行っているひとつのNGOが日本にあります。その中にはソーシャルワーカーなどという人はひとりもいません。ですけれどもソーシャルワーカーと同じような仕事を、このがんの患者とその家族に対しての救いを差し伸べるNGOがやっています。同じプロジェクトでマレーシアの研究者も同じような例を出してくれました。専門職のかたがたではないかたがたの活動が、専門職の方々よりより良い効果を挙げているというデータをお出し下さいました。そしてクライアントの満足度もこちらの方が高いというお話を、マレーシアの方がしてくださいました。

そしてスリランカのチームの中では、明日いらっしやいますけれども、背の高い方です。アヌラダ・ウィクラマシンハさんです。彼はスリランカの調査のチームに入っていました。彼は仏教を社会の中のソーシャルワークの機能代替をしているものとして取り上げました。そして彼は調査のプロセスでいろいろな人に話を聞きました。仏教徒、それから仏

教のリーダーの方、それからまた政府の指導者のかたがた、いろんなかたがたにお話を聞いたそうです。そして彼らは仏僧にソーシャルワークを学んでもらう大学レベルの組織をつくるということを決めました。仏教の僧侶のための大学レベルの機関をつくって、その僧侶たちにソーシャルワークの教育をほどこすことにしました。そして来月(2016年1月)、開校にこぎつけています。(その後国内政治状況の変化により延期)

(4) この三つの活動があります。これが一つに合流をいたしました。2カ月前の11月に、千葉でこの三つの活動が淑徳大学において合流をしました。もう一つ重要なものが抜けておりました。アジアの仏教の国々に、それぞれの仏教寺院、僧侶による“ソーシャルワーク”活動のレビューをしてほしい、各国で調査を行ってほしいという依頼をいたしました。

そしてベトナム、スリランカ、タイ、ミャンマー、ネパール、この5カ国です。モンゴル、ブータン、カンボジア、ラオスにも働き掛けをいたしました。残念ながら、今回は参加出来ませんでした。そしてこの調査が行われました。皆さんのデスクの上におかれているのがその調査研究結果であります。そしてこの研究ベースに、10月の会議を開催いたしました。ここ1年間強、このような調査研究を私たちはしてきたわけです。本当にたくさんのいい実践がいろいろな国にある。全ての国々で大変素晴らしい実践があるということが分かりました。ですが、まだ分かってないところがあります。各国内での程度の広がりを持つのか? 代表性ということに関しては、まだよく分かっておりません。もうひとつ別の調査をスリランカの小さな地区で調査を行いました。そしてほとんど全ての寺院が、何らかの形の“ソーシャルワーク”の活動を行っているという

ことが分かりました。ですがその小地区が本当に国全体を代表しているのかどうかということまでは分かっていません。さらに記録されたそれぞれの実践例のケース内容の詳細、どのように行われているのかも調査しなければいけません。

WPSW と仏教 “ソーシャルワーク” の異同

西洋のソーシャルワークと仏教のソーシャルワークの間の初期的な比較研究がここで始まったということが言えると思います。活動も似ております。ただし、似ているところはありますが、違うところもあります。

(1) 仏教のソーシャルワークのほうが、やはり散発的で偶発的に行われている。たまたまある僧侶を知っている人が寺院に来て、その人たちがこの“ソーシャルワーク”を受ける。つまり社会の全域に行き渡っていないかもしれません。専門ソーシャルワークのほうが、より普遍的であって、そして制度化されていて、体系的になっていて、プログラムが構築をされているという特徴があるかもしれません。多分この専門職のソーシャルワークのほうには、政府が関与しているということもあるかもしれません。

仏教のほうに関しましては、僧侶というものは、やはり地位が高い。そして一般の人たちの目線では見ていないということも言われているかもしれません。そして専門職のソーシャルワークに関しては、下から上を見る、あるいは対等に。そういう違いがあるということも、言われています。まあ歴史的には必ずしもそうではなかったし現在でもそうでないケースもありますが。

ですが一番大きな違いは、この違いだと思います。ソーシャルワークというのは、境界線、範囲があります。カバーする領域ですとか、あるいは専門分野があります。その枠内でもっともっとと深く掘り下

げていきます。新しい理論、新しいスキル、新しいコンセプトというものを作っていくということになります。ですが、この左側 (PPT)、こちらの仏教の実践というものは、これはもっと大きなミッションのうちの一部になっています。そしてはっきりと境界を分けるということをやっていません。必ずしも、彼らは意識的にカテゴリーを分けているわけはありません。さまざまな活動のグループがあります。明解な定義というものは、仏教の場合にはありません。ですからより深く掘り下げていくということがやりにくい。理論あるいはコンセプトを作っていくというものが難しいかもしれません。専門職のソーシャルワークに関しましては、より意識的に認識的に概念化そして理論化をしているということが言えるかもしれません。

それからもう一つ大きな違いがこちら (PPT) にあります。サイエンスに関しての態度です。専門職のソーシャルワークは、これはサイエンス思考が強い。概念化、あるいは理論化、そして客観的です。そして記録を取って文書化をいたします。ですが仏教の“ソーシャルワーク”に関しては、誤解を懼れず申すならば、なんでもとにかく良い行いをする。自分たちがいいと思うことをやる、というのがことです。仏教の教義や教えから、あるいはこれまでの智慧、経験に基づいていいと思うことをやっています。そしてより内 (inner) 面、心、精神性 (Spirituality)、信仰に関心があります。専門職のソーシャルワークのほうは、何を強調しているかといいますと、客観性です。内的な側面というものには、あまり関心を示しておりません。新しい定義と古い定義双方をみていただきたいと思います。内部の側面、ソーシャルワーカーの内的な側面に関しては、全く言及がありません。ソーシャルワーカーとクライアントの間の内的な関係に関しましても、あまり

関心が払われているとはいえません。

欧米の近代的なソーシャルワークに関しては、右側 (PPT)、産業化を通しての近代主義、合理性、ヒューマニズム、自己中心的個人主義、人権、社会正義、政教分離、それからキリスト教のレガシー、こういった特徴があります。一方、仏教に関しましては、慈悲、おもいやりですとか、あるいは慈善ですとか、あるいは条件を付さない、対価を求めない、利他的な行いということがあります。それからもう一つ、大きな違いがあります。専門的なソーシャルワークは、これは仕事なのです。仏教ソーシャルワークは、これは仕事とは言えません。ですから仏教ソーシャルワークを行って報酬を得るということはできません。労働条件というのは定められているわけではありません。寺院は365日、24時間村人に開かれています。そしてどんな悩みや問題があっても、寺院のほうはそれに対して助けを差し伸べます。ですけれども、WPSWは、営業時間9時から5時までというふうになっています。それぞれの機関がそれぞれの担当分野を持っています。例えば自分のところは子どものためのエージェンシー、あるいは障害者のエージェンシーである。専門があつて具体的な、本当に細かい分野というものに特化しています。

こういった七つの違いというものが、もう数年前に話し合われています。

(2) そして10月にタイの方に聞いてみました。そしてタイの方に100パーセント欧米のソーシャルワークの擁護者の立場に立って、ロールプレイをしてもらいました。そしてこのタイのロールプレイをやってくださった方がおっしゃっていたのが、仏教ソーシャルワークというものは、個別的なケースに着目していて、社会改革、社会構造、社会正義、搾取といった点には関心がない。そして衣食住あるいは医療直接的な物、サービスーの提供はしている

けれども、これでは全体的な (holistic) アプローチにはなっていない、というふうにロールプレイの中でおっしゃっていました。「私たち (WPSW) は、多様性、特にジェンダーに関心を持つ、欧米の人々は、仏教のグループにジェンダーの問題をよく提起している」とも言っておられました。

それぞれの僧侶、そして尼僧がやらなければならないと思うことをやっているのみだと発言をしていました。それぞれの関心に基づいて、それぞれの僧侶、尼僧の経済力、あるいは能力に基づいてサービスが提供されているというお話でした。WPSWはチームワークを大事にしていて、そしてさまざまな分野と協力をしている。しかし、僧侶というものは社会の中でステータスは高いので、なかなか僧侶と一緒にチームワークを行っていくことはできないと言っています。

また財政の基礎は、寺院というものは寄付に基づいて経済運営を行っている、というふうに言っていました。ですが欧米におきましては、政府の予算も割り当てられるしそれが経済基盤となっていて、より安定的な財源となっているという話を彼女がしていました。ところが仏教ソーシャルワークに関しては、クライアントに対してサービスをする人たちというのは、自分たちの功德を積むためにやっている。必ずしも村人のためにやっているわけではないという指摘もありました。もちろん村人のためのサービスを提供しているのですが、一番大きな理由になっているのは、自分たち自身の功德を積むためにいい行いを村人に対してしている、という指摘がありました。こちらにヘラ先生がいらっしゃいます。ヘラ先生がおっしゃっているのは、東洋の考え方は、欧米の考え方と全く違うというふうにおっしゃっていました。先生のご講演の中で、詳しいご説明があると思います。

仏教ソーシャルワークの(作業仮説的)枠組み

最後の私の結論ですけれども、これ(PPT)は私自身の考え方ということではなく、10月の会議のときの発言をここにまとめてみました。このような考え方を発表して下さったかたがたがいらっしやったのですが、結局この「目的」(PPT)というものは、生きとし生けるものの福祉、つまり人間だけではなく、生きとし生けるものの福祉というものを確保するのが、最終的な目標になっていると言っています。より「直接的目的」(PPT)というものは、苦しみ(sufferings)を緩和する、解決することです。Sufferingsがおそらくキーワードでしょう。そして我々はこれを「操作化」(operationalize)しなければいけません。おそらく生活上の困難、問題、より具体的に申し上げますと、貧困、それから障害、そして老い、それから病、HIV、災害被害、社会発展、コミュニティ開発などです。

最大の特徴は次の点でしょう。これら問題の理解にはふたつの要素を見る。一つは社会問題、それからもう一つは欲、利己主義—人間の側の何か。(上の)問題の発生には二つの側面がある。社会問題の原因というものは、資本主義といったものも社会問題を引き起こしているかもしれませんが、こういった社会の問題というものはその裏側をみますと人間の要因が必ずあります。ですから私たちの個人の生活の問題へのアプローチといったものは、社会の問題のレベル、個人の問題のレベル、これ両方に働き掛けていかなければならないと考えています。個人の生活レベルの問題、社会のレベルの問題を同時に解決していかなければいけないというふうに考えています。

時間がありませんので、あとは項目だけで失礼します。助け合い、思いやり、それからケア、そして持続可能性、さまざまな概念があると思います。「中

心的な価値」(PPT)は“五つの教え”ということが言えると思います。そして「対象」「見方」(PPT)といたしましては、人間、生きとし生けるもの、それから輪廻、自然と環境といったものがあると思います。そして「行動の主体」(PPT)といたしましては、寺院、僧侶、それから尼僧、また在家の信者、一般のかたがたということがいえると思います。

The Framework of Buddhist SW

—Towards A working definition— (sein oder sollen?)
<Source: From Oct. WS and Forum>

- ① Purpose or Ultimate goal: Welfare of sentient beings and peace society
- ② Immediate goal: Alleviation and solution of sufferings
- ③ Their operationalization: Difficulties and problems in life
- ④ Their concrete expression or the scope of service: Poverty, children, disabilities, elderly, diseases, HIV/AIDS, disaster victims, community/social development

The Framework of Buddhist SW Towards A working definition—2

- ⑤ Understanding of their causes: Social problems (a) and Greed, self-egoism, etc. on the human side (b) (Is (a) not a cause but rather a result of (b)?)
- ⑥ Cause of social problem (a): Capitalism, etc.; and (b) behind
- ⑦ Approach: To work for or take actions towards both the individual life problem level and the social problem level; and for and towards or through (b) at the same time

The Framework of Buddhist SW Towards A working definition—3

- ⑧ Principles: Help each other, compassion, care for others, sustainable benefit, interdependency, connect and gather people, etc.
- ⑨ Central values: Five precepts
- ⑩ Subjects or views: mankind, sentient beings, gods; transmigration (samsara), the nature and environment
- ⑪ Subjects of action: Buddhist temples, monks/nuns, lay Buddhists and the general people (the understanding and actions rooted in Buddhism)

これが私たちのこれまでに研究の結果分かってきた内容です。これをこれから詰めていかなければいけません。

今後もイスラム教のかたがたと協力をして、研究を進めていきたいと思えます。

藤岡 どうもありがとうございました。ご質問もおそらくおありかとは思いますが、まずはお二人からレクチャーをいただいてから、ディスカッションのほうに入りたいと思えます。それではヘラ先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

◆基調講演「仏教からみたソーシャルワーク」

H.M.D.R. Herath (Head of the Department of Sociology, University of Peradeniya)

ヘラ ありがとうございます。皆さま、こんにちは。議長、藤岡孝志教授、秋元樹客員教授、そしてソーシャルワークチームの皆さま。本日はこの素晴らしい会議に出席させていただき、大変感謝しております。仏教ソーシャルワーク理論と実践というテーマでお話しすることを、光榮に存じます。

本日は、今、非常に素晴らしい興味深い議論を伺ってきましたが、この仏教ソーシャルワークというのは、仏教の中心的概念に完全に根差していま



H.M.D.R. Herath

す。仏教は他の神や創造主や、信仰や奇跡の力やカルマの宗教に依拠する宗教と違うものであります。仏教というのは、無執着 (renunciation)、物に執着しないという理念に基づいていまして、仏教を他の宗教と一緒にグループ分けすることはできません。仏教はダルマ、法を原因と結果というコンテキストにおいて論じるものでありまして、このペーパーの目的というのは、仏教のソーシャルワークの理念と実践が、欧米のソーシャルワーク、西洋のソーシャルワークとどう違うか比較するものであります。仏教の基本的な理念の無執着でありますけれども、これは無執着というのは、非常に人間にとっては重要であります。ブッダの教えによりますと三つの苦しみ、三毒 (afflictions) というものがあります。それがわれわれに影響を及ぼしていきます。まずこの (PPT) 循環的な存在ですけれども、生に始まり思春期、結婚、死、これが輪廻転生です。その三つの苦しみが何かと言いますと、これはまず貪欲 (desires, cravings) があります。そしてその次に瞋恚 (aversion, hatred) というものがあります。ここに二つ目、アタッチメントと書いてあります (PPT) が、これはアバージョンに直してください。そして三つ目は愚痴があります。

このような三毒、三つの苦しみがあるために、われわれは転生を続けるのです。この三毒というのは、不執着によって、そして慈愛 (loving-kindness)、慈悲 (compassion)、そして智慧 (wisdom) によって直すことができます。そして苦痛、苦しみ (suffering) の真実というのは、二つのカテゴリーに分けることができます。肉体的、そして精神的です。肉体的な苦しみには、生みの苦しみ、病の苦しみ、老いの苦しみ、死の苦しみがあります。これは人間の人生においては避けられないものです。子どもの頃からわれわれは苦しみにさらされています。

肉体的な苦しみにさらされています。そして精神的な痛みもあります。われわれが大切にしているものから、別離させられることによる痛み、嫌悪するものと接触する痛み。満たされない欲望の痛み、そして愛する人や場所から引き離される痛み。そして災害、洪水や火災や飢饉、迫害、戦争、そして自然災害、そして人が起こした災害による痛み。または仕事や車やマイホームなど、期待していたものが手に入らない痛みなどがあります。そしてこれらの精神的、そして肉体的な痛みが、われわれ人間としての存在に直結しています。そして幸せ、どうやって幸せになればいいのか。われわれは幸せか、幸せではあるけれども、これは非永続的なものであって、一時的な現象であります。若い頃、そして健康なとき、結婚したとき、商売がうまくいったとき、家を建てたとき、そして車を手に入れたとき、その瞬間は幸せです。

しかしながら、これはほんの短い時間だけです。幸せを一瞬実感した後、もう新たにわれわれは新しい幸せを求めています。これらの幸せというものは、条件の中にあるもので、ひとときの経験、幸せを経験した後は、すぐに痛みが訪れます。よって痛みというのを、永遠にどうやってなくすのか、まずそれには原因説明が必要です。これが仏教ソーシャルワークの原点であります。痛みの原因というのは普遍的で万国共通であります。もしこの痛みの原因というものを断ち切ることができれば、痛みを永遠になくすことができます。ブッダは四つの崇高な真実 (The Fourfold Noble Truths)、四諦というものを示しました。一つ目は苦諦 (the Truth of Suffering)、二つ目は集諦 (the Truth of the Cause of Suffering)、三つ目は滅諦 (the Truth of the Cessation of Suffering)、四つ目は道諦 (the Truth of the Noble Path) です。

これをご覧ください。仏教ソーシャルワークの歴史的な変遷、進化に入ります。この個人の救済というのは、人生のサイクルと密接につながっています。これは紀元前6世紀にブッダが示したものであります。この (PPT) サイクルです。生は痛み、老いは痛み、病は痛み、死も痛み。嫌いなものと関わることも痛み、愛するものと別離させられることも痛み。そして欲するものを得られないものも痛み。この執着 (attachment) の五つの種類が痛みなのであります。そしてこの根源が貪欲であります。われわれは生命に執着し、そして持っている土地や妻や資産に執着します。仕事に執着します。一生懸命しがみつこうとします。

これが転生、生まれ変わりをもたらすのであります。そしてその間、快楽も欲望します。そしてこの快楽などを欲することが、この欲求が生まれ変わりをもたらし、われわれが死滅、生まれ変わりを繰り返す原因となるのです。実際、この痛みをどう止めるかについての真実ですが、何が必要かといいますと、この欲求、欲望というものを完全に払拭することが必要です。欲望から自らを遠ざけ、それを放棄し、投げ捨て、そしてそれから解放され、欲望に執着、物に執着しないことが必要であります。自らを欲望から遠ざける、放棄する、そして欲望を投げ捨てて無執着に到達する。これは人間の人生においては簡単なことではありません。今、生きている人、人間というのは、何度もの転生、生まれ変わりを繰り返しています。そして何度も生まれ変わる中で、われわれは欲望というものを抑制し、精神を社会的道徳観で統制しなければなりません。このことは作善、良い行いに直結します。良い行いというのは、ダーナ (Dana) 布施をほどこす、シーラ (Shila) 持戒する、三つ目はババーナ (Bhavana) 瞑想です。

ブッダの滅諦には八正道、八の正しい道という

ものが示されています。1からいきますと、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念そして正定です。これが仏教の本質でありまして、これが悟りにつながります。ブッダは Chula Maluka Sutra(チュラ・マルカ経)の中で、こう言いました。もし男が毒矢で射られ、そして友人や仲間や親族が医者を呼んだ。しかしながら、その男は誰がこの矢を射たのか、そしてこの矢がどの金属でできているか、そしてどの方角から飛んできたか。そしてこの矢を射ったのが、クシャトリアか、ブラーマンか普通の市民か、ないしは召し使いか、それを解明しないまでは抜かないと言ったとすると。しかしながら、この矢を抜かなければならない。止血をして、そして傷を治癒しなければなりません。これが科学的なアプローチで苦しみを排除する方法であり、これが仏教のソーシャルワークにつながるわけです。僧侶にブッダはこう言いました。多くの人々のために働き、多くの人々の幸せのために働き、世界に対する慈悲の気持ちを持ち、人と神のため、福祉、幸福のために働くのであると。そして2人として同じ方向に歩んではいけない。僧侶たちを仏教の教義、最初から最後まで美しい教義を人々に説法しなさいと。仏教ソーシャルワークというのは、永遠の真実、永遠に苦しみをどうやってなくすか、全ての生き物、小さい動物から大きな人間社会まで、それらの苦しみをどうやって永遠に排除するか、そのことが本質なのであります。これは全ての生き物の苦しみであり、動物も植物も人間とともに含まれます。「サベサタババントウスキタダ」(sābbe sāththa bāvānthu sukhi thāththa)。それがここに書かれている。

普遍的な苦しみというのは、全ての社会にあるものであります。一つの社会だけにあるものではありません。原始的社会、農民社会封建社会、資本主義社会、社会主義社会、人間と同様に、動物も苦しみを

を経験します。われわれは何度もの生まれ変わりを繰り返し、動物に生まれ変わるときもあります。この現世においては人間として生まれてきましたので、人間として生まれた以上、われわれは良い行いをし、つまりこれはソーシャルワークですけれども、ソーシャルワークを通じて苦しみを排除しなければなりません。なぜ苦しみがあるかというのは、先ほど申しました。貪、瞋、痴です。人間としてわれわれは、苦しみを排除するために三つのことをしなければなりません。まず布施(ダーナ)、持戒(シーラ)です。三つ目、瞑想(バーナ)です。瞑想というのは、非常にはっきりとした精神を持たなければならないからです。そして最初のお布施ですけれども、これは物を差し出すだけではなく、これは功德を稼ぐためだけではなく、これは仏への奉仕であり、苦しみの排除に資するからです。これは衣類、住居、食べ物、そして医薬品なども入ります。そして次のシーラ、善ですけれども、これは邪悪な行動、不健全な肉体的、言語的行動を慎むことであります。そして三つ目の瞑想、これは心の平穩、平和を得るためであります。瞑想しますと集中力が高まります。そして頭もスッキリしてきます。頭もスッキリ正常になります。そうしますと、物を見る目もスッキリしてきますし、物に執着する気持ちもなくなってきました。

ソーシャルワークに関連する仏教の10の功德があります。これは紀元前6世紀にブッダが示された功德と密接に関連しています。まず、布施(gift)、持戒(virtue)、瞑想(meditation)、尊敬(respect)、そして奉仕をすること(rendering a service)。回向。そして功德に喜ぶこと。ダルマ、法を守る。そして法を推進する。そして公平、清廉潔白になること。そしてこのような10の功德に基づいて、スリランカでは150以上のソーシャルワーク活動がスリラン

カの寺院では行われています。

ソーシャルワークに関係する仏教におけるメインアプローチ。その考え方としては、中心は、人の心を変えるということです。そしてその後で社会を変えるということです。変化、すなわち考え方を換えるということです。すべての教えは人の苦しみを軽減し根絶するための考えを提供するものです。その結果として僧侶、尼僧、そして在家の人も、行動規範を変えなければいけないということです。ブッダというのは悟りを開いた人でありまして、かつて自ら、あるいは他の人たちの再生を見てきました。以前の人生においても、ブッダになるために10の波羅蜜(perfection)、完璧なことを行いました。それは仏教の最高の高貴な質ということで、ブッダになる前の550の誕生の物語の中には、いろいろな生物の話が出てきます。全ての再生の段階において、彼は真にいい行いというものを行っています。すなわち欲はなくす、そして不完全な質は変える、そしてこの550の再生の物語というのは、非常に類まれな質を持つものです。これがパーラミター(Paramita)、波羅蜜と呼ばれます。一つは寛大なこと。分け与えること。持戒、無執着(renunciation)と智慧(wisdom)、真実と決意のための努力と忍耐、そして慈愛(loving-kindness)と平静(equanimity)、慈(Metta)と捨(Upekkha)。すなわち、平静を持って、そして再生をするということです。こういう質というのは、ブッダとして心を平静にするためであると、これによって、また弟子の考え方も変える。こうしたもので、全ての前の人生というのは、こういういいソーシャルワークに直接関係しています。

ケーススタディについて考えてみますと、ブッダの教えというのは、慈愛を必要とする個人に直接関係します。いろいろな研究方法を用いて、そしてそういう方法を用いて苦しみを解こうとしました。そ

の一つの例で見ますが、ある状況の下でキサゴータミー(Kisa Gautami)が彼女の息子が亡くなった。その後、もうどうしていいかわからなくなり、その死体をブッダの所に持ってきて、ブッダがひよっとして、この死んだ子どもを生き返らせてくれるかと思った。ただブッダは何もしなかった。ブッダはキサゴータミーに対して、家々を回って、死んだ人のいない家があったら芥子(mustard)の種を喜捨として受け取るようにと言った。それが人間の心の中を物語っているのだ。そして家々を回り、種を集めよう。一体どうなるかという、このブッダのこの勉強方法、例えばこの回った家にはいろいろな人がいた。カーストの低い人、ら売春婦もいた。殺人を犯した人もいた。いろんなケースがあったわけです。それによって、無知から解放される、ということが起きたということです。

社会および社会福祉における概念の全体がお経には入っております。思いやり(Mindfulness)の道(path)はサティパターナ(Satipatthana)経。三つのレベルの道德観(percept)的見通しについてはブラマジャーラ(Brahmajala)経、社会の福祉の状況についてはマハパリニバーナ(Mahaparinibhana)経。また依存するような、そういう発生の法則はマハミダーナ(Mahamidana)経。犠牲の道はクータダント(Kutadanta)経。四つの思いやりの方法(ways)道にはチャッカヴァティ・シハナーダ(Chakkavatti Sihanada)経。世界の進化はアガナ(Agganna)経。また「四つの真実」と「八正道」はダーマ・チャッカ(Dhamma Chakka)パヴァターナ(Pavattana)経。仏法のgroupingについてはサンギティ(Sangiti)。そして環境と人為的環境についてはヴァナローパ(Vanaropa)経。こういったものが直接ソーシャルワークに関係します。我々が見る人間をどのように正すか。これが仏教ソーシャ

ルワークですけども、全体系の一部をなすこの三つのことば一植物界、動物界、そして人間界一をカバーします。

今われわれはこの現代の気候変動を再生しようとしている。この (PPT) 欧米の価値体系、これは創造主としての神がまずいて、それから男、女、子ども、動物、植物、そして自然。人間は全て自然を支配することができる、レッセフェール、資本主義ということです。世界においてそういったことが起きています。

こちら (PPT) のほうが、東洋の価値体系です。太陽、月、そして自然。地球というのは母、空気は父、森は祖母、川が娘、丘が息子。そして動物、そして人間というのが来るわけです。認知力を持った人間。人間というのは、この環境の一部なのです。従ってわれわれはバランスの取れた心で、ソーシャルワークをしなければいけない。まず最初に植物界を守る。動物界を守る。そして人間の世界を守っていきます。そうすれば非常に幸せな生活を送ることができます。東洋のソーシャルワークの考え方というのは、西洋型と全く違います。仏教ベースのソーシャルワークというのは、全く西洋型のものとは違うものとして考える必要があります。近代的な欧米の科学というのは、非常に発展しました。これによって多くの都市、大きな銀行、あるいはまた大きな農場が生まれてきましたが、しかしいい人をどうふうにするか、あるいはまた人々のいい行いについては、何も検討をしてくれませんでした。例えばアメリカを見ましても、いろいろな問題が、深刻な問題があります。近親婚、相姦のタブーを破っています。動物になりつつあるわけです。そういったことについては、本当にやっていいのかどうかということを、何度も考えなければいけないわけです。ソーシャルワーカーは何をするか。精神性とはどういう意味な

のか、人間性とはどういう意味なのか。われわれはそれを考えなければ動物になってしまいます。

例えば仏教においては、五つのこと、こういったことはやってはいけないと考えております。例えば屠殺のための動物の取引。あるいは動物は売るな。動物は殺すな。動物にも権利があるわけです。それから今は、動物の権利のための戦いもあります。それから奴隷の取引。欧米におきましては一般的です、欧米資本主義というのは奴隷の取引の上につくられた。ソーシャルワークに含まれる人権の侵害です。それからまた、武器の取引。こういう欧米資本主義、戦争を生む。そして武器を生みます。ですから戦争を推進しながら、一方でソーシャルワークを推進しているわけです。理解出来ますか？それから毒の取引。一体誰がやるのでしょうか。これは人権、それから動物の権利の侵害です。アルコールあるいは酩酊させるものの取引。これは薬物中毒です。こうした社会の悪があるわけです。ですからこういった五つのことは、社会の病害であり、そしてこういったものは価値観に反するものです。理論的な議論に少々戻りますが、欧米型のソーシャルワークの起源は、西洋世界の資本主義に直接結びついています。250年前から工業化とともに。

資本主義で、自らのこういう貧しい人たちを守りたいといいます。金銭的な苦境にサポートを与えています。工業化が、工場体系、売春、貧困、自殺、殺人をつくった。いろいろな問題が西洋社会で生まれている。だからソーシャルワークをはじめた。そして、個人主義、自殺から殺人、社会にいろいろな階層があるという社会的な不平等、親戚との絆の喪失、搾取、貧困、健康問題、その他。こうしたファクターを考えますと、新しい形の理論が必要です。それがソーシャルワークです。

これ (PPT) が欧米型のソーシャルワークの定義

であります。前回私の友人秋元先生が非常に明快に述べられましたが、私も論じてみたいと思います。まず最初の定義。これは1922年のものです。パーソナリティを発展させるプロセス。人と社会的な環境の間を調整し、個々人に意識的に影響を与える。パーソナリティの調整。それからまた、二つ目のものが科学的な方法で人々を助ける。こういった形でやる。そしてこれを科学的な分配なわけです。経済的な体制からできてきたような落伍者を救済するための方法。それから新しい国際的に認められている定義。これはソーシャルワークの職業というのは、社会改革と社会発展を推進するものである。社会の結束とエンパワーメント、そして人々の解放を促すものであると。原理—社会正義、人権、集団への責任と多様性の尊重がソーシャルワークの中心であり、これらはソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、インディジナスな知識に裏打ちされる。私にはなぜこう多くの言葉が換えられるのかわかりません。どれも特定の先進国世界のものです。もし非常に基本的な理論的原則があるならば、定義というものは変わりません。欧米型ソーシャルワークにおいては50以上のソーシャルワークの定義があります。こういった定義というのは、普遍的な理論に関係していません。こうした定義というのは、あいまいであって、また時間がたつと変わります。全く予測不能な経済的な発展や市場経済体制とともに。そうすると相対的な喪失が起きる。社会不正義が起きます。従って今までの欧米型のソーシャルワークの動きを見てみますと、ヨーロッパをバックグラウンドとして、それからアメリカのソーシャルワークへ。

中世において、まずしい人々のために施しを集める宗教運動があり、そして中世教会が宗教的なプログラムを始めた。それから福祉は国家の責任に向かう。マルティン・ルターの1523年の布告、ま

た1601年エリザベス救済法、のちのアメリカの公共生活保護活動 (public welfare activities)、1665年テキサスデューク法、1933年“救貧農場” (poor farms)。それから、第1次世界大戦と工業化の諸問題といったものが出てきました。1929年、地方福祉のニーズへの対応へ、あるいは1869年のロンドン慈善組織協会 (COS) 運動、1920年代のセツルメントハウス運動とケースワーク。1933年ニューヨークの TERA (Temporary Federal Emergency Relief Administration) 運動。1933年、FERA (Federal Emergency Relief Administration) 連邦緊急救済局。立法と制度的発展を通して目的的、意識的に西洋ソーシャルワークが打ち立てられ、まず自らに専門職のソーシャルワークとして紹介し、次いで他の国にもこれこそソーシャルワークとして植え込んできた。

これ (PPT) が21世紀の複雑な社会でありますけれども、ここに書いているような問題があります。生まれ、そして思春期を迎え、結婚をし、そして死んでいく。そういう中で、不安定とか犯罪とか、あるいは家庭内暴力とか、AIDSとか、いろいろな問題が起きています。こうしたものは正常ではありません。全てこれは人間の苦しみに関係しています。従って全ての人々に共通します。欧米世界は病んでおります。東洋世界も同じように苦しんでいます。バングラデシュ、マレーシア、インドネシア、パキスタンは苦しんでいる。日本も。なぜか？その結果は非常に共通性があるわけです。これ (PPT) は近代的なソーシャルワークに関係する分野でありますけれども、貧困、不安定、労働安全。それからまた、災害、引退、あるいは医療問題、結婚生活の問題、家庭内暴力、ホームレス、犯罪、薬物乱用、若者の性の問題。児童虐待。こういったものは全て欧米型のソーシャルワークが、新たなソーシャルワークを

発展させる上で、考えてきた、対応しようとすべき問題だと考えたものです。

彼(女)等は理論を発展させ、人々を養成しています、が、すべて例えば給与、報酬、そういったものに根ざしてです。最後に、私は、彼(女)はそういった苦しみに一時的な解決を考えてきたと思います。しかしこれ(PPT)を見てください。2600年前、仏教ソーシャルワークは、正しくこの救済策を理解しました。すなわち、慈悲、思いやり、共感した喜び。平静というものです。これを心の中に持って、そして人々を強化せよ、ということを訴えたわけです。ですから、これ(PPT)どちらでもご覧ください。この自然、災害被害、人為的なこういう貧困、これも人為的な問題です。不安定、労働安全、慢性的な医療問題、夫婦間不和、家庭内暴力、犯罪、薬物乱用。こういったものは全て人為的な災害です。どうしてわれわれは精神的な生活のほうを考えなかったのでしょうか。人間として、やはり心の問題を考える必要がある。そして自らのパーソナリティのことを考える必要があります。ですからこそ、アジアでは依然として真剣に、このソーシャルワークの意味を考えたわけです。

これ(PPT)が適切な社会問題に関係すべき価値であります。強欲、嫌悪、算段、それからうぬぼれ。それからまた正しくない行為の原因。殺し、盗み、横しまな愛欲、偽り、悪口を言うこと。暴言を吐くこと。うわさ、強欲、悪意、間違った見方。これは全て人為的なものです。ですから、われわれの心を持ってすれば、こういったものを減らすことが可能なわけです。こういう社会問題を減らすことができます。

また今度はちょっと比較をしてみたいと思いますけれども、仏教ソーシャルワークの教育課程。7歳から16歳の青少年。若い人たちのパーソナリティ

は変わります。サーマネラ(Samanera)レベル、見習い僧ですけども(Sabba Dukkha Nissarana)。そこから今度は努力をして、あらゆる生きとし生けるものの苦しみをなくしていく。ソーシャルワークです。つぎに二つ目のレベルをご覧ください。もうちょっとレベルが高くなります。ウパサンムパダ(Upassampada)、1千万の守らなければならないルールがあります。ソーシャルワークに従事する。僧としての資格を得ます。さらに20年もたちますと、今度は高僧になる。スタヴェーラ(Sthaveera)、ここでまたソーシャルワークに努める。そしてまた最高僧(Maha Sthaveera)、そして円熟、引退はありません、死ぬまで。ソーシャルワークは続く。こうして人を変える。そして自らの心を変える。こういう考え方でやっていくわけです。

それに対し、欧米型のソーシャルワークをご覧ください(PPT)。ティーンエイジ、学業に専念する、専門学校・短大修了レベル。大学の卒業レベル。そしてつぎに専門職ソーシャルワーカーになる。それで引退する。ソーシャルワークは終わり。年金を受給する、あるいはそのようなものを。そして死。非常に限定的な枠組みです。ですから、われわれ非常に真剣に考えなければいけません。今はその時なのです。欧米型のソーシャルワーカーの伝統というのは、現在の物理的な世界、物質的な世界を安定させようとする。こういう物質的な世界に関係するような問題の解決をする。それに対して仏教ソーシャルワークの伝統というのは、ソーシャルワーク活動によって物理的な世界の問題とともに、精神的(spiritual)発展を用いて永続的な苦しみを解決しようとしています。西洋ソーシャルワークと東洋ソーシャルワークは人間の苦しみを二通りの方法、異なる形で軽減しようとしています。従って私は感謝を申し上げ2度考えようと思います。ありがとうございました。

藤岡 ヘラ先生、どうもありがとうございました。ずっとレクチャーが二つとても、内容の濃いレクチャーが続きましたので、休憩をはさんでディスカッション、お二人の先生がたへのご質問を含めた上で、ディスカッションを再開したいと思いますので。予定どおり10分休みで、55分再開っていうことでよろしいでしょうか。それでは2時55分から再開したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。お二人の講演に対しまして、まずは拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

(休憩)

◆円卓会議

藤岡 では再開したいと思います。ここからはディスカッションをしていきたいと思います。ではレシーバーを付けていただきますでしょうか。それでは再開したいと思います。それでは全体的なディスカッションに入る前に、それぞれの先生がたに、ご質問をさせていただいて、お答えいただくという時間を、たっぷり取らせてもらおうかなと思いますので、まず秋元先生に、ご質問を自由に、会場の皆さんからいただければと思います。ネームプレートを置かせていただいているかたがたから、いろいろディスカッションはもちろんです。こういう円卓の場でもありますので、どんどんネームプレートがないかたがたも、ディスカッションに参加いただければと思いますので、まずは円卓の会議ということで、ネームプレートがある先生がたのほうから、ご質問いただければと思います。いかがでしょうか。

ハタ どうぞよろしくお願いいたします。ありがと



Dr.Zulkarnain Hatta

うございます。私は秋元先生のお話を伺うことができ、そして見解を伺うことができ大変うれしく思っております。ソーシャルワークの機能についてのお話。それからまた影響についてのお話を伺うことができ、うれしく思っています。ヘラ先生のご講義も伺いましたけれども、本当に類似性があると感じました。私たちのところで話されていることに関しての共通点があると思いました。私たちは、このソーシャルワークの現在の定義というものを、見直していかなければいけないと思っております。秋元先生が強調しておっしゃっていましたが、人権、これは私たちが所与のものとして考えるだけではなく、チャレンジをしなければいけないというふうにおっしゃっていましたが、マレーシアにおきましても、いくつかのセミナーが行われています。人権のチームの方々がセミナーをやっているのですけれども、これは少々問題のあるやり方で、私たちに国連の人権宣言というものを押し付けているように思っております。政教分離をして、そしてその後、第2次大戦があって、ホロコーストがあって、グローバル化があって、さまざまなことがありました。ですけれども、その人権の歴史というものを今まで考えておりませんでした。ソーシャルワークの中でも、アジアの中でいろいろな議論が行われて

いると思いますけれども、マレーシアで私たちが教室の中でできることといえばそれに反論を加えることぐらいです。ごく限られた自分たちの学生に。人権を否定するのではなく、彼等に質問を向けること。一方で私たちは自分の個人の考え方を申し上げたいとは思っておりません、いくつかのいろいろな見解というものを生徒に提示をいたしまして、生徒にどれが正しいかを考えさせたいと思っております。真実というのは、私たちの心の中にあるのです。

ですので、ヘラ先生のお話がありました。原則に関してのお話がありました。信仰というものを別にしまして、私たちの宗教の教義を別にして、先ほどの原則を見てみたいと思います。おっしゃったことはイスラムと全く整合性があります。齟齬がありません。明日申し上げますけれども、私たちのイスラム考え方を申し上げますと、本当に全然、仏教のソーシャルワークと相いれない点はないということがあると思います。これはコメントです。

一つ質問したいと思います。ヘラ先生、生まれ変わりということに関して、もう少しお教えいただけますでしょうか。これは輪廻。もう一度生まれるということと同じなのでしょうか。

藤岡 最初は秋元先生のご質問というお話もしましたけど、おそらく今のような両方の方への質問になるかと思うので、どちらの先生に対しても、ご質問いただければ良いというふうにしたいと思います。それではヘラ先生。

ハタ 秋元先生には、今のところ質問はございません。

藤岡 ではヘラ先生、どうぞよろしく。

ヘラ この輪廻と生まれ変わり、リバーズとリインカーネーションは二つ違う概念です。輪廻をヒンズーの中では信じていますが、仏教ではそうではありません。

この現世の後、もちろんこの後、次の来世に魂が行くというふうに考えています。ですが、最終的には生まれ変わるというふうに考えています。このフォースがあれば、次のリバーズに移っていきます。そしてリインカーネーションというところは、違う考え方になります。このリインカーネーションというのはアートマン (atman 生命の原理) という考え方に関連しています。この今の生というものが、次のリバーズにつながっているんです。ヒンズー教の中では、これは輪廻、リインカーネーションというふうにされています。難しい問題ですね。

藤岡 またさらに別の質問の形で出てくるかもしれませんが、他のご質問をとということにしたいと思います。いかがでしょうか。サマド先生、どうぞよろしく。

サマド ありがとうございます。それから皆さまがたもありがとうございます。最初に秋元先生のほうから伺いたと思います。秋元先生、本当に素晴らしいご講義をいただきまして、ありがとうございます。



Dr. Muhammad Samad

した。ソーシャルワークと宗教に関しての、そして
仏教ソーシャルワークに関しての素晴らしいご講義
をいただきました。ありがとうございました。先生
の話にありました仏教ソーシャルワークは一つの仏
教の文化であって、ソーシャルワーク自体と全く同
じものではない。つまり欧米のソーシャルワークと
は違った点があるというふうにおっしゃっていま
した。私も全くそのとおりで思っております。ヘラ
先生のほうからもお話がありました。たくさんの中
容をご説明くださったわけですが、社会福祉
とソーシャルワークの話、ありがとうございました。
欧米のものはソーシャルワーク、日本でもこれ
はソーシャルワークというふうにいわれています。
ただし社会福祉学部というのもあります。ソーシ
アルワークに関しましては、日本では社会福祉とい
うふうにいわれていると思います。ソーシャルワーク
と社会福祉というのは、ソーシャルワークの結果と
して社会福祉が実現されるというふうに考えていま
す。ですので秋元先生は、仏教ソーシャルワークは、
その仏教の文化なのだと思っております。それから
もう一つ、ヘラ先生の話ですが、私はバンラデシュ
出身です。

仏教は日本にチベットから渡って、そして中国、
そして韓国、そしてある日本の天皇が、日本の国
教にしました。そして神道が日本の国家宗教になっ
て、そして孔子の教えも入りました。これが福祉活
動、ヘラ先生が丁寧にご説明くださった福祉活動
です。重要なことは、仏教の全体についての意味
合いについて、ヘラ先生のペーパーから分かりま
したが、

ヘラ先生にお願いしたいのは、いくつかのソー
シャルワーク手法、東洋のものであろうと西洋の
ものであろうと、ケースワーク、グループワーク、
コミュニティワーク、組織開発、コミュニティ開
発、このような視点からソーシャルワークの本を見
て頂

きたいのです。そうして、ソーシャルワークの
教授、たとえばヘラ先生などに伺うことを通して
内容を豊かにする。そうすればソーシャルワークの
学生あるいは先生が恩恵を受けることができる
と思います。ヘラ先生へのお願いですが、また提
案です。しかし、先生のペーパーは仏教の理解を
助けるものであります。仏教全体を非常に短い
時間で、理解を与えてくるペーパーでありまし
た。お見事でした。そして秋元先生にも心から
お礼を申し上げます。松尾さん、そして藤岡先
生、社会事業大学の皆さまに、このような、また
社会福祉教育の機会を作っていただきまして、
ありがとうございます。

ヘラ サマド先生。ありがとうございます。私は
仏教の12ぐらいの教典に言及しました。そのよ
うな経典(Sutta)は、アガナ経、ヴァセッタ経
は、国の役割にも言及しています。なぜ格差が
開いているか、なぜ差別が起きているか。そして
なぜあちこちで革命が起きているか。そしてど
のような教えをもってこの状況を改善できるか。
そのようなことがさまざまな仏教典に示されて
います。現在の社会における悪を分析し、それ
がその仏教の教えと、どう関わっているかを
分析し、そしてこれのソーシャルワークへの関
連性について申し上げたつもりでありまして、
これに関係した英語文献については、必要
であれば後ほど詳細をお伝えいたします。よろ
しいでしょうか？ありがとうございます。

藤岡 秋元教授

ハタ 国際定義についてですが、われわれは
これについて取り組んでいますが、私の感
触では、難しいですね。このような国際定
義、東洋のわれわれも満足させるような
ものをつくるのは難しいと思

います。精神性 (spirituality) というのを、仏教やイスラムは強調します。ヒンズー教やキリスト教も。これらの精神性というものは、国際定義の中では言及されていません。宗教には言及されていません。その先住民や土着や、地元の知識と言っていますが、これは宗教ということでしょうか。ですからこのような国際定義を打ち立てるのは過去と比べますともっと難しくなっていると思います。現在の社会、われわれ現在のアジアは、西洋のパラダイムから以前と比べてよりはるかに解放されていますので、もはや我々に押しつけ回すのは、非常に難しくなっていると思います。わたしがどこに到達しつつあるのか皆さんにご理解頂けたかと思えます。ありがとうございました。

ヘラ ハタ先生に一つ申し上げたいと思います。5年前、この定義の問題に関わりましたが、このスピリチュアリティ、精神性を盛り込もうという話が出ました。しかし、再生について一つ申したいことがあります。わたしは四つの宗教について研究しています。1人のシャミジー、これはヒンズー教の宗教指導者ですけども、ヒンズー教では、われわれの魂は一つの人から別の人の移ると。われわれが年を取ると、そしてわれわれが死んだ後には、われわれの魂は別の人の移ると言っています。これは1923年にヒンズーの聖職者が書いた本であります。これは再生や生まれ変わりではなく、単に魂が死んだ後に他の人の移るという考え方です。私たちが例えば今日死ぬと、われわれの魂は別の人に乗り移ると、そういう見方もあります。ですからヒンズー教はその点で異なるかと思えます。ありがとうございます。

藤岡 秋元先生にご発言をお願いしたいと思います。

秋元 最近、私は新しいグローバル定義、IF、IAの定義を受け入れられるかという題名の論文を日本語で発表しました。まだ英語で書いてはいません。このタイトルは疑問文でした。明らかにわれわれはこの新しい定義を受け入れることは不可能であります。いくつか多くの理由がありますが、私は一つに1点に焦点を絞りました。それは先ほどのプレゼンテーションで申したことに関連していますが、ソーシャルワーク=専門職ソーシャルワークの方程式、両者はイコールでなければならないというのです。人権や他の深く議論をしなければならない事項はいくつもあります。しかし私はしばしば、いや、時々、「なんと傲慢なのか」といいます。何が傲慢かというと、古い定義、そして新しい定義のことです。なぜ彼(女)らは、これはIAとIFのことですけれども、なぜ彼(女)らはソーシャルワークを独占する権利を保有しているのでしょうか？ソーシャルワークは西洋の専門的なソーシャルワークでもあり得ます。しかし、なぜわれわれのソーシャルワークというものを持つことを認めないのか。ひとたび、もし、仏教ソーシャルワーク、またはイスラム教ソーシャルワーク、またはその他の宗教に根差したソーシャルワークを確立する、できれば、そしてそれを西洋のソーシャルワークと対等の位置付けにすることができるのであれば、極端なことを言えばわれわれは、その対等にしてからはじめて新しいソーシャルワークの定義、全員に平等に世界中で共有できる定義というものを確立できるかもしれせん。

そのソーシャルワークの定義というのは、IF、IAは、現在のソーシャルワークの定義も可能であるとともに、また皆さんのほうでも、イスラムの定義、あるいはまた仏教ソーシャルワーク、あるいはその他の定義によるものを可能になる。それらは全

部平等であるべきではないか。そういうソーシャルワークを平等なレベルに置けば、同等のレベルにおいて、そしてうまくソーシャルワーク、一緒にソーシャルワークという、そういう概念を構築できれば、ソーシャルワークは第3のレベル、第3の段階に至ることができる。ソーシャルワークはヨーロッパで生まれ、カナダ、あるいはアメリカに渡った、そして大西洋を越えた、しかし今は彼ら、彼らというのは、その欧米のソーシャルワークの人たちは、そのソーシャルワークはグローバルな専門職であるべきだと言っているわけですが、それは単に向こう(欧米)のソーシャルワークの普及ということではなく、われわれとしては第3の段階、異なるものにならなければいけない。単に前のものだけではなく、その他のものにも根拠を置く、基盤を置くものであるべきだということで、私はこの問題に非常に興味を抱いているわけです。以上です。

アディ ありがとうございます。非常に興味深いプレゼンテーションです。ヘラ先生、秋元先生。ご両人のプレゼンテーションも、非常に興味深い。われわれにとって、特にイスラムサイドの人間にとって興味深いものでした。といいますのも、こういったプレゼンテーションで情報強化というか、仏教の観点も、それからイスラム教の観点も理解できる。



Dr. Adi Fahrudin

それからまたキリスト教、あるいはヒンズー教の観点も理解できます。これは重要です。特にアジア、それからまた、多文化的な側面で重要な点です。といいますのも、われわれ学士レベルですけれども、イスラムソーシャルウェルフェア、社会福祉というクラスを、学生に教えています。一つのトピックが比較社会福祉を宗教の観点から教えているものです。そこで学生に対し、教えているわけですが、学生がソーシャルワーク、社会福祉について宗教の観点からの理解ができるようにしております。このセミナーでは、ハタ先生とも話をしたんですけども、過去の実践、イスラムの組織、その他の話をするとします。

私、思うのですが、次回のミーティングでは、その類似性、それからまた相違点、比較的な価値観とか、考え方とか方法論とか、そういったものを仏教、イスラム教、キリスト教、道教、ヒンズー教、その他、儒教とかそういったものも含めて考えればどうかと思います。2008年に私、ザンプワンガーで会議に参加しました。そこで価値観、それから考え方、哲学について話し合いをしたのですが、ヘラ先生、そして秋元先生は、価値観、それから考え方、その仏教ソーシャルワークの、そういった側面を語られたわけでありまして、実践における側面というのは、あまりなかったと思います。ということで次の会議においては、そういう価値観とか、イスラム教の、あるいはまた仏教、そしてキリスト教、ヒンズー教、あるいは儒教、神道の、そういう類似性、それからまた考え方、それからまた方法論、そのソーシャルワークのいわゆる実践。そういったものの類似性と価値観等について、話をすればどうでしょうかというのが、まず第1点。

それから二つ目は、秋元先生に対するコメントですけれども、仏教ソーシャルワークは、こんにち専

門職とは認識されていないわけですが、今後次はどうなるのでしょうか。今は仏教ソーシャルワークは、専門職とは考えられていない。職業とは考えられていない。そしてスキルとも考えられていない、ということですが、次の時代においてはどうでしょうか。これは一つの職業になりうるのではないか。仏教ソーシャルワークというのは、欧米型とは違うもの、あるいはまたイスラム教型のソーシャルワークとは違うものに、なり得るのではないかということです。

それから次のコメントは、私、ヘラ先生からお聞きしたいと思うのですが、非常に興味を持ちました。ヘラ先生は段階的にソーシャルワークは発展していく、発展すると、若い人から、それからまた成熟した人間、僧侶ですね。そういう話をされました。これもまた西洋型のソーシャルワークに類似していると思うんです。といいますのも、西洋型のソーシャルワークにおいては、若いソーシャルワーカーはまず学士を取る、そして次は修士を。中堅ソーシャルワーカーはマスターでなければならない。それからまた高度なソーシャルワーカーになっていくという側面があるからです。ですからもうちょっと私としても、探求しなければいけないのが、その内容的には若い僧侶、あるいはまた中堅の、あるいはまた高僧の僧侶、おそらく内容が違うんだろうと思います。あるいは若いソーシャルワーカー、中堅のソーシャルワーカー、それから高度なソーシャルワーカーと同じかもしれない。

それから最後のコメントは、私のいうところのイスラムにおいては全て皆さんがやること、われわれがやること、考えることは、神のためだと。神のためというのです。やること、考えることは、全て神のためであるというのですが、仏教においては、そういうのはあるのですか。その行き先、目的地はど

こなのでしょうか。それは神ですか、それとも涅槃ですか。涅槃の境地ですか。涅槃ですか。イスラムではわれわれは、スルガ (Syurga) に行きます。われわれは全てやることはスルガ、神のためということなんです。それは類似性があるのかもしれませんが。西洋型のソーシャルワーカーにおいては、全てはクライアント、利用者のためにやる。クライアントのために仕事をする。クライアントが社会的機能を取り戻させるために。クライアントの社会的な機能だけでなく、イスラムにおいてはわれわれクライアントに全てのことをやります。ムスリムとあるいは他の宗教とも同じかもしれませんが。その行き先、目的地はタクワ (Taqwa) なんです。タクワというのは、全て神のためということなんです。この涅槃、スルガ、それからタクワ、その欧米ソーシャルワークにおける社会的機能についてのこういった議論はわたしは非常に面白いと思います。

それから最後に、私がもう一つ関心があるのは秋元先生のプレゼンテーションで、ベトナムのケースのことをおっしゃいました。長期的な話です。長期的な宗教の話がありました。ベトナムの仏教の話がありました。とてもおもしろく拝聴いたしました。私たちの国のイスラムというのは、かなり長い歴史を持っていると思っていましたけれども、インドネシアでは、まだまだそのソーシャルワークの中では根を張っていないと思います。

藤岡 ヘラ先生、どうぞ。

ヘラ ありがとうございます。アディ先生、ありがとうございます。とても面白いです。最初にコメントをしたんですけど、秋元先生の件に関してなのですけど、この極貧の方々、アジア、アフリカ、ラテンアメリカにも本当に貧しい方々がた

くさんいらっしゃいます。そして苦しみを持っていらっしゃいます。ですのでこういったシステム（ソーシャルワーク）というものを独り占めしてはいけません。ですから私たちは、私たち自身のソーシャルワークのシステムをつくっていく実践、それから理論、そして制度をつくっていかねばいけません。基本的な哲学というものを構築していかなければいけないと思います。仏教の中でもイスラムの中でも、他の宗教の中でもつくっていかねばいけません。それからもう一つ、そういった国々、つまり豊かな国々の中では資本主義がありますけれども、資本主義社会の中でたくさん問題があります。家族が分断されています。また売春ですとか、あるいは貧困もそういった所で広がっています。いろんな問題が先進国でもあります。人間の社会というものは、やはり動物の社会といってもいいと思います。ですがアジア、アフリカ、ラテンアメリカの方々が、やはり苦しんでいる方々が多いと思います。ですから私たちは、ソーシャルワークというものを構築して行って、彼らを助けなければいけないと思っています。今後、そういった議論をもっともっとしていかなければいけないと思っています。

2点目に申し上げたい点なんですけれども、アディ先生がおっしゃいましたように、将来スリランカでもそうだと思いますが、それから日本でもそうだと思いますけれども、コースの大きな改革、再興を行う前に、まずソーシャルワークのコースを私たちの宗教に関連した形ではじめることが必要ではないかと思います。そして3点目ですが、アディ先生が西洋のソーシャルワーカーと仏教の僧侶の比較をしていらっしゃいましたけれども、僧侶は自分たちの欲望というものを抑えています。そして憎しみというものも抑えています。そして最終的に慈悲心が

高くなっています。彼らの人生というのは、社会を変えるために使われています。若い僧侶から始まって、本当に上級の僧になっていくわけなんですけれども、世の中を変えようというふうに努力をしているのです。ですが近代のソーシャルワーカーはリタイアした後、もう給料をもらわなくなります。リタイアしてしまいます。ですけれども仏教のソーシャルワーカーは全くそういったリタイアという考え方はないのです。本当に100歳になっても高齢になっても、人々のために奉仕をします。全く何ももらってなくても、ボーナスはもちろん給料もらいませんけれども、高齢になっても仏教のソーシャルワーカーというのは、仕事をします。他の人たちのために奉仕を続けるのです。

そして最後の点ですけれども、この行き先、目的地というお話ですが、これイスラムに関しては、私はあまりよく分からないんですけれども、もちろん今、情報を吸収していますけれども、行き先はタンハ (Tanha) を減らすこと、私たちの執着というのは、私たちの欲望に関連しています。そうですね？もしあなたが精神的欲望、エゴイズム—あなたの親戚、妻その他とも強く結びついている—を減らすならば、あなたはこの欲望、憎しみを減らす。これがわたしの兄弟で、私の父で、私の叔父さんで、これが私の財産で等々、というふうに見ることは出来なくなる。他の人たちとは非常に違った人間になる。エゴイズムをへらす、であるのでわたしたちの宗教では天国というものはない。神はいない。アラハット (阿羅漢) になったあとには、タンハ、その欲望というものを減らす、なくすことができる。全くその後には贅沢な、高貴な、天国の生活はもうありません、生というものがなくなります。ゼロ、無です。すなわち、われわれのすべてのこれら欲求、欲望はそれに結びついているということです。それがなぜ

私たちはエゴイズムを持っているのかの理由です。よろしいでしょうか？明日、先生のプレゼンを伺った後に、もう一度お話をさせていただきたいと思えます。ありがとうございます。

秋元 私は二つの点について申し上げたいと思えます。まず1点目はプロフェッショナリズム、プロフェッショナルなステータスに関してです。もちろんプロフェッション、あるいはプロフェッショナルに関しましては、いくつかの意味があると思えますけれども、その中核になっているもの、つまりプロフェッション、あるいはプロフェッショナルの中核的な意味は何かというと、欧米のソーシャルワークに関しては、大ざっぱに言って三つの意味があると思えます。一つは仕事、職業です。プロフェッションというのは仕事のうちの一つのカテゴリーということができると思えます。ですので仕事、職業ということになります。つまり報酬を得るために行うということです。生計を営んでいくためにやるのが仕事、職業です。日本でも専門職、ソーシャルワーカーというのは、ボランティアを見下しているところがあると思えます。実践の中で自分たちのほうが上だと思っているところがあると思えます。どうせ彼らはボランティアだから、私たちは専門職だからと考えているかもしれませんが、違いはどこなのでしょう。

違いは何かというと、報酬をもらっているかどうか、ということなのでしょう。ですから私には、これはちょっと違和感があります。そしてこのプロフェッション、あるいはプロであるソーシャルワークのプロという意味の本質ですけれども、その前にソーシャルワーカーというのは何なのか、ということをもっと考えなければいけません。これは“一つ”の仕事、英語でいうと、aが付いているのです。い

ろいろな組織があつて、機関もあつて、コミュニティワークをやっている人たち、ケースワークをやっている人たち。あるいは高齢者のための、あるいは障がい者のための機関などがあります。さまざまな機関や組織がありますけれども、これを一つにまとめて、社会の中で、より強力な立場を築いていこうという努力であります。1955年に一つのNASWという組織がアメリカでつくられました。ですけれども、専門職というものは職業のうちの一つの職業ということに過ぎません。そしてプロである、ということは社会的な地位、あるいは経済的な地位、それからスキルも上げていきたいということを彼らは考えているのです。

ですけれどもプロフェッション、プロフェッショナルには辞書によりますと二つの他の意味があります。スキルが高いという意味があります。サービスの質が高いという意味があります。それがプロフェッショナルのもう一つの意味です。そしてもうひとつはソーシャルワークの職業は、品質保証がされてないとならないという意味です。資格や免許が必要で、公的機関によって保障されている人々に対して、品質保証がなされている。そのようにして、クライアント、サービス受給者が良い品質のサービスを受けられるということを担保する、というわけです。

意味はたくさんありますが、中核的な部分、避けられないところは、最初の意味です。その意味では将来においても仏教の僧侶はプロフェッショナルにはなれないわけです。僧侶たちは、その提供するサービスの水準を上げることはできるかもしれませんが。そして自分たちのコミュニティの中で、何らかの資格を発行することは可能かもしれませんが。それは仏教、僧侶側の選択するところではありますが、しかしながら彼らにとってソーシャルワークは職業とはな

り得ません。

二つ目の点ですが、ベトナムのケース。今日、仏教ソーシャルワークについて話したとき、私は意図的にその概念レベルで、いわゆる理念型、非常に純度の高い“仏教ソーシャルワーク”について話していました。しかしながら各社会の文脈においてのソーシャルワークにおいては、仏教ソーシャルワークは、他の文化環境から切り離すことはできないのです。例えばベトナムでは、もちろん仏教が非常に影響力が強いものでありますが、それと同時に他の社会的要因がたくさん環境の中にあります。よって仏教ソーシャルワークグループの中にも、例えばスリランカのソーシャルワークの話、ネパールのソーシャルワーク、ミャンマーのソーシャルワーク、ブータンのソーシャルワークの話をしてはいますが、各国でそれぞれの社会の中で存在している仏教ソーシャルワークは、異なるわけです。しかしながら私たちの一義的な関心事項というのは、まずこの概念的枠組み、仏教ソーシャルワークの概念的枠組みというのを確立することにあります。

具体的に考えると、個別の事例ごとを見ますと、それは内容は異なるかもしれませんが、われわれの中でも、仏教ソーシャルワークは何かという合意形成はされていないかと思います。これは私見でありませぬ。

ワンワディ これについて発言してもよろしいでしょうか。

藤岡 どうぞ。

ワンワディ 今のご説明ありがとうございます。ヘラ先生、秋元先生。ちっちゃい質問が一つあります。これは僧侶の教育訓練についてです。若い見習い僧

から、より上級の僧に上がっていくには、どうなるのか。これはわれわれ全員の理解のために有意義かと思ひます。この若い僧侶から上級僧侶に上がっていくには、どのような修業をするのか。

そして秋元先生へのコメントが次ですけれども、私の頭の中では、仏教ソーシャルワークは僧侶に関連するものだけではなく、もちろん僧侶は報酬、つまり賃金を人々から徴収しません。それはわれわれもよく分かっています。そして実践上はプロフェッショナルな実践と同じように見えます。私の頭の中では、仏教ソーシャルワーク、イスラム教ソーシャルワークはフェミニストのソーシャルワーク、またはラジカルな革新的なソーシャルワークと同じかもしれませぬ。仏教のソーシャルワークというのは、一つのソーシャルワークの視点として理解しても良いのではないかと思ひます。イスラム教ソーシャルワークも同様に。

最後のコメントですが、今のお答えから私が導いたことですが、次のディスカッションでは仏教、イスラム、ヒンズー教、そしてキリスト教が、どのようにその対象とする受益者に、どのように奉仕するか。若者に対して、女性に対して、高齢者に対して、障害者に対して、子どもに対して、それぞれの対象グループに対して、どのようなサービスを提供するのか。その宗教によって手法や理念が違ひかもしれません。ありがとうございます。そこら辺を検討することも必要かと思ひます。

ハタ いくつか申し上げたいと思ひます。今ワンワディさんがおっしゃったことですが、この仏教のソーシャルワーク、つまり定年がないということです。そして西洋ソーシャルワークではある。私の理解するところ。間違っていたら教えてください。仏教の僧侶にとっては、それは彼ら自身の内面的な

成長のためである。それはその僧侶の階層、階級や学歴にかかわらず、その高学歴者でも精神的には貧困かもしれません。乏しいかもしれません。このプロフェッショナルリズムに関連してですが、大昔に博士号を取ったとき、論文を書きました。そのときにプロフェッショナルリズム、この社会福祉においてのプロフェッショナルリズムの必要性を私は説いていました。そして論文についての口頭試問のときに、質問が上がってきました。その質問というのは、ブッダやモハメッドや、イエス・キリストをどう説明するか。彼らはソーシャルワーカーか、そして彼らはプロフェッショナルかと、そのような質問をされました。

これは本当に考えなければならない点でありまして、IA、IFの問題にこだわらず、このようなものをソーシャルワークと同等のもの、そしてそれにとって代わるものとして検討しなくてはいけないと思います。おっしゃるとおりだと思います。

ヘラ ハタ先生に100パーセント同意します。彼のいう通りだと思います。この精神性のことですけれども、年を取るにつれて、そして階層が上がるにつれて、その精神的な面も充実されていくわけです。サイリアという僧侶の教育がありますが、パーリの仏典にはさまざまな規律があります。パンチャ・シーラというのは五戒とありますが、五つの戒めでそれを守らなければなりません。五つありまして、そしてサーマネラ、見習い僧侶になりますと、これは法服を着ています。僧侶の衣を着ています。そしてその上の階層になりますと、守られなければいけない戒律が10になりまして、そして最上級になりますと1000万の決まりがあります。例えば小さな枝一つも折ってもいけない、そのような細かい規律に拘束されます。非常にこれについてはおもしろい論文

がありますので、いずれ英訳して、皆さまにご提供します。そしてキリスト教ではほとんどのソーシャルワーカーは、ソーシャルワークの学校や教育機関で訓練を受けています。西洋のソーシャルワークと、キリスト教のソーシャルワークというのは、あまり差がありません。つまり教育訓練を受けたソーシャルワーカーが、教会の下で活動をするわけです。だから西洋ソーシャルワークとキリスト教ソーシャルワークあるいはローマカトリック教のソーシャルワークその他—この宗教には2万6000の宗派がありますが—の間にはほぼ違いはありません。そうですね？しかし、イスラム教や仏教のソーシャルワークについては私たちは根本から考えなければいけません。ですね？ですから結論としては、まず私たちは何がアジアのすべての宗教の基本的な点であるかを考えなければいけない。それから二つ目に要はソーシャルワークのコースで何を教えるべきか、これをご覧下さい、常に西洋人のものです。欧米主義の場合は、民族中心型の感覚です。アジア、アフリカ、ラテンアメリカの国々は全てレベルが低いと。我々の科目は社会学です。彼等は他人に文化人類学的見方を押しつけている。同様に、彼等はそのような権力をふるいますが、しかし今やそのような権力を破る時です。そしてわれわれ自らの科目(学問)を、そしてソーシャルワークの科目範囲を発展させなければなりません。ほとんどの苦しみはアジア、アフリカ、ラテンアメリカにあるのですから。ですからわれわれもカリキュラムを変える必要があります。それから方法論を変える必要があります。われわれの宗教的な哲学に基づいて。それが私の考え方です。以上です。ありがとうございました。

藤岡 ありがとうございます。では...

サマド タイの方、他の方々からちょっと時間を奪ってしまって申し訳ないんですけど、私、ちょっと思ったんですが、秋元先生、それからヘラ先生の話聞いておりました、概念的には、その僧侶は自らの全ての人生を献身的に使っている。ですからこれは職業ではない、人生全体を人のために献身してる。単に仏教徒にだけではありません。他の人も行っていい。これが一つ。それから私の研究の中には四つの宗教について四つの章がある、これには仏教の章もあります。寺院の教育サービス、それから医療サービス、社会、文化的なもの、リクリエーション的サービス、家族福祉サービス、それから社会管理サービスも寺院のなかにあります。私の国の状況を書いたものですが、それからまた、この献身ということについては、アメリカのケースを申し上げたいと思います。社会的な職業においては、アメリカですけれども、そこでもやはり献身が見られます。といいますのは、私の国においては、学生はあるテーマを選ぶということではできません。ただアメリカでは職業において、その献身があると。私、2回、客員教授としてアメリカに行きました。そこで学生の面接をするんです。どうしてこのソーシャルワークを勉強したのか、ということを知ります。2人の女の子、1人の女の子が言いましたが、「私はホテルで仕事をします。人によって飲む、おかしくなる。キスをする。私は若い女の子だから。だから私としては、家族福祉の仕事をして、アルコール問題をなくしたい。そういう献身を考えてるということで来ている」。それから別の女の子、その父親は監視カメラというか、いろいろありますよね。置いてある所。CCTV、セキュリティカメラ。父親がお風呂とか全ての部屋に、そういうちょっとおかしなお父さんだと言うんです。カメラをいろんな所に設置している。私はソーシャルワーカーになりたい。そして

家庭ソーシャルワーカーになりたいと言うんです。そういう私は二つの経験をしました。職業においては、当然献身もありますけれども、しかし僧侶というのは、本当に貢献だけです。こういう女の子のほうは、家庭ソーシャルワーカーとして、あるいはまた、アルコールのソーシャルワーカーとして、お金をもらって仕事をします。人々の福祉のために貢献もしますが。そういうふうに私は感じをしております。東洋人として秋元先生、私にとって長老みたいな人で、彼も私を愛してくれます。ヘラ先生は非常にうまく仏教の歴史、宗教的な機能、活動、献身、それから活動についてご説明をいただきました。以上です。

藤岡 有村先生のほうからも、ぜひご質問、あるいはコメントをいただければと思います。

有村 貴重な先生がたのご議論を、大変興味深く聞かせていただきました。私自身も、妻は僧侶の、日本ですから結婚もしますので、僧侶の娘ですし、仏教徒でもあるわけです。一方で大学の授業の中で、それぞれの国々の宗教的な背景とか、人口的な背景とか、そこら辺は違うとは思いますが、日本の場合ですと、国の施策としては宗教と切り離している。一方で学生さんの顔ぶれを見ていると、例



有村 大士氏

例えば社会福祉原論という授業があるんですけども、その顔ぶれを見ていますと、やはり時々、例えばカトリックの方がおられたりとか、あるいはさまざまな宗教の専門性、特徴を持った方々、あるいは他の国々からの留学生もいたりするわけです。そこでやっぱりどういうふうに宗教というものを伝えるか、というところなんです。ちょっと議論の枠から少し外れてしまうのかもしれないんですけども、ちょっとお話をしたいと思ってまして、例えば先ほどもアフリカであったりとか、南米の方々に、抑圧されてたりとか、貧しい方々がいっぱいいるというお話もあります。でも例えば、そこら辺の地域に行ったとしても、そこでのやっぱり文化の形であったりとか、宗教の形であったりあるわけです。

私たちがやっぱり尊重して、自分たちのことを尊重してほしいと思う以上に、やっぱりあちらの方々もお持ちのところもあるわけです。やっぱり人っていうのは、状況とか環境が良い方向に変わることによって否定はしないけれども、自分自身が変わることに関しては、すごく抵抗があるものだと思います。そういう学生たちの、うちの大学も日本なので、日本人が多いですが、学生さんの顔ぶれを見てみると、どういうふうにこのソーシャルワークの目的を伝えるべきなのかということで、すごく難しく感じる場所があるんです。私が持っている授業は、ソーシャルワークの基本に関わる場所かなと思って授業をしているんですが、今、もちろん宗教とか歴史の話もするんですが、結局どこまで戻ればいいのかと、結局なぜ人間が人間として成り立ったのかとか、例えばチンパンジーと人間がどういうふうに分化してきたのか。どういうふうに、じゃあその人が生きていく中で、人を助け合ったり、お互いを認め合うことをやっていったのか、例えば氷河期にどうして人類が生き延びてきたのか、というようなと

ころから振り返っていかないと、やはりその宗教の話というのは、どうも超えられないと思って、個人的にはジレンマを感じているところです。だから今日のお話の中で、やはりその中の答えとして、一つ宗教ということがあるなと思いました。その社会にとっては、すごく強いメッセージを持ったものだと思う一方で、やはりじゃあ特に他の文化を持った人たちも含めて考えたときに、その宗教というものをソーシャルワークをどう位置付けていくのか。もちろん社会のものとしては、よく分かるんですけども、やっぱりそれを逆にアジアから発信していくというふうになったときに、それをどう伝えていくのかというのは、今日と明日の議論をすごく勉強させていただこうと思っているところです。

今日のお話のところで、コメントになるのか、質問になるのか分からないんですけども、やはりその人だったり、社会が持っている強さと良さを伝えること、本当に大事だと思うし、それが基本だと思うんですけども、やっぱり若い教員の教育上の疑問というところでも、構わないんですけども、その部分からどうやって目指すべき方向性ですよ。そこを目指していくのかっていうところが、すごく今日のお話の中で聞いて、先生がたにも聞いてみたいところだと思いました。いろいろ長くなってすみませんけれども、いろいろいつも考えているんですけども、例えば資本主義といったときに、やはり私はお金が循環していくシステムと思っていました。だけどもある私のゼミ生の卒業論文で、多様な参画者がいるような環境です。共生施設みたいな、お年寄りもいて子どもがいて、さまざまな障害を持った方がいて、という施設を分析したものがおりました。その子が最終的に分析してきたものが、そこではお金とか何かではなくて、人々が喜びを交換する。お互いに互酬性というか、互惠性ともいいますけれど

も、喜びを交換する、それは直接的であれ、間接的であれ、喜びを交換するというをしているという結果が出ていまして、宗教の話で考えてみたときに、自分のためとか、人のためっていうのもあるんですけども、やっぱり私たちが目指しているものっていうのは、今日の議論の中では、それぞれの形はあるけれども、まだまだ私としては共通性があるんじゃないかというところは信じたところでございます。ちょっとここに少しお話をさせていただいた次第です。ありがとうございます。

ハタ 有村先生、ありがとうございます。ちょっとマレーシアでやっていることをご披露したいと思えます。西洋でのソーシャルワークというのは、徐々に確実に私たちの伝統から、私たちが隔離していると思えます。ソーシャルワークの中では宗教は教えておりません。ソーシャルワークの中で精神性 (spirituality) を教えておりません。これは私が興味を持っているところなんですけれども、ソーシャルワークと精神性というものを、私たちのカリキュラムで始めました。この中で、宗教を私は導入をしております。少なくとも私たちの国の四つのイスラム、ヒンズー教、仏教、それからキリスト教、この四つを含んでいます。そして生徒たちに、こういった信仰に少し触れてもらおうと、そして比較をしてみようということをやっています。もちろんたくさんの違いがあります。ですけれども、先生がおっしゃいましたように、たくさんの共通性があるんです。精神性に関しては、この宗教共通しています。仏教の特徴、イスラムと本当に共通しています。もちろん言葉は違いますが、エッセンス、本質は同じなんです。ですから、私たちは国々の状況を見て、私たちのルーツをもう一回見つめ直して、ルーツを実際にもう一回社会の中に取り戻していかなければ

いけないと思っております。日本はどういうふうにすべきだということは全く分かりませんが、日本はそれをやり始めたほうがいいんじゃないかと思っております。他の国もそうです。

ソーシャルワークは専門職で、本当に隔離されているような感じなんです。世俗化しすぎていて私たちの学生も、本当にジレンマを感じています。いろんな原理、エンパシー、それからジャッジメンタルな原則、そういったものにジレンマを感じています。例えばホモセクシャルのことはいかがでしょうか。イスラム教に関しては、本当にはっきりした立場があります。ソーシャルワーカーとして、学生は本当に頭が混乱しているかもしれません。コーランが言っていることを言うべきか、言わないべきか。もし言うとしたら、私は判断をしている、ジャッジメンタルであるというふうに思われてしまうんじゃないかと。そういうふうを感じているんです。例えば交通法ですけれども、これは赤信号を無視したら、これは交通法違反であると学生に言ってもジャッジメンタルとは言われません。ですけれども、宗教に関しては、これは心の問題ですので、これはジャッジメンタルと言われます。ですから生徒は本当に頭が混乱しています。ですけれども、私たちがやらなければいけないのは、本人の意思でクライアントがこうなっているのであれば、私たちはとやかく言うべきではないということも言うべきです。カンダ先生というスピリチュアリティを研究している先生がアメリカにいらっしゃいます。ソーシャルワーク大学教員の間で調査を行っていますが、クラスの中では私たちはそういった精神性とソーシャルワークに関しましては、触れていない、あまり知識を持っていないというよりその話題に関わっていないと、そういうふうには先生がおっしゃっています。以上私の研究に関連したことを、ご披露いたします。

た。

ヘラ 有村先生、先週、アメリカの一つの学校で16人の銃撃があった。そして16人が亡くなっています。一人の学生が両親その他を殺しました。アメリカでは銃が自由に手に入るからです。金があったら、こういった悲惨なことを予防するために、ソーシャルワーカーを雇う。こういったことは、本当にいいんでしょうか。社会の道徳に関して、この精神性というのはどうなんでしょうか。1人のソーシャルワーカー、あるいは1人の人を、こういった非常に厳しい困難な状況の中において、これを防止しろ、というふうに言って、これは適切なんでしょうか。ソーシャルワークとそれから精神性をつなげていかなければいけないと思います。動物、あるいはサルは、彼らは考えるということではできません。それから認知力もありません。文化もありません。これは自然の一部なんです。自然が動物をはぐくむんです。私たちは文化的な動物であります。それから社会的な動物です。ですから私たち人間は考えることができます。そして実践をして、私たちの人格を形成していくことができます。そして精神性を作っていくことができるんです。私たちの活動は、宗教に関連したところがあります。ですからやはり宗教の要素というものも、ソーシャルワークのカリキュラムの中に組み込んでいくことが必要ではないかと思っております。日本の社会の発展を見ても、天皇がいます。それからまた、中心的な社会の中での価値観というものが日本にはあります。徳川も宗教というふうについていいかもしれません。

そして新しい考え方を日本は作っていくことができます。だからこそ日本は、他のアジアの社会とは若干違っているんです。そして行動規範なども大切にいらっしゃいます。ですから私たちはこのような

宗教の道徳観というものを、やはりこの教育のカリキュラムの中に組み込んでいくために、何らかのことをしなければいけないと私は思います。

ワンワディ 秋元先生、ヘラ先生、ありがとうございます。仏教ソーシャルワークについて、私はタイの中ではイスラム教徒で少数派です。そして私は小中学校、高校、それから大学で教育についての研究をしています。タイの中では八つの大学、タマサート大学も含めてソーシャルワークを教えています。イスラム教ソーシャルワーク、仏教ソーシャルワークに関してはコースはありません。私たちはイスラム教のソーシャルワークに関しては、選択制で教えているところもありましたけれども、タマサート大学では、イスラム、あるいは仏教のソーシャルワークに関するカリキュラムはありません。他の一つの大学では、選択制で教えています。ですけども強制的に取らなければいけないということはありません。

秋元先生、仏教ソーシャルワークに関しましては、私のタイ人の友達から聞いていますけれども、彼女の仏教ソーシャルワークの定義からです。四つか五つのケーススタディも続いています。彼女が言っていたのは、寺院、あるいは僧侶というものが仏教のソーシャルワークの中心的な役割を果たしている



Assistant Prof. Wanwadee Poonpoksini

いうふうに言っています。私はイスラム教徒です。この彼女のペーパーを私も読んでいます。私は仏教ソーシャルワークというのは、ソーシャルワークではないと思っています。というものも、タイでは僧侶、あるいは寺院は AIDS の人たちを助けています。ソーシャルワーカーはこういった HIV の方々を、なかなか支援することができません。寺院、僧侶はではこうした支援をしています。それから 2 点目ですけれども、タイで大事なことは数年前に起こったことなんですけれども、マスターと学部の僧侶の大学があるんですけれども、マスターの大学院で生と死に関して教えています。やっていることはソーシャルワーカーのように見えます。病院の生と死に直面している人たちなんです。死の前に何かやる生について学んだ僧侶、学生を招き入れる。ほとんどの人は大学でマスターを学ばなければなりません。私はタマサート大学では、僧侶は学部で学ぶことができませんけれども、マスター、それからドクターで僧侶は学ぶことができるようになっています。そういったコースは用意されています。

最後の点になりますけれども、これはタイでは、僧侶と寺院に限られたものでありますので、私はちょっと納得がいきません。ソーシャルワークをやっている仏教徒の人たちは、先ほどヘラさんも、この内面的な成長のためにやっているとおっしゃっていますが、この点をもう少し追求、検討できるかと思っています。

藤岡 フィニッシュの時間がもうすぐ迫っているんですが、最後にヘラ先生、それから秋元先生に、きょう出てきた疑問とか、先ほどのワンワディ先生からのコメント、有村先生からのコメントも含めて、お話しいただければと思っているんですが、会場のかたがたからも、ぜひご質問やコメントをいただけれ

ばと思いますので、いかがでしょうか。限られた時間ですので、質問をどんどん受けて、最後にお二人から、まとめの話をいただければと思っているところですが、いかがでしょうか。

大和田 大正大学の仏教学研究科、博士満期退学の大和田と申します。貴重なご講演ありがとうございました。私、スリランカの主な仏教のテラワダ仏教を研究しております。なかなかテラワダ仏教に関する方々が行うそのソーシャルワークというものの実態を知る機会がなかなかないものですから、ヘラ先生にご質問させていただきます。一番最後の 18 ページのブディストソーシャルワークのステップスの所でヘラ先生にご質問がございます。こちらの青年僧から僧侶になるまでの段階で、かっこソーシャルワークというふうに、1、2、3、4、5 回書かれておまして、こちらですと通常ですと、修業となりますと、まず托鉢を行う、五戒を守り、というところが主な活動といえますか、修業になってくるかと思うんですが、ここでいう、そのソーシャルワークというのは、托鉢ですとか、そういったものも含めてのソーシャルワークというふうに考えてよろしいのでしょうか。

藤岡 質問をまとめて、最後に 2 人からいただくので、もし他に質問があれば、それでよろしいですか。ご質問は。じゃあヘラ先生には、後でお答えいただければと思います。他にご質問ありますか。ヴィラークさんから手が挙がってましたね。

ヴィラーク 二つ質問させていただきたいと思いません。両方の先生にです。最初は非常に基本的ですが。この会議では宗教をどうやって定義するのでしょうか。そして二つ目の質問は、ヘラ先生は、最後のコ

メントで道徳観、そして精神性、そして西洋のソーシャルワークには、その二つの概念が欠けているとおっしゃっていました。そして秋元先生は、これは18ページ、トップのスライドに仏教ソーシャルワークの枠組みというものを提示なさいました。私はこの5点目に関心があります。仏教ソーシャルワークは社会問題を人間の欲望などを背景にしたものと定義する傾向があると、ご指摘がありました。そして社会的な変革だけではなく、個人の変化も必要であるというのが前提になっているかと思えます。私は西洋のソーシャルワークは、このような問題に、焦点が十分に当てられていないとは思いません。リッチモンドの定義、早い段階のソーシャルワークの定義ですけれども、そこをデベロップパーソナリティ、個性を成長させる、という文言がありますけれども、これは内面の成長、そして人間の愚かな部分を正していく、というのとどう違うのでしょうか。ありがとうございました。

菊池 先ほどタイの先生から、仏教ソーシャルワークは、納得ができないというご意見をいただきました。そういったご意見もとても貴重だと思います。そこで一つご質問がございます。仏教ソーシャルワークに納得がいかない場合、先ほどお話にありま



菊池 結氏

した、お寺でHIVの患者さんを助けているとお聞きしました。それではそういったお寺で、HIVの患者さんを助けているような活動を、どういうふうにかテゴリーをして、どういうふうにお呼びになっているのかということ、もし教えていただければ大変勉強になると思います、ちょっとご質問をさせていただきます。

藤岡 ありがとうございます。先にワンワディさんに、その質問に答えてもらいましょうか。

ワンワディ 私の理解のために、仏教ソーシャルワークについてこの報告書の中の論文を読みました。タイのソーシャルワークについて、代表的な視点が書かれていたと思います。この論文の中で、四つ、五つのケーススタディに基づいて、仏教ソーシャルワークを、僧侶による寺院を中心としたものと定義されていたので、その僧侶と寺院だけというのは、私にとっては納得いかない部分であります。もっと幅が広いと思います。やはりこれは内面的な成長に関連するもので、あるタイの寺院の活動は、この論文の中で言及されています。タイではHIV、AIDSが多発してしまっていて、深刻な問題になっていて、療養所や病院は患者さんの世話はしきれていません。死ぬまでこの患者さんの末期のケアを提供できるのが、寺院となっています。仏教ソーシャルワークは、ソーシャルワークではないのです。タイではソーシャルワーク以上のものであります。寺院は社会のために、それ以上のものを提供し、それ以上のものが、その活動によって満たされるのです。

藤岡 それからラマニー先生からコメントいただけてないですが、何かあればいただくとうれしいのですが、よろしいでしょうかね。ラマニー先生から何か

一言いただければ。明日もありますので、もしなければ、明日またあわせて、ご発言いただければと思います。よろしいでしょうか。それではひょっとしてまだあるかもしれませんが、時間もちょっとまいっておりますので、申し訳ないですが、ヘラ先生、それから秋元先生にまとめてお答えいただくと、今日の一つのまとめといたしますか、できるだけ短くといっても、ちょっと長くなるとあれですが、コメントいただければと思います。どうぞよろしくお願いします。

ヘラ ありがとうございます。最初にお答えしたいのが、男の方のご質問、その個人の個性の成長ということですが、国によって、それからまた社会環境によって異なる個性が誕生します。例えば個性、個人の違う側面、例えば社会の中にもいろいろなグループがあります。それが例えば近代化、あるいは西洋化、あるいは資本主義、そういったものによりまして、非常に落ち込む人がいると、ソーシャルワーカーとしては、そういう鬱というか、そういう社会における混乱に対応する、すなわち価値の合理化を図るとする、そして人の生活を調整しようということがあります。が、特にアジアにおきまして、東洋におきましては、個性の成長というのは、直接こういう社会の精神性、それからまた道徳性にも直接関係しているわけです。そういう意味で、工業化の以前、西欧においてはそのような考え方というのがありました。しかし工業化によって変わってしまった、あるいはまた工業、資本主義において、そういう以前の考え方が変わってしまったというのが、私の主張です。

二つ目に博士課程の学生の方の質問ですが、わが国におきましては、仏教ソーシャルワークというのは、封建社会の前は、寺院を中心にした個性、成長

プログラムがありました。すなわち法と秩序は寺院が維持していた。社会的な道徳性、それから個人の成長、それから社会化というのは、寺院が行っています。こういう教育制度、それから手紙を書くとか、あるいはその識字、字を読める、書ける、教えるのは寺院、それから音楽、劇、全て寺院が行っていました。芸術、あるいはまた建築もお寺、それからまた医療、医療の側面も寺院が担当していた。それからまた天文学、占星術、そういったものも寺院の担当、人間の生活、それはその精神性に関係する、そのやはり寺院が役割を果たした。それからまた僧侶そのものが、社会を変えていた。それに加えて、その社会でいろいろな人たちは仏教の倫理を追求していた、ということで、そういった形で社会を変える。今でもスリランカに行きますと、全く行いは違います。ブッダの生まれた日のための満月のポヤ・デー、みんな飲み、食べ、自由に飲んだり食べたりできます。貧しい人でも、富める人でも、誰にでもあげるわけです。外国人でも誰にもかかわらず、全て出す。食事、飲み物、全部提供します。ということは、そういう何千年のこういう伝統がある。満月の誕生日にそういう慣行があるわけです。それから、ですからこういう大きなパゴダ、それからまた、大きな貯水池、それからまた労働交換プログラムというのがありますけれども、いわゆる資本ベースではなくて、本当にメリットベースの労働交換プログラムというのがあります。同じように人を教育訓練します。社会一般の人も仏教を超えた形で僧侶に追随しようとする、そういったやり方をしております。

3番目のご質問、タイのケースでありますけれども、先生のほうから、今、10月のお話がありました。先生ご自身が、セッションの終わりに仏教ソーシャルワークを取り込まなければいけない、受け入れなければいけないといわれました。タイのソー

シャルワーク協議会の会長として、ジェンダー問題
その他、彼女のご自分の本心はその会議ではお出し
になりませんでした。それは彼女の役割でした。私
は、(彼女のペーパーの主張にこれから) 答える(論
文を書く)のですけれども、すでに私もいろいろと
資料を集めています。彼女の論文に答えるためのい
ろいろと経験的な証拠もっています。日本のソー
シャルワークのジャーナル、本あるいは論文に書き
ます。タイの主張に対する証拠についても、そこで
出せるかと思えます。以上です。

秋元 二つのご質問にお答えすべきかと思えます。
まず第1はヴィラークさんのほうから、二つの質問
がありました。一つは宗教とは何かということ。こ
の質問は、日本社会事業大学、このセッションの主
催者に投げ掛けたいと思えます。「宗教とソーシャ
ルワーク」、そのタイトルは、大学のほうから与え
られたものです。非常に大きな、非常に基本的なト
ピックです。われわれにとってはここでこの点にお
答えをするのはほぼ不可能です。二つ目の質問は、
具体的に特に私のプレゼンテーションの18ページ
に関するものでありました。これは非常に本当の
エッセンスというか、私のというか、われわれの今
までの考え方に基づくものですが、まだまだ
暫定的なものです。先ほど申しましたけども、これ
は必ずしも私の考え方ではないのですけども、これ
は実は成果で、10月の議論の成果です。

リッチモンドがそういった点に言及したのは明らか
ですが、リッチモンドではなくアメリカのソー
シャルワークは、アメリカというか西洋ソーシャル
ワークはかつてその点に言及し、批判もされた、そ
れは内面に言及しているし社会階級の道徳にすら言
及している。勿論、その意味では彼等は人間のある
内面について言うてはいますが、しかし2点ありま

す。一つはとにかく単純に、その重みというか、そ
れがちがう。二つ目は歴史的にはアメリカ、ヨーロ
ッパのソーシャルワークもそれをかつてはもっと重視
していたというか、その点により関心を持っていた
わけです。われわれが今まで、この国際ソーシャル
ワークリヴィジョンプロジェクトの全過程で議論し
てきたのが、その点への関心の欠如でした。そうい
う表現を用いて、この国際的な IF、IA の定義は、
その側面を何処かに置き忘れてきていると、ああい
う表現を意図的に使ったのです。彼等はその側面を
もっと見ていた、もっと関心をもっていた、私たち
はそのことを知っています。でも今はそれは何処か
に行ってしまった。現在の現存する欧米に根をも
った専門職ソーシャルワークの議論をしてきているの
であって、別に反対だという意味で話をしたんでは
なくて、とにかく我々のものについて議論している
のです。

それからもう一つの点は、アディ先生がおっ
しゃった点です。次の会議での点ですが、私、
去年先生の所におじゃまをしました。そこでイスラ
ムのソーシャルワークについての話をしました。将
来の計画についてお話をしました。そして仏教だけ
でなく、いつかあるレベルまで研究が到達したとき
に、ヒンズー、あるいはキリスト教の人々もお招き
しワークショップでも持ちたいということをし
上げました。そういったプロセスが必要ではないか
というふうに思っています。私が生きている間に、こ
れが完了するかどうか分かりませんが。私の淑徳の
センターから2人紹介したいと思います。1人が向
こうの男性です。郷堀ヨセフさんです。もとはチェ
コから来てるのですが。それからもう一人、次の女
性ですが、難しい質問を先ほどした女性です。菊池
結さんです。私たちが3人で、もうすでに話をし
てるのですけれども、比較研究をどういうふうによ

ていくかについて。イスラム、ヒンズーなどの宗教の比較研究を、どういふふうにやっていくか、ということをお話し合っ、そして比較研究の計画を立てています。

仏教ソーシャルワークと、それからキリスト教、あるいは欧米のソーシャルワークの比較研究をしていこうと思っています。サンプリングを行った上で、これはランダムなサンプリングではなくて、有意抽出をした上で、いろいろの可能性があると思いますけれども、一つの例といたしまして、同じようなエージェンシーをいくつかの宗教のところから、例えば子どものため、あるいは高齢者のためのエージェンシーを、各宗教から選んできて、そしてそこに実際に行っ、何カ月になるか分かりませんが、そこで観察をして、そして研究をしていきたいと思っています。そういうふうな研究でない、違いいうものは明らかには分からないのではないかと、思っています。そういうプランを、今立てているところ。約束は必ずしもこの場ではできませんけれども、ですがそういうアイデアがあります。皆さんと一緒に協力をして、この比較研究を進めていきたいと思っています。皆さん、本日は本当にありがとうございました。

藤岡 どうもありがとうございました。10分ほど超過してしまっ、通訳をお願いした方々に、ご負担を掛けて申し訳ございませんでした。ちょっと司会の不手際でございました。仏教とソーシャルワークということで、研究の成果をご発表いただい、ディスカッション、さまざまな点からディスカッションすることが今日できたなということを思っ、いるところ。淑徳、あるいは日本社会事業大学の研究としては、次にイスラム教とソーシャルワークというふう、展開はしてきてるんですけど

も、仏教とソーシャルワークというテーマも、やはり継続して深めていかなければならないということ、今日さらに明らかになったのではないかと思っ、ます。それに加えてイスラム教とソーシャルワーク、そしてさらにヒンズー教徒というふう、今後展開していければというふうなことも、ちょっとあらためて思っ、たところ。この後、ウェルカムパーティということで、交流会を予定してあります。予約とか、本日参加された方も、ウェルカムでございますので、ぜひお時間があれば、ご出席いただければ、ということ、お声掛けいただければと思っ、ます。そのウェルカムパーティが始まるまでの時間が、少しございますので、控え室のほうで先生がたはお待ちいただくことになるので、まだディスカッションが足りないと思っ、ますので、この後、皆さんとディスカッション続けていただければと思っ、たところ。まず初日、1日目の会議は、これで閉じさせていただきます。皆さん、ありがとうございました。

テーマ：宗教とソーシャルワーク

～イスラム教の場合～

日時：平成 27 年 12 月 13 日（日）

場所：日本社会事業大学（第 3 会議室）

基 調 講 演 (10:15 – 12:00) 午前

「インドネシアからの報告」 Adi Fahrudin (University of Muhammadiyah Jakarta)
「マレーシアからの報告」 Zulkarnain Hatta (Universiti Sains Malaysia)

基 調 講 演 (13:00 – 14:50) 午後

「バングラディッシュからの報告」 Muhammad Samad (University of Information
Technology & Sciences (UITS))
「フィリピンからの報告」 Melba L. Manapol (Ateneo de Davao University)
「タイからの報告」 Wanwadee Poonpoksinsin (Thammasat University)

円 卓 会 議 (16:00 – 17:30)

H.M.D.R.Herath(University of Peradeniya), Adi Fahrudin(University of Muhammadiyah Jakarta),Zulkarnain Hatta(Universiti Sains Malaysia), Muhammad Samad(University of Information Technology & Sciences (UITS)), Melba L.Manapol(Ateneo de Davao University), Wanwadee Poonpoksinsin(Thammasat University), 秋元樹 (日本社会事業大学・淑徳大学), 藤岡孝志 (日本社会事業大学), 藤森雄介 (淑徳大学), 木村容子 (日本社会事業大学), 有村大士 (日本社会事業大学), 費川信幸 (日本社会事業大学), 松尾加奈 (日本社会事業大学)

宗教とソーシャルワーク ～イスラム教の場合～



藤岡 孝志教授 / 社会事業研究所所長

藤岡 それでは定刻になりましたので、2日目のほうを始めさせていただければと思います。お手元に同時通訳の機械があります。まずこのセッティングをお願いできればと思います。1番が日本語、2番が英語であります。電源は右のボタンでボリュームです。左のボタンで1番、2番調整いただいでよろしいでしょうか。昨日から引き続きということでございます。昨日すでに皆さまにもお伝えしたことでありますが、本日からご参加いただいている方もいらっしゃると思いますので、簡単に非常に短くこの間の趣旨をお話ししたいと思います。まず私、本学の研究所長をしております藤岡でございます。どうぞよろしくお願いたします。昨日と同じように、私と松尾のほうで司会をいたしますので、よろしくお願いたします。このセミナーのテーマは、宗教とソーシャルワークという大きなテーマでございます。昨日は仏教とソーシャルワーク。本日はイスラム教とソーシャルワークのテーマで、ディスカッション、議論できればと思っております。昨日もそうでしたけれども、仏教の専門用語、それからイスラム教の

専門用語が出てくるかと思いますが、できるだけ言葉を分かりやすく、共通理解を得ながら進めていきたいと思っております。本日からのご参加、パネルディスカッションの中に参加いただいている方を、ご紹介したいと思いますので、簡単に自己紹介をいただければと思います。まずスリランカから、おいでいただいておりますアヌさんに簡単に自己紹介をお願いできればと思います。

アヌ 私は仏教の僧侶のソーシャルワークの組織、そしてスリランカにおける仏教ソーシャルワーカーの当事者の組織からまいりました。

藤岡 日本人からの参加者でございますが、淑徳大学の藤森先生でございます。どうぞよろしくお願いたします。

藤森 私の専門自体は、日本における社会福祉の歴史ですとか思想なのですが、この間、機会をいただきまして、ベトナムにおける、ソーシャルワークに



藤森 雄介氏

おける仏教の役割というようなことを数年にわたって、この社会事業大学の皆さんとも共同して、調査をさせていただきました。そこから広がって、現在は淑徳大学で、アジアのソーシャルワークにおける仏教の可能性に関する研究というプロジェクトに参加させていただいております。その関係で、特に仏教だけでなく、イスラム教、あるいはキリスト教、そういった宗教とソーシャルワークの関係について、非常に関心を持っております。きょうはよろしくお願いいたします。

藤岡 皆さまの前に、マイクがございまして、スイッチオンをして、ご発言いただければと思います。よろしくお願いいたします。それから本学の木村容子准教授でございます。どうぞ自己紹介をよろしくお願いいたします。

木村 日本社会事業大学の木村と申します。私の研究領域は子ども家庭福祉の中でも、子ども支援ですとか、社会的擁護の領域になります。最近では社会的養護や子どもの貧困といったエリアの、国際比較研究にたずさわる機会もいただいております。これからちょっと海外のソーシャルワークのことにつ

いても、どんどん学んでいきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

藤岡 それから本学の贅川でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

贅川 贅川でございます。よろしくお願いいたします。私の専門領域は、精神保健福祉領域、精神科領域でのソーシャルワークでございます。中でも精神障害を持つ人の家族支援とか、アウトリーチでの支援というところを中心に研究を行っております。手法と視点としまして、プログラム評価というアプローチをとっております。私のこれまでの取り組み上、なかなか宗教ですとか国際的な部分というのは、非常に弱い部分がございますが、もともと研究所の専任教諭もしておりましたので、きょうこの会議に参加させていただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

藤岡 それから本日は遠い所では、新潟からご参加いただいた方もいらっしゃいます。それから本学の学生の皆さんもいらっしゃっていただいております。あとさまざまな関係のかたがたに来ていただいております。心から感謝を申し上げたいと思います。



木村 容子氏



贅川 信幸氏

それでは早速午前のご発表をしていただければと、というところでございます。司会のほうを、午前は松尾さんにバトンタッチをしたいと思っております。それでは松尾さん、どうぞよろしくお願いいたします。

松尾 よろしく申し上げます。座ったままでよろしいでしょうか。きょうから新しい討論、議論をこれから始めます。昨日は素晴らしい基調講演を、ヘラ先生、秋元先生にいただきました。現在新たなソーシャルワーク、アジア太平洋地域のソーシャルワークの、新たな段階の入り口に立っているということを実感できました。というわけで、新しいソーシャルワークの歴史の1ページを、きょうから開きたいと思っております。本日の午前中は、2人の登壇者からお話を伺います。その二つのプレゼンの後は、フリーディスカッションの時間を取っております。通常でしたら登壇者をお一人ずつご紹介するのですが、時間が限りがありますので、まずはムハマディア・ジャカルタの大学、アディ・ファハルディン先生、ようこそ。ではアディ・ファハルディン先生、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。



松尾 加奈氏

◆基調報告「インドネシアからの報告」

Adi Fahrudin (University of Muhammadiyah Jakarta)

アディ 皆さん、おはようございます。私は本日最初のプレゼンターとなっております。ズル先生が私の先生でした。私のプレゼンですけれども、中間報告を申し上げたいと思っております。イスラム教ソーシャルワークの実践に関して、特にインドネシアにおけるイスラム教徒の活動に関しての、中間報告を申し上げたいと思っております。テイミさん、私のメンバーですけれども、こちらになります。インドネシアの社会省の研究者です。それからウイトンも、インドネシア省の人間です。そしてローファンマーキンですが、講師をしています。国立、イスラム大学、ジャカルタで教えております。私の本日の報告の概要ですけれども、インドネシアの紹介、そして伝統的、そして西洋のソーシャルワークについて、また法律に関してもお話をしたいと思っております。また研究の発見事項について四つのケーススタディを行っております。そしてソーシャルワークの活動に関しての動機、それからまたイスラム教ソーシャルワークの国の概要について、お話をしたいと思っております。インド



Dr. Adi Fahrudin

ネシアの概要ですけれども、インドネシアは、本当に大きな国です。1万7000以上の島々からなっている国です。

そして五つの大きな主要な島といたしましては、スマトラ、カリマンタン、ジャワ、スラウェシ、それからパプアがあります。ジャカルタはジャワ島にあります。とても大きな国です。そして人口も多いです。2010年の国勢調査によりますと、インドネシアの人口は2億3760万人でした。登録されているだけで、これだけの人口があります。登録されていない人たちも、小さな島には住んでいます。少なくとも登録されている人口だけで2億3760万です。そして公用語ですけれども、インドネシア語です。それに加えて、本当にたくさんの少数民族の言語、それから方言があります。そしてインドネシアですが34の県があります。そして500の地区があります。そしてこれが市、町、そして分散的な行政単位に分けられております。スハルトが辞任した後、たくさんの変化がインドネシアで起こりました。かつては五つの宗教だけが国によって認められていたわけなんです、現在では儒教という宗教も、国として認められています。中国の宗教ですけれども、これも認められております。イスラム、カトリック、プロテスタント、仏教、ヒンズー教、儒教。それからまた伝統的な宗教もあります。かつてはインドネシアでは伝統的な宗教は認められていなかったわけなんです。ということは、つまりIDカードの中で宗教をきちんと選んでおかなければいけなかったんですけれども、私たちの国では身分証明書の所に、どんな宗教かっていうことを記載しなければならぬことになっています。

日本とは違う点です。まず伝統的な支援、それから西洋のソーシャルワークについてお話をしたいと思います。伝統的なコミュニティの中で、インドネ

シアの規範、それから価値観に基づきまして、基本的な伝統的な支援が行われております。ゴトン・ロヨンといわれておりますけれども、お互いの自助努力、それからトロン・ムノロン、これはお互いの助け合いを意味しています。こういった考え方が、私たちの国のコミュニティの中には存在しています。伝統的なコミュニティの中では、インドネシアでは、通常人々は地元のリーダーですとか、あるいは宗教のリーダーの所に来ます。彼らが助けてくれる。あるいは相談に乗ってくれるからです。そして自分たちの悩みや問題を話すときに、やはり地元の治療師だとか、あるいは僧侶ですとか、あるいは治療者、バハサドゥクンと言われているかたがた。それからまた賢者、オランピンタルといわれているかたがたの所に行って、悩みや問題を相談します。精神科医ですとか、そういったかたがたでなく、地元の僧侶ですとか、あるいはドゥクンと呼ばれます治療者、オランピンタル、賢者。マレーシアのモモと呼ばれているかたがたと同じように、そういった賢い地元のかたがたの所に行って、相談をします。

独立の後、欧米のソーシャルワークというものが、インドネシアの国の教育の中の一部に取り込まれました。国連の国際援助、そして政府間の国際協力などによって、欧米のソーシャルワークがもたらされました。そしてソーシャルワークの実践に関しましては、インドネシアは実は、イスラム共和国としては一番大きな国なんですけれども、欧米のソーシャルワークをやってきました。これまでのところ、ソーシャルワークの実践、それから教育に関しては、欧米のソーシャルワークの影響が強かったということがいえます。ですが2004年、国立イスラム大学、ジャカルタにある大学ですけれども、こことカナダ、国際開発庁が協力をいたしまして、大学院レベルのソーシャルワークのプログラムを作りました。この

中では、欧米のソーシャルワークと、イスラム教のソーシャルワークの観点というものが組み合わされております。私もこの委員会のメンバーで、このプログラムを作っています。次にこの調査の手法に関して、ご説明したんですけども、定性的なアプローチを、私たちはとっております。そして対象のグループですけども、個人と機関、組織、これを対象としています。四つの組織のケーススタディをやっております。この組織というのは、非常に有名な所です。4カ所とも有名な組織なんです。私はムハマディアジャカルタ大学で教えております。ちょっと私は心配を持っていたんです。

ムハマディアを選んだんですけども、コネといいますか、えこひいきで選んだというふうに言われないかというふうに心配してました。ですけども、ムハマディアというのは、とてもインドネシアで有名な組織になっております。社会的なサービスの活動に関して、ムハマディアはとても有名になっています。データの収集に関しては、主にはフォーカスグループのディスカッション、あるいはインタビューなどでデータを収集しています。主なイスラム教ソーシャルワークの活動家のかたがた、あるいは実務課のかたがたにお話を聞いています。それから二次的なデータといたしましては、出版されているもの、いないもの、研究報告書、年間レポート、各組織の報告書などを使っております。そして最近の発見事項なんですけれども、ケース1。ムハマディア運動を選んでおります。ムハマディアというのはイスラム教の組織です。ムハマディアというのは、予言者、ムハンマドの信奉者という意味です。このムハマディアという組織ですけども、1912年に設立されています。ジョグジャカルタに社会宗教、改革運動として発足をしたわけです。そしてこれはアルマウンというコーランの一節の本当の真の解釈

に基づいて、この団体ができております。そしてこの一節の主な価値観なんですけれども、貧しい人、あるいは孤児を助けるということなんです。ムハマディアというのは、現在のところインドネシアで2番目に大きなイスラム教の組織となっております。

2900万のメンバーが国中にいます。国のレベルから、コミュニティのレベルまで、隅々にこのメンバーがいます。またムハマディアは、シンガポール、マレーシア、タイなどにも組織を拡大しております。ムハマディアは政治的な面でも影響力がありますが、政党ではありません。現在、たくさんの慈善活動をやっております。例えばムハマディアは、8000以上の教育施設を持っています。そして120以上の大学なども運営しています。そして500の恵まれない人たちの住宅、子どもの福祉センターなど、インドネシアの各都市で運営をしています。ムハマディアでは、三つのモデルがあるということ、私たち研究の結果、発見しております。まず1番目がモデル1です。これはムハマディア保育施設というふうに呼びたいと思いますけれども、ムハマディアによる主なソーシャルワークですけども、保育施設の運営をしております。政府、特に社会省は子どもの保育のサービスに関しては、ムハマディア運動、そしてその他の組織と協力をして行っております。ムハマディアは長い間、これまで保育施設をインドネシアで運営をしてきております。子どもたちが自分たちの地域の中に入って暮らしていけるようになるまで、成長と発育、発達というものを確保していくものなのです。自分たちの子どもを、ちゃんと世話ができるように、そしてまた施設へのケアへの依存を防げるために家族への支援もしております。

モデル2といたしまして、ムハマディアはザカートつまり、慈善活動も行っております。ムハマディアというのは、運動組織ですけども、とても近代

的な宗教組織です。それから支出をしております、国のレベルから小地域、あるいは村までザカートの管理をしています。ザカートというのは、豊かなイスラム教徒に対する、いわゆる税金のようなものです。そしてこれによりまして、福祉の提供、それから貧困者の救済をしております。そしてこのザカートのコーディネーター、調整をする人たちですけれども、これはウスタッド、あるいは信者がやっています。そして対象者は、これはムスタヒと呼ばれています。つまり貧しい人たちを対象としているわけなんです。これにもいくつかのグループがあります。学生だとか、ザカートは集める人たち、そういう人たちにザカートを提供しています。

そしてこの組織の予算ですけれども、これは集めたザカートのうちの1番を予算として上げております。活動に関しては、毎年交流、それからザカートの収集がラマダンの月に行われております。つまりこれは、太陰暦の9カ月目です。交流、それからザカートの収集は、もうすぐでほとんどが行われています。そしてそこから直接貧しいかたがたに配分をされています。これは現金の形で行われています。米で提供されることもあります。そして3番目のモデルですけれども、これはムハマディア、災害遺児の救済です。インドネシアにおけるイスラム教、特にイスラム教の組織はインドネシアにおきましては、このような災害の救済、特にアジアの津波のときに2004年以降から、活発に関与してきております。たくさんのかたがたが知っていることなんです、自然災害というのは、みんなに対しての脅威です。全員に関する脅威なんです。イスラムの組織といたしまして、ムハマディアは災害遺児の救済に関しても、活動をしております。ムハマディア災害管理センターを設立しております。若干の名称の変更はありましたけれども、災害の管理の活動を継続を

しております。そして災害のリスクの軽減、それから速報体制の設置、緊急体制、それからリハビリなどを行っております。そしてリスクの軽減ミッションなどに関しても、標語、行動枠組みに基づいて行っております。

そしてコミュニティの中で、少なくとも速報体制というものを構築しております、学校、それから病院などはムハマディアの運動の拠点となって、100年以上活動を行っております。そしてこのムハマディア災害管理センター、MDMCなんですけれども、これは全国で活動を行っております。インドネシア全国で、こういったことをやっているわけなんです。県のレベルの理事会もありますし、また国のレベルでも、それから地区のレベルでも、このような災害の管理の活動をやっています。すぐにリサーチで分かった2番目の大物ですけれども、とても重要な組織がインドネシアにあることが分かりました。これはどういう意味かと言いますと、貧しい人の財布という意味の基金です。これはインドネシアの新聞社のレプブリカという新聞ですが、インドネシア、イスラム教会、学術学会といったところがやっています。ハビビ元大統領のアイデアに基づいたものなんですけれども、レプブリカという新しい名前で、この組織を作りました。自分たちの給料を貧しい人のために寄付したんです。そしてこの活動の情報を、新聞を通じて発信をしてきました。そして資金調達をしていったわけなんです。そうすると今度は読者たちがその記事を読んで、寄付をするようになりました。

そしてこの資金というものを、インドネシアの貧しいかたがたに提供をしているわけなんです。中国、オーストラリア、日本、それからアメリカにも活動を拡大しているということを知って、感動いたしました。ここに来る前にコンタクトをしようとしたん

です。日本にコンタクトをしようと思ったんですけども、Eメールの応答がありませんでした。いろいろな人道的なプログラム、例えば緊急事態、災害、経済、保険、それから教育支援を、貧しい国々のために行っております。例えばたくさんのかたがたが病気を抱えています。ですけれども、病院に行っても手術ができない。がんの手術を受けられることができない。お金がない、という人がたくさんいるんです。心臓の手術も受けるお金がないという人たちがたくさんいます。貧しいかたがたのために、医療費を肩代わりして払ってくれているわけなんです。

そして三つ目の分かったことなんですけれども、三つ目の事例は心理、精神的セラピーです。これは薬物乱用者のためのセラピーです。なぜ心理、精神的かといいますと、これはリハビリセンターの中身を分析したところ、これはスピリチュアルなアプローチと心理学的なアプローチを、複合的に活用しているからです。ポンドクペンサトレンスリアラというのは、イスラム教の教育機関でありまして、1905年、ずいぶん昔ですね。1905年、インドネシアの独立以前に設立されました。120歳で1956年に亡くなりました。この教育機関は首都のバンドンから西に90キロぐらいの、タシクマラヤという町にあります。ぜひここ一度皆さん、見学してみてください。ポンドクペンサトレンスリアラというのは、非常に特別な所です。このポンドクペンサトレンスリアラで、採用しているメソッドというのは、マレーシアでも応用して薬物乱用者の治療に使われています。そしてこの団体は、施設も運営しています。これは青年を救済するための、住居、居住施設です。この団体を運営している中心的人物というのは、アノムという人で、イスラム学者でありまして、スフィズムを活用している教育方法、そして薬物乱用者の治療方法です。教育の他に、このポンド

クペンサトレンスリアラというのは、人々の間で良い行い、そして悪い行いを避ける活動をしております。

良い行いをさせ、悪から遠ざける活動をしています。このポンドクペンサトレンスリアラのリハビリセンターでは、ジキールというものを活用しています。ジキールというのは、神の偉大さをうたう、そして称賛する詠唱法です。これはただ唱えるだけではなく、何度も繰り返し唱えることによって、人の心に自信を植え付け、そして良い行いというものが根付くのです。これをすることによって、神を近くに感じ、そして愛情を感じ、そしてさまざまな欲求や誘惑に勝つことができるのです。この団体では、イスラムの教えの他に、スフィズムを活用しています。そして他には寝る所を提供しています。薬物乱用者には祈祷を通じて治療を施します。コーランからの詠唱、そして精神的なガイダンスも行います。この手法というのは、インドネシア政府によっても認証されていまして、これは心理的、宗教的リハビリ治療法です。薬物乱用者には非常に効果を出しています。ここでこの手法がうまくいったので、政府のリハビリ機関でも、この手法を西洋の治療法と共に採択しています。

最後の事例ですけれども、これはモスクにおける学校中退者の教育です。このマスというのは、モスクのことです。そしてこのモスクはバスターミナルの隣にあるので、マスターデボックという名前になりました。デボックというのが西ジャワ島にある町の名前です。このプログラムではバスターミナルの近くにたむろしていた、ストリートチルドレンに無料の教育を施していました。そして現在のところ、約1500人の学校中退者、そしてストリートチルドレンを、この学校で教育しています。このプログラムには、さまざまなボランティアが参加して

いまして、大学生も参加しています。最後の研究から導いた結論ですけれども、このソーシャルワークの活動に関わる人のモチベーションと、動機付けは何なのか、という問いに対しての結論ですけれども。思うところ、イスラムは信者に対し、包括的な生き方を示します。包括的な人生計画を提示します。ですからこれらの活動は、全て彼らの内面、内在的な動機から来るものであります。

さまざまなインタビューを、このソーシャルワークに参加している人たち、イスラム教徒に行ったところ、いろいろなことが分かってきました。キーワードがいくつかありまして、まず彼らの動機となっているのがアラーからのご褒美です。そして二つ目の動機は来世への備えです。そして彼らは人生は短いとも言っています。人生は短いので、人助けをしなければならぬ。その他4点目としては、自己犠牲が重要であると認識しています。その他、組織に頼ったり、組織の世話になる代わりに、自分が組織に貢献しろと、ということです。ある組織で積極的に自ら活動する見返りを期待せずに、その団体や組織に尽くし、どんどん自分のほうから与えるということです。その他、動機としては神への崇拜です。神をあがめるためにボランティア活動をする。私はボランティアをすることによって、そして活動することによって、アラーに奉仕をすると。アラーだけのためにやると、これが動機となっています。その他に思いやりが重要であると、彼らは思っています。または自分のあやまちを正し、そして献身的な姿勢を示すということが重要であるとインタビューで彼らは言っていました。ちょっと時間がオーバーしてしまいましたが、これが以上、私のプレゼンです。

最後に一言。イスラム教の団体は、ソーシャルワーク活動を、イスラムの伝統や実践に基づいて行っています。宗教指導者、イスラム教の先生、そしてそ

の信徒たちが、この活動を行います。イスラムはただの宗教ではなく、生き方を指南するものであります。どれぐらい信仰が厚いか、そしてどのぐらい実践しているかというのは、人それぞれであります。これが根底にある考え方であります。

松尾 ありがとうございます。プレゼンテーションは30分だけです。申し訳ございません。何か質問、コメントがありましたら、ちょっとメモでも取っておいていただいて、そしてディスカッションのところで発言をいただければと思います。それでは次は、ズルカナイン・ハタ博士です。マレーシア工科大学の教授でいらっしゃいます。それではお願いいたします。

◆基調報告「マレーシアからの報告」

Zulkarnain Hatta (Universiti Sains Malaysia)

ハタ 神の名の下に申し上げます。偉大なるアラーです。それでは31ページもありますので、ごく手短にお話、ディスカッションをたくさん行いたいと思います。ザリーナ博士、この先生は、今回来ることができませんでしたので、皆さんによろしくというものであります。アディさんも先ほどおっしゃ



Dr. Zulkarnain Hatta

いましたけれども、イスラムというのは、生活の形なわけです。ですから宗教ということだけではありません。もう完全な生活の形ということで、全てを表すものです。ですからわれわれの生活におきましても、シャリーアイスラム法の制限の下に送られます。イスラムにおきましては、神道は必要なときには、他の人たちに支援をしなければいけないということになっています。そういう戒律はコーランの中に書かれております。われわれの聖書です。また、モハメッドの言った言行録の中にも書かれております。クルアーン、ハディース、すなわちモハメッドの言行録に基づいて、私どもは動きをするわけです。ということで今回日本社会事業大学のほうから、調査を依頼されて、私どももうれしく思っておりますけれども。モスク、それからイスラム教教師、それから信者がソーシャルワークの分野においては、一体どういうことをやっているのか、ということ、私ども研究をし、そして記録にとどめたいと考えました。本日はそういった研究に基づいて、マレーシアの概要、それからまた、イスラム教におけるソーシャルワークの活動の概要、それからまた、ソーシャルワークの活動の例、それからまたソーシャルワーク活動の奨励。それからまとめを行いたいと思います。

マレーシアといいますのは、民族がたくさんありまして、宗教もたくさんある国です。面積的には日本と同じぐらいですけれども、人口は日本より相当少ないです。宗教は主に三つ。マレー、それか先住民族が66パーセント。中国系が25パーセント、インド系が7.5パーセント、あと小さな少数民族があります。マレー系のほとんど、100パーセントぐらいは、もうイスラム教徒です。中国系のほうは、大体仏教徒、あるいは儒教を信奉しております。インド系はほとんどがヒンズー教で、少数の人たちが

イスラム教徒です。こういう66パーセントのマレー系、そして先住民族の中で、イスラム教徒は61パーセントを占めております。こちらが社会経済的な指標です。2007年から2014年まででありますけれども、GDPはどんどん増えてきております。昨年は3260億米ドルです。GDPの成長率は4.7パーセント。1人当たりGDPは7000ドルぐらい。そして購買力平価は2万3000ドルぐらい。ジニ係数はあまりよくなく46パーセントでありますので、要は所得の分配度はあまりよくないということです。失業率は3.2パーセントです。安定しております。ぜひ下がってもらいたいものだと、2020年といいますが、私どもの先進国の仲間入りをするという目標年になっておりますので、下げてもらいたいと思えます。こちら外貨の状況であります。外部要因で商品価格が下がるとか、それから石油の価格も下がるということで、われわれの通貨にも悪影響が出ております。本日で対米ドルでリングは4.2リング・ドルということになっておりますので、去年は今頃ですと、1ドルが3.2リングでした。教育レベルですが、大体みんな教育を受けておりますけれども、15.3パーセントの人たちが大卒になっております。

それからまた4歳から6歳が、幼児教育というか就学前教育、そして小学生から、それからまた大学とかまでさまざまな教育が施されています。それでは今度は、ソーシャルワークの歴史における、マレーシアにおける歴史を簡単に見てみます。ムハマッドの時期は、モスクが礼拝の場だけではなく、教育訓練、社会活動、それからまた社会開発センター、情報センター、司法の場、それからまたコミュニケーション、それから社会の交流の場、いろんな生活が要はモスクが中心であったということでもあります。以来、モスク、それから小さなモスク。スラオ、これは小さなモスクという意味ですけれども、こう

いったモスクが、まだやはりイスラム教徒のコミュニティにおいては、重要な場所として考えられています。マレーシアにおきましては、イスラムは国家の公式宗教でありまして、国王がその長でありますけれども、各州にスルタンがおりまして、そのスルタンが各州における宗教の長です。その行政につきましては、各州に宗教部というのがあります。そのモスクの資金源であります、毎週信徒が集まって、金曜日に祈りをする。そのときにお布施を出します。それからワカフという基金があります。これもやはり寄付をするわけです。それからまたザカート。先ほどアディ先生が話がありましたけれども、宗教税があります。2.5パーセント、これが最低額です。別に最高の率はありません。いくらでも出してもいいんです。

それからモスクでは、今、お祈りのリーダーが子どもにコーランの唱え方を教えております。それからまた村の宗教の先生、バクレバイという人と一緒に住んだりして、そこで基本的な規則とか、あるいはその他、宗教的な知識を、子どもたちは学びます。シャリーア、規則、法律を学ぶわけです。その他の知識も学びます。ですから基本は、モスクに行けば学べる。あるいはまた小さなモスクに行けば学べる。またその宗教の先生から学ぶことができます。モスクの総数は、この統計は、今回の調査で調べてほしいと言われたものでありますけれども、今6000ぐらいあります。それからまたウスタス、イスラム法専門家の数は6000ぐらいです。ただちょっと変動します。もっと大きいかもしれません。おそらくもっと多いと思います。非常にウスタス、イスラム法専門家の数が増えつつあります。それからまたイマームの専任の、最も重要な基準はコーランを正確に唱えることができるかどうかという、それからまた、基本知識、そういうものを持っているかどうかとい

うことで、イマームが選ばれます。もっとイスラムについてお話ができればいいんですけども、単純には五つのイスラムにおいては原理があります。神を信じるということ、それから1日5回お祈りをする。それからラマダンにおいては、日が昇ってから水とか、あるいは食事を全くしないということ。喫煙も駄目です。それからセックスも駄目です。法的なセックスは駄目ということです。

それからまたハッジを行う。要はメッカのほうに行く。メジナに行く。それは一生に1度はお金があれば行くということ。それからまた五つ目の原理は、ザカート、宗教税を払うということです。できる人は払うということです。それから六つ目の原理。信仰原理。神は一つということ。誰か創造者がいる。宇宙を作った人がいるはずだと。それからまた、そのブッダについても、われわれ、そういう聖人の1人として信じております。10万以上もいるということで、一番最後に現れた人がモハメッドです。それからまた、見えないものとして、天使も信じています。それから全てが終わる日というものがあるということ。全てなくなると、もう創造主を残して全部なくなるということ。それも信じています。それから誰か多くの人、人生というのは、全てもう決まっているということ。そういったことも信じています。そういう今の宗教指導者は少なくとも、高卒でなければいけない。それからモスクはマレーシアにおいては、6種類あります。国のモスク。これはクアラルンプールにあります。それから各州に州のモスクがあります。13州がありますので、13の大きなモスクがあります。それから次は地区、地区には地区のモスクがあります。それから制度的なモスク。各大学、公立大学においては、モスクがあります。秋元先生もUSM、私の大学に来られました。そしてモスクをご覧になったと思います。そういう制度的

モスクというのがあります。これは小さなもの。金曜日モスクというのがあります。モスクの当局者、お祈りを指導します。

それからアザン、それもイスラム教国に行きますと、音楽ではなくて、ラウドスピーカーからお祈りが流れてきます。それからまた、それは私の携帯から、時々声が聞こえると思いますが、それは実はメロディなんですけれども、非常にメロディに富んだものですけれども、それは実は今、お祈りの時間ですよ、ということを知らせてくれるものです。それからまた、モスクの番人というのは、それからまたイマームのサラリーは国家から与えられます。これがわが国におけるソーシャルワークの前身の状況です。時間の始まりから、ソーシャルワークが、人がコミュニティを作ったときから始まっています。19世紀に専門職としてのソーシャルワークが西洋世界で始まりました。マレーシアも、その影響を受けたわけです。マレーシアにも、こういう専門職ソーシャルワークがもたされました。専門職ソーシャルワーク、これはちょっと議論を呼ぶ言葉ですけれども、こちらがマレーシアに導入されたのが60年以上前でありまして、今までのところは西側の意味での、欧米の意味での専門職というのはありません。まだ議会で議論がされておりますけれども、まだ形になっておりません。ですから専門職とはいっても、法的には専門職ではないわけです。

イスラム教のソーシャルワークの例というのはたくさんあります。今回の調査研究におきましては、三つの組織を選んでケーススタディを行っております。まずモスク、これは大きなモスクです。これはクアラルンプールにある。それからもう一つが宗教税集金局、このセンターは宗教税を集める所です。そして恵まれない人々を助けるところです。それから NGO として選びました。洪水の被災者を助ける

所です。データは資料調査、それからまた面接調査も行いました。宗教指導者にも面接を行っております。まず最初のケース1です。このモスクというのは、お祈りの場だけではなくて、いろいろな付加価値サービス、例えばコーランの唱え方を教える。それから病院に行く。それからまたシングルマザーを助ける。それから医療活動も行う。葬儀の準備も行います。それからモスクはまた、慈善の協賛物。あるいはまた土地、あるいは建物といった寄付も集めます。それを必要な人たちに分配をします。それからまた、こういうふうを集めたお金は、人材開発とか、あるいはまた病人の治療に使われます。それからワンコープという企業がありますがけれども、こちらのほうはアンドホスピタルという、クリニックのチェーンがありまして、そこでボランティアの人たちが無料で必要な人たちに、医療を行っております。

またプログラムの内容としては、コレステロール度、それからまた血糖値、血圧、その他の健康診断とか、それからまた医療の専門家がよくある病気とかについて講演をする。それからイスラムがこの健康な生活を、いかに重視しているかということ。それからまた、その他もあります。それから料理教室なども開かれております。それによって体にいい食事を作れるようになります。そしてイスラムでは三つの関係があります。個人との関係、それから社会との関係。環境との関係。この三つがイスラム教の中ではあります。そしてイスラム教はこの生態系の保護にも役割を果たしているわけなんです。それからクアラルンプール、あるいはクランベリーのところに関しまして、病院に行き、そしていろいろなものを提供しています。スーラヤシンというのは、このコーランの中の重要な一節になっておりますけれども、こういったものを提供したり、これを読むこ

とはとってもいいメリットがあります。ですからこのスーラヤシンという一節を病気のかたがたは、よく読んでいます。例えば食事、それからフルーツなど、本当にたくさんのもを提供しています。スーラヤシンはもちろんイスラム教徒以外には提供いたしませんけれども、イスラム教徒であろうとなかろうと、提供していません。それからまたラマダンの断食の後の食事ですけれども、この食事のことをイフタルといっています。日没、あとこのイフタルという断食後の食事を食べます。貧しいかたがたに関しては、もう毎日が断食のようなものなんです。

ですからこういったラマダンの期間中に、日没後、モスクに食事を持っていく。あるいは孤児院に行ったりとか、貧しい人たちの住宅に行き、このイフタルという食事を分け与えています。それからもう一つ、この死者の埋葬の準備です。洗ったり、かたびらを着せるわけなんですけれども、女性の死者に関しては、女性が体を清める。男性の死者の場合には、男性が体を清めるというジェンダーの約束事があります。こちらのほうが短いケーススタディになっておりますけれども、ザカートの収集のオフィスがあります。ザカートというのは、イスラムの五つの柱のうちのひとつなんです。少なくとも富の2.5パーセントぐらいは、このコーランによって受ける資格のあるかたがたのために提供をいたします。ザカートを受取る資格のある人たちが、コーランに定められています。イスラム教の全員はこのザカートというものは、払う義務があります。これはイスラムの五つの原則のうちの一つだからです。イスラム教徒だけが、この福祉制度を受取るすることができます。イスラム教徒でないかたがたというものは、これを受取ることはできません。ですけれども、ここではイスラム教徒である、なしに関しての差別をお話をする場ではないと思っております。このザカートに

関しては、収集の制度がシステムチックになっております。私の月給の中から2.5パーセントが天引きをされております。このお金がザカートセンターに行きます。そしてセンターのほうから、この配分がされています。

二つのタイプのザカートがあります。ザカートがあります。これは1年間に蓄積した富の中から払うということになっております。自分が持っている富の中から払います。例えば金、銀、それから貯蓄、株式、それからまたさまざまな現金です。ザカートを払わなければいけません。これは1日分の食料というものを、家長がまとめて提供することになります。ラマダンの後、本当に大きな食事をするんですけれども、そのためのものです。ですけれども、このザカートの受ける資格のあるという人たちが、このザカートのお金をもらいます。貧しいかたがたは、極貧のかたがたで、支援を求めているかたがたに対して提供されます。それから支援を求めているなくても、貧しい人たちに関しては、提供がされております。こういう人たちがザカートを得ることができません。その他にも奴隷、皆さんの思っている奴隷ではないかもしれませんが、いわゆる Slave といわれているかたがたがザカートをもらえます。

それから自分の家から離れている。そして旅人、こういったかたがたももらうことができます。イスラム教徒でなくても、旅行をしていれば、こういったザカートをもらうことができます。それからまた、アラーのために戦っている。あるいはアラーの教えを説く人たち、こういった人たちももらうことができます。こちらのほうにいくつか統計を出しておきました。どのぐらい集まったかということです。これが金額です。マレーシアの通貨による金額を、ここに示しております。そして支援のタイプです。こちらにあるようなものがタイプになっております。

ファキールというのは、極貧のかたがたです。お金を提供したりとか、あるいは食料を提供しています。これから経済的な支援を学生にしたり、あるいは治療費、住宅の支援などもしています。あるいは住宅の改修、修理なども行うような形で、支援がなされております。ヤヤサンですけども、これはNGOで2010年に作られたNGOになっております。そして100万リングットという資金を調達いたしました。家族、それから友人などからお金を集めまして。そしてこれはシングルマザーのかたがたの、収入の創出のためのトレーニングプログラムをやっています。

あともう一つが、コノバンと呼ばれていますけれども、このような形で食料を得ていくための、シングルマザーのための収入創設のプログラムです。そしてシングルマザーの製品を売る。必要に応じてプロジェクトの実施をしています。それから次に災害に関してですが、本当に深刻な洪水がありました。ヤヤサンの地区で洪水の後、インフラがかなり壊れてしまいましたので、仮設住宅なども建てています。その他にも、このようなプログラムがあります。ソーシャルワークと宗教のつながりは何なんでしょうか。イスラムでも、私たちは毎日の日常生活の一貫として、人々を助けるといことをやっています。人々を助けるというのは、本当に自然なことです。イスラム教徒にとって。ですけども、プロフェッショナルリズム、それから近代の生活の減少によりまして、本当に効率を高める形で福祉省などもできております。そしていろいろな分類をしていますけれども、かつてはもう本当に当たり前で、利他的な形で人を助けるということを、イスラムの中では当たり前のようにやってまいりました。責任感というものを感じて、人間としてイスラム教というのは、やはり人間は神のカリフ、つまり継承者という

ふうにならされています。ですから、お互いに助けなければいけないということが、考えられているんです。これがとても自然なことなんです。こちらにありますのが、エビデンスです。ソーシャルワークをなぜしなければならないか、ということのエビデンスです。まず上のほうですが、これは預言者の言った言葉なんです。預言者は言いました。慈善というのは義務です。毎日人々の接点において、やらなければいけない。例えば誰かが動物に乗るのを助けるのであれば、それにまたがるのを助けてあげる。あるいは荷物を積んであげる。これは全て慈善だというふうに言っています。

そして良い言葉。それからまた祈りをささげるといことを、これも慈善に一貫である。誰かに道案内をするのも慈善であるというふうに言っています。これは本当に細かい例なんですけれども、道端で他の人たちを助けてあげる。これも慈善です。そしてコーランが2、177の所でいっているんですけども、コーランは神の言葉であるといっています。ハディースというのは預言者の言葉であるといっています。これが私たちの生活の参考になっているものなんです。正しい行いというのは、自分の顔を東に向けるか、西に向けるかではありません。本当の正しい行いというのは、アラーを信じるといこと。そして最後の審判の日。それから天使、それから書、それから預言者を信じる。そして富を提供する。これはとにかく与えられたことなんです。与えれば幸せになるという考え方です。仏教と似たようなものなんです。

そういった富が大切なものであっても、孤児、それから必要としているかたがた、それから旅行者に提供する。それからまた、奴隷を解放する。また祈りをささげる、そしてザカートを提供する。そしてまた約束は守る。そしてまた貧困、あるいは困難、

あるいは戦いの中での忍耐強さ、こういったことが、本当の真実の正しさであり、正しい行いであると、ということが言われています。もちろんこれ以外にも、節というものはたくさんあるわけですが、このコーランの一節だけをここに出しておきました。そして私たちはお互いに助け合わなければいけないということが、ここからも分かるわけなんです。イスラム教徒は全員何らかの形で社会サービスに関わらなければいけません。ザカートというのは経済的なセイフティネットということがいえると思います。ペーパーの中で私も書いてありますが、GDPの中でのザカートの比率はとても高いものです。ソーシャルアクション。それからまた社会正義をもたらす、ということ。また迫害を緩和するというのも、ソーシャルワークというふう考えられています。イスラム教徒が利他的に、他の人たちのためにするという事は、やはりソーシャルワークというふうにとられることができると思います。この中のケーススタディですが、これはマクロのレベルのものソーシャルワーク、これはザカートがあります。それからマイクロソーシャルワーク、これは個人のソーシャルワークのマイクロのレベルのものがあります。

ですが、主流となっているソーシャルワークと、イスラム教の教えというものが、若干違っているところがあります。最終の究極的な救いというものは神です。私たちはその神の手段、そして神を助けるということしかできないです。究極の救いは神です。本当に助けてくれる。救ってくれる人たち、私たち、あなたたちではなく神です。これがちょっと違っている点かもしれません。私たちはもちろん教授の先生がたがいらっしゃるわけなんですけれども、たくさんを知っていると思っているかもしれませんが、もっと知識のあるかたがたはいらっしゃるん

です。ですから私たちは何者でもないんです。知識には限界がありません。私たちのエゴにも限界がありません。それから私たちの欲望、喜びにも限界がありません。やはり私たちはエゴというものを抑制しなければいけません。そういった考え方がイスラム教なんです。モスクの影響力、それから貢献というものは、今も変わりません。特にマレーシアの社会に関しては、モスクというものは、常に重要性を持っています。ソーシャルワーク、あるいは大々的なソーシャルワークというものがあるかもしれませんが、欧米のソーシャルワークが私たちの国、マレーシアにもたらされましたけれども、モスクも今後も重要性は変わらないでしょう。ありがとうございました。

◆ディスカッション

松尾 素晴らしいプレゼンをありがとうございました。これからフリーディスカッションに入ります。アディさん、ハタ先生、ありがとうございました。これからフリーディスカッションを始めます。日本語でこれから発言いたします。ありがとうございました。今、ハタ先生と、それからアディ・ファハルディン先生から、それぞれのマレーシア、インドネシアのソーシャルワークアクティビティについてのご報告がありました。これからはディスカッションといたしまして、会場にいらっしゃった皆さんと、意見交換ですとか、あるいはそれぞれの先生のご質問等がございましたら、ぜひこの機会にお願いしたいと思います。特に発言の順番等はこちらでは決めておりませんので、自由に挙手でお話しいただければ幸いです。お話の際には、目の前のマイクの電源をオンにして、お話が終わった後にはオフにしてくださいと思います。それではどなたかいらっしゃい

ますでしょうか。有村先生お願いします。

有村 大変貴重な発表をありがとうございました。かなり私たち、日本で教えている立場からしますと、やっぱりコミュニティが大事だと、今、共生が大事だというふうにわれわれの国々も、あらためて社会が成熟していく中で考え出しているところですが、われわれ、失ってしまったものもいっぱいその中に含まれているなと思って、大変感銘を受けました。それでお二人の先生がたに簡単なことで質問をさせていただければと思うんですが、宗教的なソーシャルワークですね。イスラムのソーシャルワークの意味っていうのは、今後も重要だとおっしゃったわけですが、これから例えば、それぞれの国々が経済発展をしていく中で、その位置というのは、さらに大きくなるものなんでしょうか。それとも何か国の役割と、プロフェッショナルソーシャルワークの役割と、その地域に根差したソーシャルワークの役割と住み分けが進んでくるものだと、先生は予測されているんでしょうか。とても私たち日本の立場からすると、大変過去に失ってしまったコミュニティだったり、さまざまなもの、とても今かけがえなく見えているものですから、ぜひ先生がたから見て、これからの展望をどのようにご覧になられているのか、ぜひ教えていただければと思います。

ハタ ご質問ありがとうございます。有村先生。これからイスラムソーシャルワークの役割が大きくなるか、これから経済が発展するにつれて役割が大きくなるかといいますと、それに対する答えはイエスです。と言いますのは、歴史的に見ますと、私の認識している限り、1970年以降、今から今まで、ムスリムの人たちの間で、イスラム教の重要性がさらに認識されています。自分のアイデンティティに

とっての重要性、その内面における重要性。私の母や、私のおばさん、おばなどは、ウミ先生は頭を隠していらっしゃいます。私の母親はそれをかぶっていませんでした。70年以降、ムスリムとしての自覚が一層強くなってきています。それから判断しますと、これからイスラムのソーシャルワークの活動というのは、止まることを知らないと思います。止まることを知らずに拡大していくと思います。それが二つ目の質問に結び付きます。つまりそのプロフェッショナルソーシャルワークと、イスラムソーシャルワークの線引きがもっとはっきりしてくるかですけれども、これは昨日も議論されましたが、私もはっきりした答えは分かりませんが、私の直感から言いますと、イスラムのソーシャルワークと、近代的なソーシャルワークの間の線引きは、もっとはっきりしてくると思います。

なぜかといいますと、例えば人権。イスラムにも人権という概念はもちろんあります。そしていくつかの要件があります。私はソーシャルワーカーとして、どの人権を重視すればいいのですか。国連がうたう人権。それとも私の宗教がうたう人権なのか。そしてそれは選択を迫られることとなります。まさにジレンマを生みます。例えばこれから線引きが強くなる。近代的なソーシャルワークと、イスラムソーシャルワークの線引きが強くなるという一つの例を申し上げました。答えになりましたでしょうか。

アディ ハタ先生と私も同じ意見です。イスラムソーシャルワークは、これからも発展します。これは経済成長に関わらず政府、つまり宗教関係省が国立イスラム大学にソーシャルワークの学科を設けました。これは近代的なソーシャルワークと、イスラムのソーシャルワークを併せて教えています。近代的なソーシャルワークの理論と、イスラムのソー

シャルワークは、ある意味補完し合うものでありますので、そのようにイスラム国立大学で教えているということは、ここから先、5年間。例えば5年間の間に、インドネシアのソーシャルワークは、今まで以上に、このイスラム的な要素というのが拡大し、発展していくと思います。これはわれわれにとって重要なことです。そして秋元先生にも申し上げたのですが、これはインドネシアの新しい時代とも言えると思います。ソーシャルワークのプログラムや、教育はカナダの開発庁が支援するような、西洋的な要素も取り込んでいます。この近代のソーシャルワーク、カナダのマクギール大学が提案しているようなものが、国立イスラム大学で取り上げられています。国立イスラム大学が、そのような現代的なソーシャルワークと、イスラムソーシャルワークを合わせたようなプログラムを設けたということには、非常に意味があると思います。

これはアディ先生の発表に関連してですが、250の民族と750の少数民族の言語がインドネシアにはあるとおっしゃいました。非常に複雑な社会です。そしてこの税金の免除の制度があるとおっしゃいました。これは税金を分配するという話がありましたが、これは全ての少数民族に行き渡るのですか。それともイスラムだけですか。私の発表は、イスラムについてですので、焦点を当てていますので、これはイスラムに限定していると理解してください。

松尾 有村先生いかがでしょうか。よろしいでしょうか。ヨゼフ先生お願いします。

ヨゼフ もう一つ質問が、アディ先生にあります。プレゼンの中で、先ほどおっしゃったことですが、イスラムソーシャルワークと、現代的な、近代的な

ソーシャルワーク、これはカナダから入っているということですが、そのような複合的な教え方をしているということですが、質問ですが、具体的にどのように、その現代的なものともイスラムをミックスさせていくのか教えてください。その手法を現代的なソーシャルワークを、イスラムのさまざまな課題に取り組む際に、どうやって取り組むのか、具体例を挙げていただきますでしょうか。

アディ 2004年に宗教問題省が私を呼びまして、カナダの国際開発庁と、マギル大学とともに、国立イスラム大学にソーシャルワークのプログラムを発足させてくれと、そのように政府に言われました。現代的なソーシャルワークというのは、インドネシアではあまり人気がなかったわけです。そして私はソーシャルワークの教育者として、宗教問題省に呼ばれて、これを依頼されたわけですが、そのときに私が言ったのは、これは非常に興味深い。私は西洋のソーシャルワークの訓練を受けてきた。政府はテーマを設立し、そして四つのチームで、それを実践する手法、教授法、カリキュラム、そして実践に関する四つのチームを発足させたわけです。そしてこのチームをつくってから、マギル大学のカナダ側のチームと相談をして、ようやく2004年に大学レベルのソーシャルワークのプログラムを始めたわけです。ジョグジャカルタの国立イスラム大学で、このイスラムのソーシャルワークのプログラムを始めたわけです。多くの国ではソーシャルワークの授業というのは、学部で行うのですが、ジョグジャカルタの国立イスラム大学は、これを大学院のコースとして行ったわけです。そして2004年から10年たったときに、ようやく学部でソーシャルワークの科目を設けたわけです。そのご質問ですが、実際に現代的なものともイスラムのソーシャルワークをど

うやって合わせるか、というご質問についてですが、カナダが参加していたので、教材やシラバス、そしてカリキュラムを検討しました。

一つの授業はファンドレイジング、資金調達団体についてです。この資金調達というのは、かなりの授業にはイスラムソーシャルワークの視点が、かなり取り込まれました。ワーカー部や、先ほどからのザカートなどが中心でした。そしてこれを西洋式のファンドレイジング、つまり寄付金、例えばチャリティコンサート、物品販売などの資金集め方法ですね。これをイスラムの資金集めの方法と合わせたわけです。今までこの国立大学のソーシャルワークプログラムでやったことは、他の国立イスラム大学にも取り入れられています。ズル先生がおっしゃいましたが、現代のソーシャルワークと、イスラムのソーシャルワークというのは、対立するところが、実際にはないのですけれども、使う用語、例えばイスラムのソーシャルワークで使う用語、これはラップトップの中に入っていて、ここでお見せできませんが、後ほどEメールすることはできます。この価値観や手法や哲学、イスラムソーシャルワークの、それを整理した一覧表があります。後ほどお送りします。

ワンワディ ありがとうございます。私もちょっと追加で申し上げたいのですが、マクロ的に見る、それからまた哲学的に見ますと、現代のソーシャルワークで、非常に世俗的なものがあります。これは保守的なイスラムの宗教には反します。それが問題で、どういうふうにこれと合わせるか、両立させるかということで、両立が非常に難しい。現実としてそれを受け入れる。何とかそちらジョグジャカルタの大学がうまく行ってほしいと願っています。私も好奇心から聞きたいのですが、これがハッタ先生にも関係しますけど、それからまたアディ先生、マギ

ル大学の関係する世俗的なソーシャルワークの活動が始まっていると。350の民族がある。特にイスラムソーシャルワークというのは非常にそちらの宗教に関係する。それからまた宗教文化に関係するわけで、そうすると一体どうやって両立するんですか。その世俗性と、それから宗教性、どう両立させるんでしょうか。例えばちょっとジョグジャカルタでも議論を呼んでいるんですけども、われわれ、ソーシャルプログラムを始めたときに、ホモセクシュアリティについて話をしました。このホモセクシュアリティというのは、イスラムにおいては、罪なわけです。これは罪なんだと。ですから多くの学者は、そんなことをオープンに話せるかと拒絶しました。私、ソーシャルワークの観点。現代のソーシャルワークの観点から、われわれはもうみんな個人として受け入れるんだと。差別はしないというふうに私は言いました。非常に議論を呼んでいます。非常に厳しい問題ではあります。

ですからおっしゃるようにイスラムは、誰でも受けられるんだとありますが、しかしイスラムはまた今、ハタ先生も昨日おっしゃったとおり、イスラムソーシャルワーカーとして、同性愛というのは罪である。イスラム教に基づくと罪であると、ただそれはそちらの問題であると、私はソーシャルワーカーとしては、とにかくあなたの助けをしたいんだと。ということで問題ないんじゃないかと、という言い方をしています。確かに初期の段階で非常に議論を呼んだ問題ではあります。ありがとうございます。

ハタ そうですね。ですからこの同性愛の問題、私もマレーシアでも、私の同僚と非常に熱を帯びた議論をしたことがあります。われわれが言っているのはソーシャルワーカーとしては、あるいはムスリムのソーシャルワーカーとして、コーランをそのまま

受け入れる。信じる、当然同姓もやっているのは罪というふうに考えるわけです。われわれ人間として、それを判断するわけではないと、その批判をするのは創造主なわけです。だからわれわれは、これがアザンです。呼び掛けです。メロディに富んでいますね。ですから2回目のきょうのお祈りの時間になったわけです。私はその人に対して、別にあなたの生活様式は非難をしないと。非難とは書かれているわけですが、とにかく私はあなたの助けをするためにここにいるんだと。私としてはそういう罪は犯せないけれども、という。例えばモスクの中でも、そういうふうな同性愛の人たちが結婚するような所、助けるような所があると、そこに行けというのかと、そういうふうなイスラムが同性愛に対するジレンマがあります。われわれにも基準があると。場合によっては、逆の側の人たちが、ちょっと寛容な心を持てと、ただ彼らはわれわれに対して寛容ではないわけです。

サマド 私も一つちょっと付言したいと思います。イスラム教、その他の国の問題は、ソーシャルワークを専門職として認めるかどうかという問題があります。といいますのも、アジア、シンガポール、フィリピンにおいて、例えばベトナムにおいてさえ24の大学で、ソーシャルワークを専門職と認めていますけれども、ただ日本ではそうではない。あるいはインドでもバングラデシュでも、あるいはインドネシアでもマレーシアでも、そうではありません。ソーシャルワークが専門職として認められれば、そうすると多くの問題が解決すると思います。わが国においては、われわれの憲法の基礎は、われわれのナショナリズム、それから民主主義、社会主義、それから世俗主義が基礎です。ですからイスラムとかヒンズーとか、あるいはキリスト教とか、といったことはないわけです。私がつし申し上げたいのは、

われわれザカートというのがあります。ザカートというのは、全てイスラム教徒の義務である。従って国の法律には書かれていません。別にそういう喜捨を出しても、出さなくてもいいわけです。マレーシア、インドネシアについては、サラリーの中から天引きされます。これは義務です。ただ私にとっては別に義務ではないわけです。人によって出す人もいれば、出さない人もいるわけです。ですから今、先ほどのご質問については、まず専門職としての認識がなければいけない。日本のソーシャルワーク、APASWEもイニシアチブを取って、専門職としてソーシャルワークを認めると、南アジア、あるいは東南アジアの国で、それが認めることになれば、そうするとわれわれの友人のアディさんがおっしゃったように、ペーパーというか、そのコースを、ソーシャルワークの教育についても、科目を設けることができる。文化、宗教、それからまたその他のその国の価値観。あるいはまた、その国民に合わせた形で教育ができると思うんです。

そうすると、このような問題の解決の一助になると思います。ですから、今、アメリカにおいてはゲイの結婚がある。われわれの国においては、そういった問題がないわけです。われわれはそういうふうな問題はない。中国は一党独裁制です。依然として一党独裁です。ただもう資本主義です。ですから、他の国からお金を送金しても問題ないと。しかしながら、ソーシャルワークはありません。ソーシャルワークの教育もありません。社会主義の国においては。しかし中国は今まで解放してきました。500ぐらいの大学で博士号のプログラムで2012年の段階においてですけれども、34の大学で教えてます。いろいろな問題があります。工業化の問題とか、それからアルコールの問題とか、いろいろな問題があるでしょう。ですから専門職として認めるという問題、

それが解決すればカリキュラムについても、アディ先生もおっしゃいましたけれども、そういった問題は解決するのではないか。そうするといろいろな疑問、問題。どういうふうにかこういったもの、イスラム、あるいは仏教徒、あるいはその他の宗教についての、いろんな問題が解決すると思うんです。

ハタ マレーシアのザカートについて訂正させていただきます。私ども、体系的な集金の方法はあるんですが、これは義務ではありません。やはり自発的なものなんです。といいますのも、これは責任だと、神に対する責任だと、国に対する責任ではないと、国というのは、とにかく創造主に対して責任を果たすためにいろんなことをやると、だから払わなくても罰はありません。神様が困ったということだけをいっただけでありまして、ですからマレーシアにおいては、自発的なものです。ただ意識が高いので、出す人が多いです。組織に出したり、あるいはまた誰でもとにかく、この人にあげたらいいと思う人にあげるわけです。そういうのがマレーシアの状況です。

アディ 自発的です。自発的なものです。でも私も私立のイスラム大学で、やっております。ですから私にとっては義務なわけです。自動的に天引きされます。2.5パーセントは私の給料から天引きされます。私はちょっと申し上げたいと思いました。スリランカの今の状況でありますけれども、大体ソーシャルワークの活動というのは、仏教寺院に関係している、ですから普遍的。いろんな施設をイスラム教、タミル人、それから他の人たちにも提供しているわけです。といいますのも、今、例えば津波の災害があった。やはりイスラム教徒を助けたのも仏教徒です。都市においても、あるいは農地、あるいは都市の商人の土地も、イスラム教徒のものであって

も、別に差別はありません。そういう言葉を使って申し訳ないんですけども、ユニバーサル、普遍的です。土地というのは、あるいは仏教寺院に属するようなそういう土地をイスラム教徒の商人が使ったりすると、われわれのソーシャルワークの活動というのは、ある特定の宗教に向けたものではありません。みんなに対するものです。一つちょっと説明させてよろしいですか。インドネシアにおいても、別にイスラム教徒に対してだけのものではありません。その資金、例えばズル先生もおっしゃいましたけれども、ザカート、宗教税というのは、イスラム教徒のものですけれども、しかしムハンマディアというのは、非常に修道的な組織でありまして、仕事をして、そして非ムスリムに対しても出しているわけです。ちょっと申し上げますと、ムハンマディア大学は、その州はほとんどの人たちは、実はキリスト教徒なんです。州の住民。東ティモールのそばにあります。新しい国です。インドネシアから独立した国です。

この州において、ムハンマディアには一つの大学がありまして、ほとんどの学生はキリスト教徒です。ですからキリスト教系ムハンマド大学と呼んでいます。これは冗談です。ほとんどの大多数の学生は、キリスト教徒です。ですからそれでも問題ありません。多くのイスラム教徒でない人たちも、いろんなイスラムの科目、あるいはまたムハンマディア、そういう科目を取っていても、全然問題ありません。ムハンマディアは寄付とか、いろんな所にします。イスラム教徒でない人たちも寄付します。それからまた、私の学科の中においても、例えば災害救助とか、そういった科目はありますけれども、それも差別は行っていません。以上です。

賛川 貴重なお話をありがとうございました。私自身が、あまり宗教のことに無頓着なもので、宗教と

ソーシャルワークというのを、どういうふうに考えていったらいいのだろうか、というのは、まだ自分自身の中で整理できない部分があるんですけども、今、お話を伺っている中で、あるいはその後のディスカッションを伺っている中で、私の中でゴチャゴチャになった部分があります。それは何かと申しますと、イスラムのソーシャルワークなのか、イスラムコーランの教えに基づく助け合いの実践なのか、その頭にイスラムが付くということと、ソーシャルワークというところと、どう整理。違うものなのだろうか。イスラムソーシャルワークというものなのだろうか。先ほどクリスチャンと一緒に学んでいる。そこで区別はしていないんだ、というお話を聞くと、果たしてその辺りって、イスラムソーシャルワークなのか、ソーシャルワークインドネシアなのか、その部分が、少しどういうふうに位置付けられているんだろうか、ということはちょっと疑問に思いましたので、不勉強な部分があるかと思いますが、その辺りを教えていただくと幸いです。

ハタ 賛川先生、ありがとうございます。できる限りご説明をしたいと思えます。できる限り分かりやすくご説明をしたいと思えます。歴史的に、これはソーシャルワークというふうに、私たちの宗教の中では呼んでいません。これは私たちが助けるべくして助けているんです。全くイスラム教ソーシャルワークといったような制度があったわけではなく、仏教と同じように、私たちが当たり前やってきたことなんです。これはイスラムにおけるソーシャルワークなんです。イスラム教ソーシャルワークではなく、イスラムにおけるソーシャルワーク、これは二つ違ったもんです。イスラム教ソーシャルワークと。イスラム教ソーシャルワークというふうなことは、もともとなかったんです。ソーシャルワークは

ソーシャルワークなんです。他の人たちを助けることなんです。必要な人たちを助ける。機能的な問題、あるいは精神的な問題、持っているかたがたを助けなければいけない。イスラムの中では、イスラム教ソーシャルワークというのは、ないんです。私たちは他の人たちのことを気にかけて助ける。これは当たり前というふうに考えられているんです。ですからイスラム教ソーシャルワークではなく、イスラムにおけるソーシャルワークです。そしてソーシャルワークというのは、私たちのさまざまなイスラム教徒の機能のうちの一つでしかありません。現代社会の中では、私たちはコンパートメント化しています。いろんなデパートメントを作っている学科を作って分けています。イスラム教のコミュニティでも、マレーシアではそういうことが起こっております。そういうふうにだんだん物事を細分化して分けていくことはありますけれども。

アディ ハタ先生に加えまして、私のプレゼンの中で、私は二つの概念を申し上げました。いわゆるソーシャルワークの活動、イスラム組織が行っているものを申し上げました。特に国立イスラム大学に関して、私、プレゼンの中でご説明いたしましたけれども、2004年に私たちはこのアイデアを使いました。彼は記事を書きました。国際的なジャーナルにたくさんの記事を、イスラム教ソーシャルワークに関して出したわけなんです。価値観、それから哲学、手法などを書いていきます。それから他の人たちを助ける戦略、それからステップバイステップで、現在のソーシャルワークの中で、こういったプロセスをインテークをやってアセスメントをして介入をしたといった、そのステップを書いていきます。イスラムの中でもソーシャルワークの中で、そういったものは

あるんです。コーラン、それからハディースの中で、そういったものもすでに記載されています。用意されています。ただ呼び方が違う、言葉が違う。言語が違うんです。この点は大事だと思います。全てありますけれども、呼び方が違うんです。バリセーの記事というふうに、調べていただければ分かります。私のほうからお送りすることもできます。

サマド 私のほうからも一言よろしいでしょうか。社会事業大学のほうからのプロポーザルをいただきますと、やはり概念化の問題というのはあると思います。イスラム教ソーシャルワークなのか、あるいは福祉の活動なのか、ソーシャルワークというのは現在のところ、マギル大学の勉強がありましたけれども、私たちの国々でも別の大学がやりました。ソーシャルワークという言葉というのは、専門職のソーシャルワークという意味を含んでいるのではないかと思います。もちろんその専門職としての認知は、まだされていないわけなんです。他の宗教の活動は、福祉活動、イスラムであれ、仏教であれ、あるいはキリスト教であれ、福祉活動なんです。私、調査をやりました。サウスキャロライナ大学の准教授からのインスピレーションを受けました。彼女は上海でペーパーを発表したんですけれども、これはベトナムにおける寺院の役割に関するペーパーでした。そして彼女のペーパーでインスピレーションを得まして、私はプロポーザルを書きました。バン格拉デシュ四つの主な宗教に関して、調査を行いました。そして発見事項は以下のようなものです。ソーシャルワーク、つまり専門職のソーシャルワークの活動ですが、これは教会、あるいはキリスト教が行っているもの、ソーシャルワークに非常に近い。ですけども、その他の宗教、例えば仏教、あるいはイスラム教、ヒンズー教のやっているもの。

というのは、あまり類似性がない。福祉だというふうに、例えばほどこしを提供するそれから災害の救助。それから医療の提供など、町のレベルでやっています。地方ではやっていません。そして仏教の寺院に関しましては、私たちの国々では仏教というのは山間郡のほう、山のほうにあるんです。そして地元のかたがた、原住民が信じています。13のそういった先住民というのは、一つの地域に集中しています。お寺という寺院がありまして、こういったものは山の山間地のほうにあります。そして宗教のサービス、お祈りをしています。彼らはその宗徒に大きなお寺を持っています。ですから彼がやっているのは、社会福祉をやっています。彼らがやっているのはソーシャルワークではないのです。社会福祉をやっているんです。ですからやはり私たちは、これから明確にしていかなければいけないのは、これは社会福祉なのか、社会ソーシャルワークなのかっていうことも、これから明確に考えていかなければいけないと思います。

松尾 今のご指摘は、なかなかこちらとしても、これからぜひ考えていかなければいけない、重要な事項が含まれているかと思っているんですけれども、間もなく時間も限られておりまして、大変申し訳ないのですが、他に日本からの出席の方たちも、ぜひこの機会に、皆さん、ご質問等、コメント等ありましたら、ぜひシェアできたらと思いますが、いかがでしょうか。

私はタイの先生に質問があります。午後にプレゼンをしてくださる予定になっていますけれども、今の段階でコメント、ご質問ありましたでしょうか。

ワンワディ 私は午後にプレゼンをいたしました

ら、そのときにご質問をいただければと思います。

松尾 ありがとうございます。

先生のご提案を、すごく重要なことだと思っております。きょうハタ先生、それからアディ先生からも、ぜひそのソーシャルウェルフェアと、ソーシャルワークというところからのイスラム、ソーシャルワークについて、ちょっとコメントをいただけたらうれしいです。

ハタ 時間が非常に限られていますので、理論ですとか概念ですとか、そういったところに入っていきたいと思えます。イスラム教ソーシャルワークに関しての、まだ現在では表面のところを少しかじっているだけに違いないと思えます。今、モスクがどんなことをやっているかっていうことをプレゼンしてるんですけども、今、イスラムソーシャルワークのモデルを、少し話しているわけなんですけど、まだそういったことを真剣にお話をする段階には来てないと思えます。ただ今、やっていますという段階で、それを報告しているだけなんです。それからまた、現在のソーシャルワークの原則と、イスラムの原則が違っているところがあるかということ、それはあります。イスラムの倫理と、それから現在のソーシャルワークとの違いがあるか。あります。これを見ても、やはり類似点はもちろんたくさんありますけれども、違う点というものも、橋を架けることができない、違ったものがたくさんあるんです。原則自体が違っているところがありますので、それが最初の私の反応です。ですけれども、やはりアサノ先生がおっしゃったようなディスカッションをしていたと思えます。

私はプロポーザルにのっかってやっていけばいいと思えます。加奈さんがイスラム教ソーシャルワー

クというのは、こういった引用付きでおっしゃってました。これは意味というのは、なぜクォーターションを付けたかということ、その専門職がやってくるっていうわけではないということで、クォーターションを付けたんだと思えます。イスラム教ソーシャルワークというところには、クォーターションを付けておきました。インドネシアの動向は大学のレベルでは、ソーシャルワークのプログラムを、イスラム教のソーシャルワークに基づいて作っています。そして名前はイスラミックソーシャルワークという名前と呼んでいます。ですから私たちにとっても、これは重要な問題です。昨日、価値観に関して、あるいは哲学について宗教についてお話をしなければいけない。仏教ソーシャルワーク、それからイスラム教ソーシャルワークに関して、次回、そういったことをお話できればと思っています。仏教、それからイスラム教の価値観。それから欧米ソーシャルワークの価値観、それからまた宗教も、仏教、イスラム教のソーシャルワークの手法、それから西洋ソーシャルワークの手法に関して、お話をすることができれば、またテクニックについても、アプローチについてもお話できればと思います。

それから用語もそうですね。言葉も大事です。仏教のソーシャルワークで使われている言葉。イスラム教ソーシャルワーク、あるいは西洋のソーシャルワークで使われている言葉に関しても、調べていく必要があります。それからもう一つ、追加で言いますけれども、この主な宗教というものをまとめて考えていくというのは、社会へのアプローチに関してのチョイスというものを考える上で、とても有効だと思います。専門的、あるいは機能的といった話が、これまでも出てきていますが、やはりサービスを受けるときに、プロでないかたがたからサービスを受けたいといったニーズがあると思えます。です

ので、それを理解すると、何が今欠如しているのか。機能代替、それから近代のソーシャルワーカーに関して、一体何が足りないのかということを理解する上でのとっかかりになると思います。何かを求めているのに、何か他のことをやっているという、ターゲットグループに対して、うまく奉仕ができないという危険性があると思います。ですから、ちょっと違った定義というものを、例えばイスラム教、仏教など別々にするのではなく、宗教の、というふうにしていいかもしれません。もちろんこれは難しいかもしれませんが、そういうふうな形で、宗教のというふうにとめてみてもいいかもしれません。類似点があるはずです。その各宗教の原則まで踏み込まずに、類似点に焦点を当てることもできると思います。たくさんことができると思います。

松尾 ハタ先生ありがとうございます。では午前中をそろそろ終えなければならぬ時間となりました。仏教ソーシャルワーク、イスラム教ソーシャルワークの間に類似点があるということが分かってまいりました。本日午後、二つのプレゼンがあります。そして私はマナボル先生のプレゼンを代読させていただきます。ディスカッションはプレゼンの後、また続けていきたいと思っております。ありがとうございました。ではこれから昼食休憩にいたします。アディ先生、ハタ先生、ありがとうございました。午前の部は終了させていただきます。午後のご連絡ですが、12時から1時までの昼食の後、1時からまた午後の部を開催したいと思いますので、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

藤岡 それでは午後の部を再開したいと思います。イヤホンのほう、セッティングよろしいでしょうか。ハタ先生とアディ先生は、今、お祈りされているか

と思いますので、申し訳ありませんが定刻になりましたので、始めたいと思います。それでは午後の部は3人のかたがたに、まずお話を伺うことができればと思っております。それではサマド先生、どうぞよろしくお願いいたします。

(休憩)

◆基調報告「バングラディッシュからの報告」

Muhammad Samad (University of Information Technology & Sciences (UITS))

サマド 皆さま、こんにちは。藤岡先生、リソースコーディネーターの松尾さん。著名な教授の皆さまがた、秋元先生、そして親愛なる皆さま。あまり時間を取らずにお話をしたいと思っております。もう私の言いたいこと、ほとんど他の先生がたが言ってくださいました。最初に日本社会事業大学、社会事業研究所アジア福祉創造センターが主導する、アジアにおけるイスラム教ソーシャルワークの実践についての研究は、非常に素晴らしいものでありまして、感謝を申し上げたいと思っております。この研究はソーシャルワークの教育、そして実践に新しい方向を切り開く



Dr. Muhammad Samad

上での重要な第一歩となる研究であると思います。背景について、少し申し上げたいと思います。ソーシャルサービスと宗教の間には、長い歴史があります。現代の慈善事業というのは、聖書の教えの実践の延長線上にあります。中世のカトリック教会は貧困者のための、広範囲にわたる包括的な福祉制度を運営していました。福祉活動というのは、今までずっと存在してきたものであります。ザカートなどの話は、ザカートについては、もう今まで他の先生がたがお話になりましたので、ここは省略いたします。世界中の宗教団体や宗教機関が提供するソーシャルサービスというのは、近代社会の複雑性が求める訓練や実践によって変化させられています。

宗教が行うソーシャルサービスというのが変わっています。イスラムの社会政治的システムは、飢餓や貧困、無知や病を根絶することを目指しています。そして全ての階層の人々に満足と幸せをもたらすことを目指しています。この研究は、バングラデシュにおけるイスラム団体や、イスラム組織のソーシャルワーク活動を理解するために行われました。そしてこの研究の対象としまして、いくつかの事例を選びました。その他に多くのモスクのデータも集めています。バングラデシュの2011年の最も直近の国勢調査によりますと、宗教による人口の内訳はイスラムが89.7パーセント。ヒンズーが9.2パーセント。しかし40年前はヒンズー教が20パーセント以上でした。しかしながらヒンズー教者が残酷な目に遭ったので、インドなどに離散しました。そして仏教徒が0.7パーセント。仏教のいくつかの祭典やお祝いごとなどは、バングラデシュでまだ実践されています。仏教の祭日クリシュナ、そして12月25日も国民の祭日です。そしてその0.1パーセントは他の精霊信仰者ないしは無宗教者がいます。

イスラムの宗教組織、宗教団体、例えばモスクやマドラサというイスラム神学校や神殿や、あとムスリムの孤児院などがありまして、これらの組織がソーシャルサービス、ソーシャルワークを提供しています。そしてこのような団体は非常に素晴らしい仕事をしています。モスクは特に重要でありまして、ザカート、喜捨、そしてフィトラ、浄財を集める役割を果たしているとともに、宗教上の儀式や典礼を行っています。その他、モスク内で教育を行い、そして最近の傾向ですけれども、職業訓練の場もモスクが提供しています。これは政府も関わってまして、政府とモスク、共同で職業訓練の教育プログラムを提供しています。そしてバングラデシュ社会において、宗教指導者、ウスタード、これは他の先生たちも言及されましたが、ウスターズとも言いますが、ヒンディー語ではウスタードです。ウスタードはヒンディーの文脈では、ウスタードは宗教的な歌や楽曲、楽器の演奏を教える人たちですけれども、その他、宗教指導者やイスラムを教える人たちは、イマームもいます。あとフズルという人たちもいます。これらの宗教指導者は、国民の社会生活において、非常に重要な役割を果たします。非常に正直で尊敬されるべき、という人々と見なされていますので、政府はこれらの宗教指導者の役割を尊重して、最大限に活用しようとしています。

われわれの人口は1億6000万人です。小さい国なんですけれども、人口は非常に多いと。宗教指導者は人々の家庭生活も支援しています。例えば家庭内で問題があると仲裁役を果たしますし、婚姻関係の崩壊なども防ぐ役割を果たしています。この研究においては、モスクと二つのNGOを選択しました。これはモスクで行っている教育プログラムですけれども、これは宗教教育だけではなく、初等教育も行っています。読み書き、算数などです。これは政府が

提供している教育であると同時に、宗教教育でもあります。そしてモスクは医療サービスも提供しています。これは信仰治療であります。聖なる水をイマームが、宗教指導者が病気の人に振りかけ、そしてコーランを読み上げると、それで病気が治ると信じられています。しかしながら、その伝統的な治療法と共にモスクが運営しているクリニックなども、都市部にはあります。農村部にはあまりないのですが、都市部にはモスク運営のクリニックもあります。それと同時にモスクは社会文化的サービス、そしてレクリエーションサービスも提供しています。モスクでは、アラーをあげる活動をしています。預言者をたたえるレクリエーション活動も行っています。そしてコーランの暗唱会などもあります。そのようなコンテストも行っています。これがいくつかの結論ですけれども、既に申し上げたように、モスクや宗教指導者は例えば家族に、もうこれ以上子どもをつくらないほうがよい、などというような助言はします。中国ではないのですが、そういう助言もしています。

バングラデシュや人口が保有している資源と比較して、非常に多いので、さらにはこの社会に対する道徳的な教えを広める役割を果たしていて、一つの抑止力となっています。同性愛は、先ほど話にも出ましたけれども、ムスリム、イスラムによっては禁じられています。アルコールについても禁じられていますので、そのような善悪を宗教指導者が教え、悪いことをすると来世でどうなるか、地獄で苦しみを味わうなどという、そのような説明をします。これはアラビア語でゼゾクといいます。その他、緊急救援活動などを災害時には提供します。既にこのような話は出ていますので、これ以上詳しくはお話ししません。ケーススタディですけれども、最初が、サムハラムスリムオーファネッジ、孤児院です。この人は、地元の兵士、ダッカ首都の兵士であった人

でありまして、もう 100 年ぐらい前のことです。この人がおりました。この人がこの孤児院を設立しまして、そしてできたのが 1909 年です。ある時点において、この人が亡くなるまでは、彼だけがサポートしておりました。そして今では政府がサポートしております。コストの 40 パーセントをサポートします。255 人の孤児がここに住んでいます。少年が 141 人。少女が 114 人です。衣服や教育やいろいろなサービスを提供しています。また学校も持っています。こういうふうな孤児院の活動、食事を提供する。それから教室を提供する。それから一般的な教育や技術教育、それから体育もしています。こういった形で福祉活動を孤児のために行っています。

これは別のもので、こちらのほうはアンジュマムヒドルイスラム。アンジュマという意味は、他の人たちのために、という意味です。アンジュマというのはアラーのためのサービス。ムヒドルというのは役に立つこと、利用可能性ということです。できましたのは 1905 年です。もう 100 年以上前にできています。一つここで私が申し上げたいことは、このサービスはこの組織は、例えばいってみますと、同僚のルセリーさん。私と一緒に調査をしたんですけども、そうするといろんなことがこの中にありました。しかしながら通常は、その普通の人は、これはその埋葬する機関だというふうに知られているわけですが。ただ少年少女、例えば先ほどの孤児院と同じような形で、教育サービスも行っています。教育は一般的な教育、それから技術教育も行っています。ダフォンというのはアラビア語で、ダフォンサービス。これが無料の埋葬サービスです。無料で死体を埋葬するわけですが。1 カ月に 200 ぐらい。誰も親戚がいないという、誰も親戚だといわれるような人を埋葬しています。そういうふうな死体を 200 体を 1 カ月に埋葬しています。それでこれは有名な機関で

す。ただそれだけではないんですけれども、とにかく行ってみますと、よく分かるんですけれども、いろいろなプログラムをやっている機関なんです。救急車を派遣するサービスも兼ねてます。これも無料です。お金をあげることもできますし、別に出さなくても大丈夫です。それから緊急救済サービス。こういったものも適用しています。それからその理由であります、こうしたサービスをどうして提供しているのかということですが、その理由につきましても、加奈さんも、これアウトラインになります。

ここでコーランの2、3。ちょっと書いてある内容です。コーランの中には、金や銀を持つもの、すなわち豊かなもの、それをアラーのために使わないもの。使わないとやはり人道のために使うべきであると、そうしないと苦しむぞと。拷問が待ってるぞと。富を持っていながら、人のために使わないものは、拷問が待っているというふうに、これがコーランの中に書いてあります。死後、アウター先生もおっしゃったことですが、その富があるのに、ザカート、払わないものも苦しむぞ。その富を自らのためにのみに所有をするものは、苦しむぞと。ですからもしザカート、宗教税を払わないと地獄に落ちると、人道のために尽くせというのが、このコーランの教えです。それからまた、もう一つ書いてありますが、富で自らを清めよ。アラーのために清めよ。それは自らのためである。あるアラーは全て知っているのだと。だから他の人たちに助けをほどこすと、これは別にイスラム教徒だけではありません。他の宗教者に対しても手を差し伸べよというふうに言っています。重要なことだと、社会の危機のために、そしてモハメッドも信者に、こういう指示を出しています。病気の人たちに手を差し伸べよと。そしておなかのすいた人には食事を与えよと、というふうに言っています。これがイスラムの社会福祉です。

ですからこそ、このサービスの提供の理由。特にイスラム教徒はこういった理由があるわけです。ですからイスラムの教えを守るということ。それからまた共感、そして親切心を持つということ。これはもうコーランの、あるいはまたハディースのイスラム教徒として、人間として、みんなに共感をする。それからまた心理的な満足感を得るということ。人間だと。人間が他の人たちを助ける。あるいはまたある教育機関に寄付をする。あるいは病院や、あるいはマドラサ。教育機関に寄付をする。あるいは一般教育機関にも寄付をする。そうするとこういった形で、自ら心理的な満足感を得るということです。それからまた荣誉、名声を得るということもあります。これも私どもで1970年代に研究をしたんですけれども、一つ重要な知見が得られました。途上国、例えばバングラデシュなどにおきましては、ある人が豊かになる。そしてリソースを持つようになりますと、その社会のリーダーになりたがるわけです。リーダーになりたいと。そういった人たちが場合によっては、その組織を分割し、そのコミュニティのリーダーになると。リーダーになりたがる。ですからわれわれの議会、あるいはまた他の国の議会において、以前は非常に政治の好きな人がリーダーになっていたり、あるいはまた有識者がリーダーになったりしていましたが、今、非常に豊かな人も議員になるということがあります。そういうこともあるわけです。

ですからこの荣誉、名声を求めるということです。何か寄付をする。そしてあるいはまた、ある組織の事務局長とか、あるいはその会長になると、それは荣誉なわけです。名声が得られるわけです。ですから、こういうふうにする。ほどこしを行うということがあります。私も提言を持ってました。モスクにおきましては、別にモスクは職業訓練機関ではな

いと、しかしながら、そういった機能を果たす所も
あります。それから宗教機関はソーシャルワークの
知見をベースに、支援対象者のニーズ。問題を見な
がら、プログラム活動を計画、実施したらいいので
はないかと思います。こうした活動、今、申し上げ
たようなものは、体系的にすべきではないか。例え
ばマレーシア。私の国においてもそうですが、先ほ
ども話がございましたが、国のモスクは一つだけ
です。マレーシアにおいても、国のモスクは、それか
らまた州のモスク、それから地方のモスクがある
ということでした。モスクはバングラデシュにおい
て一番多いのは、ダッカに、世界中でもとにかくアラ
ブの世界も含めて、世界中で一番都市の中でモスク
の数が多いのはダッカです。ですからちゃんとまと
めなければいけません。そういう中でソーシャル
ワークの知見をベースに、対象者のニーズとかを考
えながら、プログラムを計画的に実施することは非
常にいいと思っているわけです。

それからまた、ソーシャルワークの学校とか、あ
るいはまた政府のソーシャルサービス部。これは社
会福祉部、社会福祉省の元に、ソーシャルサービス
というそういう部門があるわけで、そういったとこ
ろが共同で、例えばソーシャルワークの研修プロ
グラムを行ったらいいのではないかと、というふう
に私は思います。私ども多文化の国です。よりよいソ
シャルワーク、あるいはよりよいイスラムソシャ
ルワーク、あるいは仏教ソーシャルワークが、こう
いった取り組みでできると思います。結論ですが、
いろいろな限界はあるでしょう。しかしソーシャル
サービス、バングラデシュにおける、ムスリムの宗
教機関のソーシャルサービスの活動というのは、非
常にメリットがあり称賛すべきものです。精神的、
教育的、あるいは社会経済的な側面から人道的な
サービスを行わないというきらいがあります。これ

は重要な点です。イスラムは人間、人間というのは
創造主が作ったものという、創造主の最高度のサー
ビスとして人間を作ったという考え方があります。
ですからとにかく急進派の考え方を取れば、そうす
ると生活とそして宗教のギャップが、非常に拡大し
つつあるわけです。それからまたムスリムと、非ム
スリムの両方の生活に、非常に悪い影響が出てくる
わけです。イスラムの名を借りて、政治活動をしよ
うとする人間がいる。

ハタ先生も有村先生も、われわれ昼食のときに話
し合いましたけども、これはメディアで非常にはっ
きりしていると思います。こういうふうな影響、政
治的な、アメリカとか、例えばアラブにおいて民主
主義ではなく、ここの制度を維持するためにイスラ
ムの名を借りているわけです。アメリカとはいいい
関係を持っているけども、しかし途上国においては民
主主義が基盤を構築しつつあるとはいえ、やはりそ
ういう傾向は見るところができるわけです。です
から世界中においてムスリム、それからまた非ムス
リム、両方の生活に悪影響が出ているわけです。ア
メリカの大統領選においても、ある候補者がイスラ
ムはアメリカに入れるなといったことを言っている人
もいます。そういう背景の元で宗教指導者、ある
いはイマームは、もっと人道的な取り組みをすべ
きであると。そして貧しい人、恵まれない人の役に立つ
べきだ。それからまた他の宗教の信奉者と共に、イ
スタードもイマームも、キリスト教の聖職者、それ
から仏教の聖職者も一緒にまとまって、そして人
道的な取り組みをすべきだと私は思います。コミュ
ニティの主張は、そしてそういったことに取り組む
べきではないか。私としては、こちらに書きまし
たけれども、イスラムがわが国に来たのはスー
フィー主義という形で、イスラムがわが国に入
りました。イスラムがバングラデシュに書いた
のは、スーフィー

主義者を通じてきたのです。

彼らはジャングルを切り開いて、そして農業をし、社会経済的な活動をする。他の宗教指導者とともに活動したわけです。ですから、そういうコミュニティの調和がバングラデシュ、インドに見られるわけです。ですからわれわれのイスラム教というのは、他の国のイスラム教と違うんです。わが国においては以前として、コミュニティの調和の下で、生活をしています。他の国、アラブとかそういったところは紛争があったりする。イスラム教徒間でも紛争があります。ですからバングラデシュのイスラムというのは、ちょっと違います。非常にリベラルなイスラム教です。以上です。ありがとうございました。それから藤岡先生、加奈さん、秋元先生、皆さん、ありがとうございました。

藤岡 素晴らしいご発表、ありがとうございました。時間も30分以内ということで厳守していただいてありがとうございました。それでは続きまして、メルバ先生のレポートです。松尾さんのほうから発表していただければと思います。フィリピンのダバオ大学の先生でいらっしゃるメルバ先生のご発表でございます。それでは松尾さん、どうぞよろしくお願いします。

サマド 一つ申し上げたいんですけど、このプレゼンですけども、私は今回この中間報告のプレゼンで、本当にたくさんの方を学んでおります。ですので、これを私、社会事業大学のほうにもお送りしたいと思います。

◆基調報告「フィリピンからの報告」

Melba L. Manapol (Ateneo de Davao University)

松尾 皆さん、こんにちは。私、松尾加奈と申しま

す。2015年度日本社会事業大学国際共同研究プロジェクト「アジア地域における“イスラム教ソーシャルワーク”実践」のリサーチコーディネーターをしております。私はメルバ・マナポール先生の代わりにお話を申し上げます。残念ながら先生は、今回、日本に来ることができませんでしたが、このセミナーのために中間報告を出してくださっています。「イスラム教ソーシャルワーク実践：アジアにおけるイスラム教福祉活動について フィリピンの場合」というタイトルが付いています。フィリピンは東南アジアの列島の中にあります。フィリピン海と南シナ海の間にあります。そしてベトナムの東側に位置しております。フィリピンには7107の島があります。主な島はルソン島、ビサヤ島、それからミンダナオ島があります。人口は約1億人です。2014年現在で1億人でした。宗教に関しては、人口の80パーセントがカトリックです。そしてイスラム教は15パーセントになっております。そして5パーセントがキリスト教その他宗派と仏教となっています。フィリピンは環太平洋火山帯にありまして、赤道の近くにあります。そして天然資源が豊富です。また世界に類を見ない生物多様性を持っています。残念ながら世界で災害が3番目に多い国になっています。フィリピンの災害ですけども、毎年20ぐらいの台風が上陸しています。国連はフィリピンの経済は堅調であるとしています。経済はさまざまな問題がありながらも、成長を続けております。問題はいくつかあります。例えば緊縮財政、そして食料供給の不安定、ガバナンスの問題。武力紛争などがあります。イスラム教の歴史ですが、これは14世紀の「アラブ・グジャラート商人及び伝道師の時代」にさかのぼります。こういった人たちがイスラム教、フィリピンに14世紀にもたらせています。そしてイスラム教は、南のほうで主流の宗教になってまいりま

した。

アンヘレス (Angeles) によりますと、スペインは16世紀にフィリピンを植民地としキリスト教をもたらしましたが、イスラム教徒たちをキリスト教に改宗させることはできませんでした。現在イスラムは少数派の宗教となっております。そして80パーセントの人たちがカトリック信者ですがムスリム・コミュニティは各州にあります。キリスト教徒が多いエリアにもモスクが風景として溶け込み、幾つかの州ではイスラム教の学校が作られ、イスラム教に改宗する人たちも増加しています。かつては民族による違いがありましたが、フィリピンのイスラム共同体 (ウンマ ummah) は、現在、スンニ派、シーア派、そしてタブリーグジャマート、アフマディーヤ等より多様化したコミュニティになっています。そしてまた生まれつきのイスラム教徒と、イスラム教に改宗した人々に区別されます。

基本的にイスラム教のソーシャルワーク実践は、一般的なソーシャルワーク実践と異なる点はありません。ミンダナオのムスリム自治区のコミュニティでは、政府が提供するプログラムやサービスを受けています。貧困地域では、政府が支給する条件付き現金給付 (CCT; conditional cash transfer) プログラムを受けることができるわけです。教育支援も貧しい人たちに提供されております。ムスリム・コミュニティは、ウスタッド (ustadz) やリーダーを通じて、政府とパートナーシップのもとイスラム教の学校マドラサー (Madrasah) というものを開設しています。子どものための食料プログラム、また親のための扶助のプログラムもあります。戦争による被害を受けたコミュニティに対しては、イスラム教のリーダーと協働で政府やNGOによって救済活動や復興活動が提供されております。イスラム教のソーシャルワーク活動について、フィリピンでは

いくつかのカテゴリーがあります。政府が行っているもの、NGOが行っているもの。そしてウスタッド (ustadz) やイマーム (imam) が行っているのがあります。今回のこの中間報告の中では、二つのカテゴリーをお話します。イスラム教ソーシャルワークの中で、政府が行っているもの。それからウスタッドが行っているものをお話をいたします。

コミュニティで仕事をする上で、政府からのソーシャルワーカーはイスラム教とキリスト教の社会福祉活動の違いは全くないと言っております。これは、フィリピンは主にキリスト教の国であり、イスラム教というのは2番目に大きな宗教ではありますが、ただ人口の15パーセントしか占めていないことが理由として考えられます。したがって、フィリピン国内すべての地域で使われている枠組みは全く同じものです。いろんなプログラム、それからサービスも政府が全く同じ社会福祉ユニットを提供しています。プログラムの中には、キャパシティ・ビルディング (能力構築・向上) とトレーニング、それから社会的弱者 (子ども、高齢者、また女性など) へのケアが含まれます。また条件付き現金給付 (CCT) も行われておりますし、生活保護も提供されています。コミュニティのエンパワーメントなども、包括的な社会的サービスを通じて行われております。

しかし、ソーシャルワーカーや開発ワーカー達がムスリム・コミュニティに働きかける際には、イスラム教の価値観を用いてプログラムを導入します。イスラム教徒の人たちがイスラムに気を置いた上で、そのようなサービスにつながりを持つことができるようにするためです。ワーカーたちは、このプログラムとイスラムの視点を結び付けて提示することが大事だと言っています。人々が (福祉) プログラムを、なかなか最初は信じるのができないから

です。

現在、コミュニティの人たちにはイスラム教を実際には実践していないという場合も多いようです。実際にイスラム教を実践するということと、自称イスラム教ということとは違っています。イスラム教を自称しているだけの人たちというのは、自分にとって都合のいい部分のコーランだけを見ているといった傾向があります。

メルバさんのほうからいくつかソーシャルワーカーの活動事例を出していただきました。ジェンダー、それから開発に関しての言及があります。こういったジェンダー、あるいは開発といった考え方を、イスラム教のコミュニティに浸透させるのは難しい。特に男性に関しては、やはりイスラム教の視点に基礎を置いた上で説明しなければ、なかなか分かってもらえないと言っています。そこでディスカッションの方法として、イスラムにおけるジェンダー、そしてそれと開発をリンクさせる形での説明が行われております。メルバさんによると、もしこのジェンダーというものが、こういった視点で説明すると、イスラム教の男性たちにも受け入れやすい、分かりやすいといえます。またプログラムを導入するときに、やり方というものが大事だといっています。そして人々がこのワーカーの人たちが本当に誠意がある。そしてそのプログラムが信じられるというふうに感じるのが大事だといっています。

次にウスタッドによるイスラム教のソーシャルワーク活動、タウィタウィ・コミュニティ変革のためのイスラム協会（Tawi-Tawi's Islamic Association for Community Transformation）です。これはイスラミックアクトと略称されているものです。

イスラミックアクトは、社会経済、そして教育のサービスをコミュニティに介してイスラムの価値の

実践を通じて提供していこうとするものです。そして基本的なイスラム教の教育というものを、ウラマー（ulama イスラム宗教学者）や熟練した専門職達による基礎的なイスラム教育を通じて真実の平和、秩序、それから開発等の社会経済的、教育的な活動を行っています。タウィタウィ・イスラミック・アクトのミッションは、宗教と市民社会を結び付けて、変革を引き起こし、平和、秩序、開発、そしてコミュニティ全般の福祉を実現するものです。その会長でウスタッドのハイディド・アスタラウイ師によりますと、タウィタウィ・イスラミック・アクトは、現在のところ、いくつかの主要なサービス、それからプログラムを提供しています。特に平和の提唱、イスラム教リーダーシップ養成などのサービスを提供しています。

この組織は、基本的にイスラム教育にフォーカスを絞っている組織であり、その社会福祉活動には住民の福利厚生のために社会サービスを全てのコミュニティに提供するという含まれております。全てのイスラム教徒というのは、援助を必要としている人たちに何かしらの支援をしなければいけません。特に基本的なサービス、医療、食、住に関しては手助けをすることが求められています。これは全て貧困の緩和のためです。特にムスリム・コミュニティの貧困の緩和に役立っています。このタウィタウィ・イスラミック・アクトの中では、トレーニングプログラムも始まっております。イスラム教リーダーシップ、それからマネジメントのトレーニングが提供されております。そしてまたフィールドワークのプログラムも、子どもたちのために提供されております。なぜこのような活動をするかとタウィタウィ・イスラミック・アクトのハイディド・アスタラウイ師に尋ねたところ、「助ける相手がムスリムであろうと、ムスリムでなかろうと、われわれの究

極的な目的は、アラーに救いを求め、天国に行くことであり、また、政府によるより良い国家建設への寄与、社会全般の福祉と持続可能な平和に貢献である」と答えました。ハイディド・アスタラウイ師はムスリムからの財政支援が少ないため財源が足りず、ほとんどの場合、キリスト教のNGOをパートナーとして、社会経済サービスを実施してきたということです。これは教育や医療サービスも含まれています。ハイディド・アスタラウイ師は「我々のメンバーのほとんどは技術的なスキルがない。なぜかというところ、イスラム教指導者のもとで教育を受けてきたためメンバーはイスラム学やイスラム法には詳しいのだけれども、技術的な教育は欠けている。」と言います。

また、「ムスリムであろうとかならうと助けることの間には何も違いがない」と言います。というのもイスラム教はわれわれは人類全員に思いやりと慈悲を示すことを求めているからであると。これがサダカ (sadaqah) で行う慈善サービスの一部であります。そしてその結果、われわれはアラーから来世に、特に来世においてご褒美を受けられるとハイディド・アスタラウイ師は言います。

メルバも他の発表者と同じようにザカート (Zakat) について書いています。ザカートというのは、イスラムの五つの柱の一つでありまして、イスラムの基盤の一部であります。ザカートというのは生活に余裕のあるイスラム教徒に対し、毎年手取り所得の5パーセントを貧困者のために寄付をすることを義務付けた制度であります。ザカートの分配というのは、さまざまな組織やエージェンシーが行っています。そして受益者を対象に、さまざまなプログラムを実施していきまして、どのようにザカートを貧困者に分配するかというのは、きちんと考えられています。組織によっては直接お金を貧困者に

提供するのではなく、生活、生計を立てるためのスキルを身に付けるための財政的支援を与えます。現金でも良いのです。しかしながら、現金を渡してしまうと、これはいかにも貧困者にほどこしをしているという感じになってしまいます。これをタガログ語で、「Isang Kahig, Isang Tuka」といいます。

ザカートは義務であります。サダカというのは、いわゆる任意でありまして、自由喜捨でありまして、これは全ての人に分配されます。サダカはイスラム教徒以外にも分配されます。キリスト教にも、そして場合によっては贈り物などの形で、お金持ちにも分配されます。

フィリピンにおけるムスリムのソーシャルワーク活動は、貧しい者、孤児や旅人²、そしてその他の助けを必要としている人々のニーズを満たすためコミュニティ全体を支援し公的 (フォーマルな) 社会サービス確立を目指します。「ニーズ」には、短期・長期あるいはその両方にわたる、経済的な支援、結婚カウンセリング、教育支援、救済活動、リハビリテーションなどがあります。

ムスリムの地域への政府のプログラムやサービスは社会福祉開発省 (Department of Social Welfare and Development; DSWD) を通じて供給されています。ミンダナオ、フィリピンのムスリムが多く住んでいる所ですけども、ここでのソーシャルワーク活動というのは、識字率の向上、または職業訓練などを地域の全ての集団の人々に提供すること等開発イニシアチブというのに焦点が当てられています。場合によっては、ソーシャルワーク活動というのは台風や洪水や地震などの自然災害に見舞われた地域の支援も含みます。

メルバ先生は、社会福祉及びソーシャルワーク活動を、なぜ行うか、それをやっている人たちは、どのような理由があるかという分析をしています。

最初に、これは人を助ける機会であると。社会福祉及びソーシャルワーク活動をするということは、多くのウスタッドによって、これは人助けをする機会と捉えられています。人を助けることによって気持ち満たされるのです。人助けをしている間は疲れるかもしれませんが、コミュニティにその人助けの結果が現れ始めると、そして感謝されると、満足感を得られるのです。二つ目、良い行いはいずれ報われると、イスラムでは常に人助けをしていれば、必ず自分に戻ってきて、アラーから褒美をもらえると、そう考えられています。1人の回答者はこうしていました。「意図さえ良ければ、良い思いが背景にあって行動すれば必ず報われる。」そう言っていました。三つ目は自分の責任であると捉える人がいます。これはウスタッドやソーシャルワーカーにとって言われることです。責任感というのは、人に奉仕するインスピレーションとなります。なぜかといいますと、人に奉仕するということは、神への奉仕に等しいからです。回答者の1人はわれわれは人助けをする。そして責任を果たす。なぜかといいますと、来世、そして死んだ後に、もし現世でちゃんと責任を果たさなければ、それを来世で問われるからと言っています。四つ目は知識の共有。ウスタッドたちは、通常アラビア語の勉強をしています。イスラムの宗教の元では、自分が学んだことは全て他の人と共有すべきであると教えています。イスラムにおいては、親は子どもに良いマナーや礼儀作法を教えています。その重要性をきちんと教えています。五つ目は社会的道徳的義務。イスラムでは、これは困っている人を助けるというのは、社会的、そして道徳的な義務であります。ムスリムであろうと、ムスリムでなかろうと、われわれはアラーの救いを求め、そして天国に行こうとしています。そして政府が国をもっとよくしようとする努力に貢献しなければ

なりません。それによって持続的可能な平和を求めているのです。六つ目ですが、予言者モハメッドと、その教え。何人かの回答者にとってはインスピレーションはモハメッド自身でした。彼らはモハメッドはこの世に生きた、最も偉大で心優しい人でした。モハメッドは純粋な動機、そして優しさ、そして完全な謙虚さを持って生きていました。さまざまな問題に直面しても、それを乗り越え、優しさを忘れず、神への中世というのを失うことはありませんでした。そして7点目、経済的な理由。世帯を持って、家族を持ち、そして生活費を払わなければいけないというのは、一つのソーシャルワークをするモチベーション、動機になると、そのような回答もありました。

最後はザカートとサダカです。イスラムの五つの柱の二つが、ザカートとサダカです。ザカートはイスラムの税金に相当するものであります。これは純所得の手取り所得の2.5パーセントでなければなりません。貧しい人は祈り(dua: ドゥアー)を暗唱することによってザカートをもらうことができます。または信心深くイスラム教を実践している者に対してもザカートは支給されます。例えば、イマーム。高齢の未婚で扶養するものない女性や孤児等です。ソーシャルワークの取り組みとしては、われわれが望むほど革新的な、斬新な発想ではないかもしれませんが、ザカートというのは、貧しい人、そして社会的弱者を優先しています。もう一つはサダカであります。サダカは自由喜捨、任意であります。これは現金、または物で提供することができます。以上がメルバの報告でした。ありがとうございます。

藤岡 松尾さん、ありがとうございました。続けてご発表いただいて、皆さんからのご質問を受けることができればと思います。それでは続きましてタイ

のワンワディさん、よろしくお願いいたします。

◆基調報告「タイからの報告」

Wanwadee Poonpoksini (Thammasat University)
ワンワディ 神の名の下に皆さん、こんにちは。タマサート大学のワンワディ・ポンポクシンと申します。この研究内容は、私の研究であります。質問が答えられない場合、皆さんのサポートを得たいと思います。タイのイスラム教コミュニティにおけるソーシャルワーク、社会福祉でありますけれども、私の内容はちょっと違う点があります。といいますのも、タイにおきましてフィリピンよりもさらに一層、タイにおきましてはイスラム教徒はマイノリティです。最初、導入部ということでどういうふうな形で、こういったことをやったか。そして研究内容、それからまた、研究の内容についてお話をしたいと思いますけれども、タイの社会経済発展 2015 年第 3 四半期の状況。タイにおきましては、例えばこの期間におきまして、児童労働の問題、相当進捗しまして、最悪の状況の児童労働については、相当削減できたと思います。それからまた教育の質も改善しました。それからまた、アルコールの施設が増えまし



DAssistant Prof. Wanwadee Poonpoksini

た。今年の第 3 四半期の経済は 2.9 パーセント伸びました。これはマレーシアと同じぐらいの状況だと思います。今は軍事政権になっております。これは去年からの状況です。今年も軍事政権が続いております。それから人口動態でありますけれども、今の人口は 77 の県がありますが、大体 6500 万ぐらいの人口です。5 歳以下の人たちが 6 パーセント。そしてその他の情報もこちらに書いておりますけれども、大体タイにおきましては、仏教徒が大半を占めております。

タイにおけるソーシャルワークについてご説明いたします。1986 年に最初の病院ができました。こちらの病院、大学病院みたいな感じのものです。そして 1893 年にタイの赤十字が発足しました。ホームが発足したのが、1911 年です。そしてタマサート大学において、社会行政学部が 1954 年にできております。ですからもう 62 年たっております。2013 にソーシャルワーク専門職法という法律ができました。またソーシャルワークにつきましては、八つの大学で教えられております。このソーシャルワーカーで、このソーシャルワーク専門職法の下で登録している人間が、1506 名おります。これは Web サイトから取ったものです。社会発展省というものがあまして、そういった所と教育省が連携をして、この専門職の育成に取り組んでおります。タイにおけるイスラムでありますけれども、タイの憲法の下で仏教が国境と定められておりますけれども、しかしながら 2015 年に憲法の草案が発表されまして、これにおきましてはタイにおいては、仏教も保護しているが、しかしながらタイの大多数は仏教徒であって、長らくこの宗教を守ってきたと、しかしながら他にもこの宗教はあって、そして各人の宗教の理解を推進をしていく、ということ、この草案の中でうたっております。私はタイのイスラム教徒

として、私は他の人たちと同じだと、ということが言えるわけです。

タイのイスラム教徒の人口について申し上げます。これはタイの地図です。タイの人口は、大体6500万です。仏教徒は93パーセントぐらい。そしてイスラム教徒は大体5パーセントぐらいです。この5パーセントのほとんどの人たち、80パーセントぐらいが南部におります。そして20パーセントぐらいの人たちは、タイの中央部の県におります。それは私もこの中におります。それから北部に1パーセントぐらいのイスラム教徒がおります。南部の人口であります、マレーシアに近い部分、イスラム教徒が28パーセントぐらいです。ただやはり大多数が仏教徒で70パーセントです。タイの人口達成指標というのがありますが、アラタニワパタニヤラにおきまして、大体イスラム教徒がこういった所では、中心になって住んでおります。家族、それからコミュニティの状況、それからまた教育レベルが低いという状況が、こちらの地域に存在しております。こちらのほうは、前回の国勢調査の数字に基づいております。タイにおけるイスラム教関係の団体でありますけども、タイにおきましては、二つの組織があります。一つはイスラムオフィスというものの、ラスムンティと申します。これがタイのイスラム教のリーダーです。それからもう一つが、タイ、中央、イスラム評議会というものです。登録されているタイにおける礼拝堂の数、大体80パーセント以上が南部に存在します。しかしながら中部はたった13パーセントです。北部が1パーセント、それから北東部1パーセントで、全部で3722のイスラム教の礼拝堂があります。

こちらをご覧いただきたいと思いますが、こちらにたくさん情報が盛り込まれております。タイのイスラム教関係の組織ですが、先ほど二つの組織があ

るということを申しました。三つがこのイスラム教のリーダーがいる所です。左側のほうです。ここでタイのイスラムについての議論を行います。しかしこのタイ中央イスラム評議会、右のほうの団体。こちらのほうはタイにおけるシステムの対応をしているということです。タイには77の県がありますが、しかし40の県のみにおきまして、県単位のイスラム委員会があります。またこの40の県におきまして、少なくとも三つの登録されているモスクがあります。それからまたタイ中央イスラム評議会ですが、ここに各県の代表委員会というのがあります。この委員会に代表者を送っています。40人です。40の県から40人が委員となっております。それからまた、リーダー委員会というのがありまして、大体3県に1県からリーダーが出ております。しかし40県からリーダーが出ている県の委員会。大体こういった人たちが、リーダーを選出します。県単位のイスラム委員会もあります。ですからこの三つの団体はお互いに関係しております。研究の目的について申し上げます。私の研究につきましては、単位のさまざまな組織のイスラム、ソーシャルワークの経験について研究をする。この中にはタイのイスラムコミュニティレベルの社会福祉も含まれます。それからこの調査の前提です。

宿題を私もいただきまして、それでケーススタディ、イスラム、それから四つ、五つぐらいケーススタディをしろということでしたが、ちょっと私どもは他の国とは違います。他の国においては、イスラム教徒が多数でありました。イスラム教の福祉というのは、生活の質の向上に不可欠な基本的な必要事項を全てカバーしているわけではありません。そうしたサービスは、国から提供されております。官民の機関から、いろんな情報を検討することが必要です。それから二つ目にサンプリングの抽出に尽き

ましては、いろんな側面を検討するようにしました。と言いますのも、タイは多様な国です。いろんな組織がある。それからまた、いろんな個性のある団体がありますので、やはりイスラム、それからまた、タイの社会を代表するようなところを選びました。ザカートにつきましては、皆さん、このザカートについておっしゃいましたが、この研究においては、特にザカートに集中して研究を行っておりません。と言いますのも、実施の方法管理。成功の度合い、効率効果は、大体同じではないかと思えます。どういふふうに、このザカートを管理するかというところは、ちょっと違うかもしれません。それから最後の点ですが、研究者自身がイスラム教のインサイダーです。私の知見を通じて、調査内容を理解することになります。そういう意味で、ちょっと私、ムスリムでありますので、この中でも私の若干主観的な要素も入っているといえます。それからちょっと定義について考えてみたいと思います。タイの社会福祉ソーシャルワークですが、それからまたこの社会福祉、それからまたソーシャルワークにつきましては、必要とする全タイ国民の保護、是正措置を目的とするサービスでありまして、これは国家の主要任務であり、人種、宗教、文化による差別なく平等に基本的必要事項が得られるようにすることが主眼です。

それから二つ目のムスリムグループにおける社会福祉。こちらは保護、更正、処置、支援に関するサービスです。二つ側面があります。一つはサービスを提供するのは、イスラム教徒、あるいはその他の宗教の信徒であるということ。それからまた二つ目、サービスを受ける側はイスラム教徒で、イスラム教のサービス提供をしてから、サービスを受けます。最後の点です。これ書いたんですが、どのようにこの目標を達成すればよく分かりません。その専門

職、イスラム教ソーシャルワークですが、宗教的アイデンティティ、原理、信徒、信仰の実践。そしてその実践上のアプリケーションについて意識を有しているイスラムサービスユーザーに対し、イスラム教、あるいは非イスラム教の提供者による保護、更正、処置に関するサービスということ。例えばイスラム教では、中絶は認められておりません。ソーシャルワーカーは、そうした問題の対策を考える必要があります。宗教的原理、社会福祉の実践。医療上の倫理の調和する形で、問題を解決する必要があります。こういうふうな問題、非常にセンシティブな問題です。でも何とかできるのではないかと、例えば臓器のドネーションといったものも難しい問題です。

そして次が研究の範囲です。この青い所です。私のペーパーの中での対象者はイスラム教徒です。ですけれども、タイの中ではやはり一般の組織からサービスを受けるということも、もちろんあります。です。こちらのプロバイダーのほうはイスラム教徒と、イスラム教徒でないものを両方出しておきます。イスラム教徒に関しては、ザカートがあります。これはイスラム教徒のための、イスラム教徒による福祉です。そしてまた、イスラム教徒以外に関しては、利用者はイスラム教徒ですが、公共機関、それから民間の機関、一般のイスラム教徒でないところがイスラム教徒に対しても、サービスを提供しています。それからイスラム教徒以外の方に関しては、仏教ソーシャルワーク、その他ですけれども、私には関係のないところです。すぐに研究の手法ですけれども、私は1次データ、2次データを使っています。これまでの過去の文献、それから研究 Web サイトを調べていますし、またフィールドワークに載っています。コミュニティのリーダー、それからソーシャルワーカー、それからその他のかたがたで、私のリ

サーチに関係のあるかたがたにインタビューをしております。こちらの図1です。この後、ケーススタディもやっておりますが、いろいろな組織がこのようにあります。そしてそれをこのように分布いたしました。こちらのほうは、イスラム教徒のためのイスラム教徒による組織です。そしてイスラム教徒に関しては、宗教の原則に基づく義務があります。それからまた、ボランティアの仕事もされております。それから孤児のための団体もあります。

そしてこの右側のほうですが、一般的なソーシャルワークの組織です。タイでは私たちはイスラム教徒のソーシャルワーカー、何人いるか分かりませんがいます。イスラム教徒のソーシャルワーカーとイスラム教徒ではないソーシャルワーカーの人たちがいらっしやいます。そしてこれを二つに分けて、この下のほうで書いてあります。レインボースカイアソシエーションタイランドという所を、私は調べております。レインボースカイアソシエーションというのは、とても大事な組織だと考えています。それからもう一つ、チュラーロンコーン記念病院などがあります。それからイスラム教のソーシャルワーカーのほうですけども、南のほうにある組織があります。それから高齢者向けの組織もあります。こちらの二つのほうは、タイの南のほうですので、イスラム教のソーシャルワークがあります。私の学校で、卒業した後、自分たちの故郷に帰って行ってタイの南部のほうで、このようなソーシャルワークの仕事に携わっております。こちらの左側にありますが、ザカート、黄色い部分、この二つになっています。ケーススタディが二つあります。まず一つがザカートシステムで、タイのイスラム教徒のコミュニティにもものです。それからもう一つが、イスラム教徒の緩和ケアに関するものです。

まずケーススタディの1のほうです。ザカートシ

ステム、これはタイのモスクなんですけども、これは本当に大きなモスクになっております。バンコクの近くの県にある大きなモスクです。モスクの中には宗教学校もあります。そして同じコンセプトで活動が行われています。イスラム教の子どもたちというのは、宗教の学校に行き、宗教を学ばなければいけないんです。そして親もそのように息子、それから娘というものを、宗教の学校に送らなければいけません。そしてイスラムの原則を学ばなければならないことになっています。イスラムの原則というのは、もう既にみんなの心の中にあると思います。イスラム教の教育を受ける、その学校に行かなければいけないということが、義務付けられています。それからイマームというのが、イスラム教のコミュニティのリーダーとなっております。モスクと、それからこの宗教の学校を分離することはできません。本当に一体化している、ということがあります。私のコミュニティでも学生たちが学ぶ学校がありまして、500人の学生たちが無料でイスラム教の原理をここで学んでいます。イスラムの五つの柱ですけども、これも既に皆さん、ご承知のことだと思います。まず宣言、それから礼拝、そして断食、この三つに関しては経済力に関係なく全員がやらなくてはなりません。ただザカート、食べ物、富のザカートに関しては、これは巡礼と同じように経済力のある人がやるということになっています。お金がなければ、この4と5をやらなくてもいいということになっています。ですが3と2と1、この三つは、お金があろうとなかろうと、全員がやらなければならない内容となっています。

これはザカート、食料のザカートです。タイのコミュニティの中では、他の国とちょっと違っているかもしれません。みんなラマダンと関係していますので、どのようなかたがたが、その食料に関しての

ザカートというものは払うという意図があります。そしてコミュニティの中では、このかたがた、つまりイスラム教の改宗したかたがたを重視しております。この人たちにザカートをあげるということを重視しています。そしてその後、極貧のかたがた、貧しいかたがたにもザカートが提供されております。こちらの上のほうにザカートを提供しているわけなんです、次にこのザカートの教育ですが、これはイスラム教の宗教税とっていいのかもしれませんが。これはコミュニティの経済に直結していることです。富のほどこし、ザカートに関しては、これは必要な資産を持っている人たちに義務付けられております。そしてこの残りのザカートというものは、このモスクの委員会というものがあまして、モスク、それから宗教学校のために、このザカートの中から支出をしています。カイロの大学を卒業したかたがたであっても、給料が低いという場合があります。でもそういったかたがたでも、若干のザカートを出しています。次に下のほうが食料のザカートです。私がきょうザカートをもらおうとすると、もしかするとその後、今度は与える側になるかもしれない、という理解があります。食料というものは、やはりこれは全員が寄付をするという義務があります。

モスクのほうで、貧しい人からさえも食料を集めます。そして貧しい方であれば、後でこれは返してもらえるとということになっております。大体90パーセントぐらいのかたがたが、毎年ザカートを受け取って、食料のザカートを受け取っています。高齢者が多いです。次にケーススタディ2です。緩和ケアセンターです。これはチューワピバンというのはライフケアという意味があります。ここはチュラロンコン記念病院です。チュラロンコン大学の医学部の付属の病院です。大学では大学病院で、緩和ケ

アが通常行われております。メディカルソーシャルワーカーにお話を聞きました。そしてイスラム教徒がこの緩和ケアのユーザーでした。どのようにイスラム教の側面を扱っているかということ、調べてみたんですが。高齢者が病院に入院をしました。そして意識がなかったんです。そして私がこの患者さんに関するミーティングに招かれました。やはりもう意識がないということで、宗教にも問題にも関係があるというのです。脳死の場合、緩和ケアをするということがあります。それからまた病理学、それからその予後にも関係があります。そしてまた親戚のかたがたの意図というものもあります。やはりそういう生命維持装置というものを外して、うちに連れて帰りたいと。つまりイスラム教徒は家で亡くなるということになっていますので、連れて帰りたいというご家族の希望もありました。

ただしここには病院の方針があります。やはりチューブを勝手に外すことはできません。ただしイスラム教の原則というものは尊重しなければならないと私は考えています。また、もう一つこの緩和ケアに関しての要因ですが、医療従事者の倫理観というものもあります。先ほど申しましたように、病院の方針というものがあまして、勝手にチューブを外すことができないということもあります。そしてリビングウィルというものもタイでは使われております。最終的に判断した内容は、どういうものだったかといいますと、たくさんのこのように、イスラム教の患者さんにはいろんな要因があったんですが、やはり予後、それから患者さんのフィーリング、考え方、ニーズというものを考えなければいけないと、私たちは結論付けました。やはりこのようにイスラム教の患者さんに関しては、さまざまな要素を考えなければなりません。このタイにおけますイスラム教のソーシャルワークというものは、専門家の

実務課が行っているものだけではありません。ですが、タイにおきましては、市民は全員同じ権利を、どんな職業であっても持っております。そしてタイのソーシャルワーク、それから社会福祉というのは、とても美しい側面。それからまた独自の側面を持っているということがいえると思います。タイというのはほほ笑みの国といわれています。

そういったいい面を世代を超えて、私たちタイでは受け継いでおります。またこういったサービスを提供するかたがたに関しては、インタビューも行ってまいりましたが、他のかたがたの文化を理解する。つまり文化の違いというものを、尊重することが大事だと言っていました。こういった考え方は大事だと思えます。イスラム教のコミュニティというのは、互いに助け合うということが行われています。イスラム教の原理に基づいて、これは要求されているということもありますし、またボランティアとして助けると、ということがあります。これはタイ語で、ここを説明しているのですが、イスラム教ソーシャルワークというのは、タイ語ではこのようになります。私たちの学部というのは、社会行政学部となっております。そして社会福祉はタイ語ではこのようになっています。ザカートに関しては、アラビア語です。ザカートといってもみんな分かります。ただしタイ語で言うこともあります。これは義務的なほどこしというタイ語の意味です。なぜこのような活動をするのか。これは二つに分けて考えてみました。まずはザカート、宗教と次元で考えています。もう一つ右側のほうですが、民間、それから公共機関の視点から見えております。まずザカートに関しては、イスラム教の信者というものがザカートを提供することが求められています。

そしてまた、お互いに助け合うということが、イスラム教では必要です。ただこのソーシャルワー

カーの次元、右側のほうから言いますとやはり他者の文化の違いを認める、ということが大事です。またプロのソーシャルワークの実践、心を込めた仕事というものが大事です。そしてまた宗教的な側面から言いかけても、やはり良い行いをする価値というものが、イスラム教の中では強く求められております。そしてそういったことに基づいて、ザカートが提供されております。そして次に推奨する内容と教訓ですが、イスラムの信仰に関わる社会的側面における組織のパフォーマンスの調査をすべきだと思っております。また信仰と、それから専門ソーシャルワーカーとしての業務の遂行の間の摩擦というものがあると思えます。例えば、その家族計画ですとか、あるいはその寄付をするとか、そういったことを重要なトピックとして考えていくことが大事だと思えます。それからもう一つ、この社会福祉の形ですけれども、例えばイスラム教徒のためのイスラム教徒による組織というものがああります。さまざまな形態を考えていく必要があるというふうに思っています。またこの組織の管理というものも、重要な視点だと思っております。またこの富のザカートの管理に関して、どういうふうにしたらうまく管理しているのか、ということも考えていかなければいけないと思えます。コミュニティの経済に関しては、ザカートは重要な役割を示しております。

現在のところ、ザカート資金調達推進法というものが考えられているんですけども、これは政府が法案として考えていますが、ザカートというのは、本来は全員に義務付けられているはずなんです。ですので、この法律がなくてもいいんじゃないかと考えております。それからもう一つの点といたしましては、イスラム教徒ではないソーシャルワーカーが、イスラム教徒のクライアントのための仕事をするときには、どうすればいいのか、というところ。つま

りイスラムの文化の理解が必要であると思っています。ただ他の組織がこの点、どう考えているかは分かりません。私たちは大学病院をケーススタディとしていますので、他の組織はどう考えているかは分かりません。最後の点ですが、イスラム教ソーシャルワークというものが、やはり重要な貢献をしていると思っています。イスラム教徒の目的と、それからイスラム教徒でないかたがたの目的というものは、違っているかもしれませんが、そうではありましても、イスラム教徒は全てイスラム教の原則に基づいてやりたいと思っていますけれども、イスラム教ソーシャルワークというものは、それでも重要なインプットであるということには、変わりがないと思っています。次にこの調査の限界点なんですけれども、このサンプルの数。これがイスラム教ソーシャルワークを全てうまく代表しているとは限らない、というふうに思います。ですけれども、もっとたくさんのケーススタディを行っていきたくと思っています。それからまた、このサンプリングですけれども、タイのイスラム教の社会の現実といった観点を、考慮に入れた上でサンプリングをしていかなければならないと思いました。

寺院ですとか、あるいはウスターですとか、あるいは僧侶だけですとか、そういったものだけでなく、もっとたくさんの広範囲のサンプルを取る。そしてまたインタビューをするということが大事だと思います。ソーシャルワーカーでイスラム教の方、イスラム教でない方に関しても、インタビューをしていく必要があると思います。そしてまた、このさまざまな次元で、この結果の分析を行ってディスカッションをしていくということが大事だと思っています。そして結論になりますけれども、タイにおきましてはイスラム教徒は、少数派です。ですけれども、権利、それからサービス、これは全く同じものです。

そしてイスラム教のコミュニティの強さと、この権利は同等であるということを組み合わせることで、まして、イスラム教徒というのは、これから生活と質を向上していける余地があると思っています。そして色々な他の宗教のかたがたと、うまく共存していけるというふうに思っております。こちらのほうで、七つのタイプの社会福祉があります。教育、タイの市民は無償の教育を受けることができます。次に右側のイスラム教ソーシャルワークですけれども、みんな学校に行くことになっております。そしてタイでは2カ国語での教育が行われております。イスラム教のリーダーたちが2カ国語で、タイ語とそれから英語で教えています。次に医療ですけれども、タイでは30パーツの医療、ヘルスケアがあります。タイ人は全員、このような健康保険があります。ただしイスラム教徒に関しては、若干違った点があります。

政府はこのイスラム教に関しましても、医療が無償で提供されています。次に社会サービスです。障がい手当が行われていますし、また高齢者の生活費の補助があります。イスラム教に関しては、イスラム教バンク、次に住宅です。安い家賃の住宅のプロジェクトがあります。イスラム教徒に関しては、エリアというものがあまして、土地が提供されている、ということがあります。社会保障に関しては、医療保険があります。大体30パーツぐらいで、社会保障があります。イスラム教徒に関しては、ザカートがあります。私のほうからは以上です。ご静聴ありがとうございました。社会事業大学の皆さまに、感謝を申し上げたいと思います。

藤岡 ワンワディさん、ありがとうございました。休憩までの時間がもう少しございます。皆さん、時間どおりにご発表いただいたおかげで、ディスカッ

ションの時間を少し休憩前に取ることができます。3人のかたがたからご発表いただいたわけですが、それぞれのかたがたへ同じ質問でもよろしいし、この方に、というご質問でもよろしいですので、この時間、ご質問いただければと思います。いかがでしょうか。どなたからでも。どうぞ、ご質問どうぞ。お名前をお願いします。

相宮 一般から参加させていただいております、相宮陽子と申します。きょうは本当に貴重なお話をたくさん伺えまして、本当に感謝いたします。ありがとうございます。質問なのですけれども、ソーシャルワークをするモチベーションの、フィリピンのメルバ先生のプレゼンテーションの中に、そのソーシャルワークをするモチベーションの一つとして、経済的な理由があるということがあったかと思うんですけれども、ソーシャルワークの活動そのものが、そのイスラム教の教えの中に入っているというお話だったかと、特にそのハタ先生は、そのイスラム教はただの宗教ではなくって、信じている人の生活や人生そのものであるというふうに、おっしゃっていたかと思うんですが、だとするとその経済的な理由で、ソーシャルワークを実践するっていうことについて、宗教的な倫理観と矛盾するように感じることはないですか。

ハタ メルバ先生の代わりにお答えするわけにはいきませんが、彼女の意図が分からないので。でも今、おっしゃったとおりです。もし奉仕のためにやっているのであれば、経済的な理由でやってはなりません。おそらくメルバ先生のおっしゃったこと、これは私の推測ですけども、みんなそれぞれ信仰心は違います。やはり信仰心がとても深い人は、それをやることに意義があるのでやるわけです。神のために

やるのです。信仰心がそれほど強くない人たち。やはり生活するにはお金が必要です。ですから、やはりこのソーシャルワークをする一つのインセンティブ、動機付けとして、何らかの報酬を得るというのは、あるのかもしれませんが。これはあくまでも私の憶測。推測でありまして、あなたがおっしゃったとおり、矛盾はあります。イスラム教の教えの下では、やはりその経済的な、またはその他の見返りを要求しては、期待してはいけません。それをもっと一歩進めますと、神からの報酬、神からの褒美などというものも期待してはなりません。スーフィー教の人たちは、地獄を恐れているからやるのではない。そして天国に行きたいからやっているのではない。神を愛しているから、その理由のみでやっているのだと言っていますが、全員そのような姿勢を取ることを期待することは無理かもしれません。

藤岡 この件は恐らく、今後も議論出てくるかと思えます。ありがとうございます。よいご指摘で。

松尾 メルバ先生の代わりに発表した松尾ですが、今のご質問については、もうちょっと深く書いていただくか、今回は中間報告ということですので、そのようなご質問があったということは、マナポル先生にお伝えしたいと思います。ありがとうございます。

藤岡 他、いかがでしょうか。木村先生どうぞ。

木村 今のともちょっと関連するんですけど、サマド先生のご発表の中でも、その方の名誉名声というようなところのことが、出ていましたけれども。欧米でもこれが一つの一種のステイタスとして、社会的な奉仕をするというようなこともあるかと思う

んですけれども、そういったところはどのようになっているのでしょうか。ご意見を聞かせていただけるとありがたいです。

サマド 私が思うところ、社会事業大学は二つ研究結果をまとめたものを発表しています。一つはソーシャルワーク教育の国際化、そしてもう一つは社会福祉教育の、その地域に適用されたソーシャルワーク教育というのがあります。われわれは知識を取り込むときには、われわれが住む地域、そしてその対象となる人々の地域の知識、そしてそれをその当該社会の文化に適合させることが大切かと思います。ソーシャルワークの専門職者が NGO のみならず、政府でも職を得ることができ、そうしますと自分が認められた気持ちになりますし、そして人類のために良い仕事ができると、そのような環境づくりが必要であります。今のご質問は、自分の名声、そして良い行いをして、それが認知されるか、そのような趣旨だったと思いますが、この認められたいという欲望と、欲求と、その報酬をする、したいという気持ち、それをどう折り合いを付けるかというようなことだと思うんですけれども、つまりその認められたい、先ほどの質問は経済的な報酬が欲しいということ、イスラムは矛盾していると、今のは認められたいという願望、社会的なステータスが欲しいということと、イスラムの教えというのは、どう折り合いを付けるかと、そういう趣旨なんでしょうか。先ほど申し上げましたけれども、社会をリードしたいという人がいるわけです。リーダーになりたいという人、そしてソーシャルワークをすることによって、人々に手を差し伸べて、広く知られて、そしてリーダーになることができるのです。そしてフィリピンの先ほどの経済的な見返りの問題ですけれども、フィリピンのイスラムソーシャルワークというのは、NGO

や政府と共同しています。

そしてさまざまな投資をしている人たちもいますので、実際、それによってお金が入ってくるのです。それと共に社会的地位もソーシャルワークをすることによって、得ることができます。そしてソーシャルワークを通じて、政界、政治家になる道が開けたり、そのようなことができるようです。そのような国もあるというのが私の認識です。違う次元の話ですけれども、そのスピリチュアルな観点から言いますと、このようなもの全ては無視すべきなのです。見返りとか人に認められるとか、これは良い行いをする、ということに対しての肝心なアンチテーゼですけれども、仕方がありません。人間は弱いものです。ムスリムも強がってはいますし、立派だと思いたいのですが、それほど強くありません。

藤岡 ありがとうございます。だんだんこの辺に触れた話ができていると思います。もうひとかたぐらいご質問が受けられると思います。いかがでしょうか。シンプルな質問だとうれしいですが、有村さんと目が合ってますが、何かありますか。

有村 ありがとうございます。昨日の仏教のお話のときもそうだったんですが、先ほどのランチのときのお話もそうですし、きょうお話を伺って思ったんですが、やっぱり日本にいと、一回コミュニティを、ある程度失ってしまった国から見ますと、本当にそのコミュニティを再生しよう。国自体が福祉国家として持ちこたえられなくなって、そして共生という言葉が出てきて、この国をどう変えようか、というときに、あらためてコミュニティを見たときに、どうやって動かすのか。なかなか分かりづらいものがあつたんですが、きょうのお話、感想になつてしまふんですが、わが国の中でも共生社会を作ろう、

そういうコミュニティを作ろうということは言われていても、どういうメカニズムで、あるいはどういう力を得て、その共有、共生のメカニズムが動くのか、というのは、すごく分かりづらいところだったと思うので、そこがきょうお話を伺って、もともと地域の中に組み込まれたものがあったというところで、すごく感銘を受けたとともに、やっぱり世界にもアジアから訴えていくのであれば、やはりそのこの部分が大変重要なんじゃないかな、というところを、すごく感じた次第です。感想になっちゃうかもしれません。

藤岡 ありがとうございます。それではちょうどいい時間で休憩の時間になってきたかと思しますので、先ほど発表いただいた3人のかたがた。そして午前、ご発表いただいた、お二人のかたがたのことも含めながら、ディスカッションを3時から始めたいと思います。では休憩をしたいと思います。あらためて3人のご発表のかたがた、ありがとうございました。拍手を。

(休憩)

◆円卓会議

藤岡 時間になりました。サマド先生が遅れていらっしゃるんですが、定刻どおり始めたいと思います。先ほど、加奈さんとも話をさせていただいて、全体的なディスカッションを皆さんのほうからいろいろとテーマを出していただければと思うのですが、少し司会のほうで、ここを明確に今回知っておきたいなというところがございます。それについてご発表いただいたヘラ先生、それから秋元先生も含めてお話しいただければと思っていますところ。

まず本日イスラム教とソーシャルワークというテーマで、さまざまないわゆる西洋ベースのソーシャルワークを、どうそれぞれの国に取り入れていきながらそしてその中でイスラム教圏の人たちへのサービス、そして仏教圏の人たちへのサービスですね。この対象となる人を、仏教圏、イスラム教圏というふうに限定するかどうかの論議もここではあったわけですね。皆様のご発表の中でも。ただちょっと話を整理するために、まずは対象となる人は、イスラム教圏、仏教徒圏というふうにさせていただければと思っています。そういう中で、西洋ベースのソーシャルワークと、その中でイスラム教の考え方をベースに置いた、ソーシャルワーク、あるいは仏教の考え方をベースに置いたソーシャルワークというものが、各国で検討され、融合されている状況下という、ちょっと難しい質問かもしれませんが、今回は中間報告であるので、まだまだの状況で、ディスカッションが進むことを、むしろ歓迎しなければいけないかなと思っていますので、その辺の西洋ベースのソーシャルワークと、それからイスラム教圏下、あるいは仏教徒圏下のソーシャルワークとの、融合、あるいは共通点。あるいはここはやはりこれはもう西洋ベースのソーシャルワークは、ちょっと相いれないところがあるのじゃないかというようなところが、議論いただければ、というのが1点と。これはヘラ先生、それから秋元先生からお答えいただければうれしいのですが、イスラム教圏でのソーシャルワーク、あるいはイスラム教とソーシャルワークのお話を伺っていただいて、仏教との共通点とか、あるいは仏教圏で得られた知見との、かなりここは共通点がある。あるいは相違点がある、という、そういうところをヘラ先生、それから秋元先生からお聞きできれば。もちろん秋元先生はもう少し、より広い観点からのご発言もあるかなということも

思っているところですが、それはまた後半にきっといただけるんじゃないかなと思って、まずその辺りから最後のディスカッションのこの時間を始めたいと思います。どの国からの先生でもよろしいですので、お話しただければと思います。いかがでしょうか。アディ先生がマギル大学とのカリキュラムの工夫ということでお話しいただいたので、まずアディ先生から、ちょっとお話を伺うとうれしいなと思います。

アディ ありがとうございます。もう一つよく分からなかったんですが、分かりました。どういうふうにこの仏教、それからまた欧米型のソーシャルワーク、どういうふうに融合しているか、という点ですけれども、まず最初はこういうふうな比較をすべきだと、それからその後で、類似点を検討する。その後で、今度は仏教、そしてイスラム教、そしてキリスト教の観点からまとめて考える。そしてアジア、それからまた宗教的な観点から、ソーシャルワークのアウトプットを出すべきではないかなと思うんです。類似点。言語的な類似点。それからまた価値観。仏教、イスラム教、あるいはその他の宗教の類似点もあるでしょうし。われわれにとっての次のステップとしては、比較研究、それからまた、類似点の研究。その後は、類似点、そしてそれを融合するような形で、アウトプット、最終的なアウトプットを出せばどうか、というふうに思います。それがこれからの道ではないかと思います。

藤岡 どうぞ。

ヘラ この素晴らしい会合において、まず私は秋元先生、そして藤岡先生、その他の先生に感謝申し上げます。今の藤岡先生にお答えした

いと思いますが、短期的、中期的、長期的な解決策を提案したいと思います。短期的には、やはり何らかの意識の向上というか、ソーシャルワークはアジアにおいて、あるいは日本において、あるいはその他の国において、どうなのか。非常に深く根ざしたソーシャルワーク、それからまた社会福祉の伝統がわれわれの国々にあるわけです。ですから意識化のためにも何らかのカリキュラムの変更をしなければいけないのではないかと、というふうに私は思います。中期の話もしたいと思います。私たちは、もっと研究をやっていかなければいけないと思っています。秋元先生のほうから、もっとこれから研究を続けていくというお話がありました。そして共通点、共通の特徴というものを、主な宗教、例えばイスラム教、仏教、それからそういったものに関して、共通点を抽出していく必要があると思います。そして3点目ですけれども、私たちはもう一度定義をやり直さなければいけないと思います。ソーシャルワークの意味は一体何なのかということ、再定義をしていく必要があると思います。西洋のソーシャルワークとは違いますので、これは21世紀の新しい、私たちのソーシャルワークの定義をしていく、ということが必要だと思います。つまり普遍性の理論に基づきまして、そして理念に基づきまして、21世紀のソーシャルワークの再定義をやっていくということが必要です。

そして4点目ですが、ほとんどの抑圧された人たち、あるいは第3世界の国々、困難のある方々、その方々のために、アジアのソーシャルワークの理論というものを作っていかねばならないと思います。アジア、アフリカ、ラテンアメリカに適用ができるようなものを作っていけると思います。そしてその中心的な役割にあるのが、日本社会事業大学ではないかと思っています。短期、中期、長期の実践

的な提案としては、このような内容になります。ありがとうございます。

アディ 短期的な点に関しては、今、ヘラ先生からお話がありましたけれども、その短期的な点に関しては、日本、マレーシア、バングラデシュ、スリランカ、タイ、この中でカリキュラムの改定をしていく、ということができると思います。学部、マスターのカリキュラムの改定を5カ国でやっていくことができると思います。ソーシャルワークに関して。そして例えば、宗教とソーシャルワークのコース。あるいはダイバーシティとソーシャルワークのコースなどをやっていくことができると思いますが、そのコンテンツの中に、いろいろな宗教、仏教、イスラム教、キリスト教、ヒンズー教などを入れていくことができると思います。やはり私たちにとっては、これは大事な点だというふうに思います。先生と学生たちが、複数の異文化の中でのコンピタシーを確保していかなければいけないので、アジア、ASEANの諸国、例えばインドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、こういった国々の中では、ASEANのコミュニティ、共同体があります。今年、1月3日、2016年から、共同体が出来上がるわけなんですけど、一つのこのアジアの共同体の中で、こういうことをやっていくことができると思います。タイやマレーシアのソーシャルワーカーの方々が、インドネシアで働くことができる。それからインドネシアのソーシャルワーカーがタイ、あるいはマレーシアで仕事をすることができるようになります。

ですから、やはりこのような多文化、異文化の力量というのは、大事だと思います。特に宗教に関しての力量を、さまざまな宗教に関して身に付ける、というのは重要な側面になってくると思います。ですからそういったことをカリキュラムの中に、ある

いはコースの中に組み込んでいく。宗教とソーシャルワーク、多様性とソーシャルワークというものを、コースの中に入れていくことが大事だと思います。

ハタ お二方と全く同感なのですが、カリキュラムを変えるのは簡単ではありません。もうすでにそれぞれのプログラムによって、確立がされてきたものです。ですが、まず最初に、先ほどご発言があったように、ソーシャルワークと宗教、スピリチュアリティ、名前はどうでもいいんですが、そういったところから始めていくことができると思います。宗教のコンテンツというものが、入れていかなければいけないものだと思っています。それから、それをカリキュラムの共通の部分としていくことが大事だと思います。私のクラスの中でも、去年からこういったものを取り入れています。ちょっと変な感じなんですけども、こういったお話をしているけれども、マレーシアでは、この重要な点に関しては、ソーシャルプログラムで行っている七つの大学の中で、カリキュラムにこのコンポーネントを入れているところが、まだないというのはおかしいと思ったんです。ですから私は、クラスに教え始めました。少なくとも、自分たちのルーツというものを学生たちは考えるべきだと思うんです。有村先生がおっしゃっていたように、日本人の方々は、あまりそのルーツというものは、...離れているかもしれません。ですので、学問的な形で、学生たちをもう一度、自分たちのルーツとつなぎ合わせたい、向き合わせたいと思っています。

ですので宗教を私のクラスには取り入れようと思ったわけなんです。私たちの中では、宗教に関してはアレルギーを持っているという人もいるかもしれませんが。宗教の定義は何なのか、という話もありましたが、私たち学者の方から、徐々にこういった

ものを入れています。個人的にいうと、これが世俗化の結果だと思っています。世俗化の結果、今、このようなことが起こっていると思っています。同の部屋の中で宗教と科学的方法を混ぜてしまおう。ある人々はそんなこと出来るかという、別の人々はなぜいけないのかという。双方は共存しうる、相互に補い合っ。社会のために。道のりは長い、でも難しくはないかも知れない。おそらくそれぞれのソーシャルプログラムの中で、やはりこういった科目を入れていくということができると思います。選択科目として、選択をするのであれば、取ることができるといふような形にしていくことがいいと思います。

藤岡 ありがとうございます。本研究の成果の非常に具体的な提言だと思います。タイのワンワディ先生、どうぞよろしく。

ワンワディ ハタ先生と全く同感です。ソーシャルワークと宗教の研究をする。あるいはそれを組み入れていく、ということが大事だと思います。ただこれを組み合わせるといことが、知識に関しては、組み合わせることは簡単ですが、実践していくことは難しいかもしれません。私はイスラム教なんですけれども、子どものときから、私たちはこのイスラム教の中で育っています。先ほどのケーススタディの中で申し上げましたけれども、二つのイスラム教のケーススタディを出しておきましたが、私の大学に関しては、コースの科目の中に入れることはできないのです。学生がフィールドに行く前に、もしイスラム教の所に行くのであれば、生徒を分けて、イスラム教の人たちだけしか、そのイスラム地域に行けないんです。ですからイスラム教の地域に行かせる学生は、イスラム教徒というふうに分けて

います。

サマド ワンワディさん。今、私たちは社会教育のことをお話をしていましたが、今、社会实践に関してのお話がありました。フィールドワークに学生を送る。寺院に送ってみましょう。そして教会に送ります。モスクに送り込みましょう。組織の間にネットワークができるかもしれません。今、バラバラになっています。お互いにお互いを変な人たちだと思っていますけれども、クライアントというのは、実際に支援を必要としているのです。ですから私たちの生徒たち、学生たちをインドネシアへ、パセントラン・ポンドックー宗教、イスラムのところですが一にそういったところに送っていきましょう。そうすれば学生たちは、そういったフィールドワークから学ぶことがたくさんあると思います。逆に近代のソーシャルワークにはいいところがいっぱいあります、とてもオーガナイズされていて、システムティックになっています。組織化され過ぎているかもしれませんが。でもお互いに学ぶことは多いと思います。

藤岡 サマド先生どうぞ。

サマド アディ先生とズル先生のおっしゃったことの延長線上ですが、われわれは既に二つの宗教について、研究を行いました。仏教とイスラムです。私は四つの宗教について、実際に研究をしています。一つの委員会をつくるといいと思います。データを、例えばヘラ先生から集める。そしてこの5カ国からの委員が四つの主要な宗教の課題を抽出する、仏教、ヒンズー教、イスラム、キリスト教、そして日本の神道なども含めて、そしてお互い情報交換をするのです。そして課題を、その中から特定し、それ

がこの5カ国全ての教育機関でのカリキュラムの中身とするべきなのです。そうすると学生たちは、全ての地域について学ぶことができ、その全ての宗教の中身や、それぞれの課題を調和し、融合することができるようになると思います。これが私の、恐れ多いですが、私からの提案です。このようなセミナーを毎度開くのはお金も掛かりますので、ご検討いただけるかどうかです。そのような委員会を設置すると。

藤岡 ありがとうございます。方向性というところも見えてきた中で、せっかくの議論の場ですので、もう少し具体的な質疑といいますか、そういうところも、これからと思っておりますが、秋元先生、今の段階で、何かご発言ございますか。

秋元 他の人たちと、違うことをいつも言いたがる私です。今おっしゃったことは、非常に良いと思います。しかしわれわれは、二つの使命を混同していると思います。一つは当初、この仏教グループ、昨日のわたしのチャートで示したように、われわれはモデルCに関心があるわけです。われわれはモデルA、Bは理解し、それは尊重しますが、しかしながら研究プロジェクトとしては、われわれはモデルCに焦点を、第1段階として絞り込みたいのです。時間が私の目の前では、ゆるやかに流れているのかもしれませんが、そして藤岡先生の前では、もっと時間が早く過ぎ去っていつているのかもしれませんが。結合したり、融合したりする段階ではないと思います。逆にそうすることを拒否しなければいけないと思います。主流の西洋のソーシャルワークから、われわれのやり方というのを、第1段階としては、分けなければなりません。この段階的な分離して、ヘラ先生のおっしゃったように段階を踏んでいかなければ

いけないと思います。1種の段階論が必要です。

われわれの自分の理解を、独自のモデルを構築することが、まず必要です。昨日申し上げましたように、もっと概念的、理論的に。これは実際のものではありません。現実の社会の文脈の中で、この100パーセント理論的なモデルというのは、実生活の中では、見いだすことはできませんが、まずやらなければならないのは、過去はどうだったか、そして今はどうであるかを考えることです。そしてそのようなモデルを、構築しない限り一競争をするわけではないのですが一少なくとも頭脳のレベルで、その構築をしなければ、われわれは今何が欠けているのか、またソーシャルワークの歴史において何が欠けていたのか、というものを特定することができません。最初に仏教ソーシャルワークを構築する。それはどんなものか？私が言ったように、そして他の人も言っていましたけれども、次の段階に進みたいのです。その第1段階をきちんと踏んで、完成させなければ前には進めません。

もうひとつの方ですが、5分前にカリキュラムの話をなさいました。学生にフィールドワークをどう教えるか。これはまた別の課題です。これは実践的で現実的な問題でありまして、より緊急な課題であります。実生活において、言ってしまえばこちらのほうがより役に立つ議論なのかもしれません、今日、明日にとって。しかし、わたしはどちらが重要かをいつているわけではありません。この二つというのは分離して討論すべきだと言っているのです。

藤岡 昨日の話の続きで、秋元先生のほうからモデルCのお話を伺うことができた中で、今日イスラム教とソーシャルワークっていう話を、皆さんからいただいたところで、そのAとBとCの話が、行き来しているといいますか、そういうふうなところ

もあったかなと思います。そういう中であって、このイスラム教とソーシャルワークの研究は、常にA、B、Cを意識して進めていくべきなのか。秋元先生がおっしゃるように、まずCを固めていって、そこをそれぞれの国の中での、イスラム圏の中でのソーシャルワーク活動というものを、どうまずわれわれが理解し、認識をして、そこから専門的なソーシャルワークを、どう展開するかっていう、再構築といえますか、そういうところを考えるか、ということかなと、今の秋元先生のご意見を伺いながら思ったところでもあります。常に背景としては、AとBも意識していかなければいけないんですが、まず本日の会議は、第一歩でありますので、かつ中間レポートは、ケースを含めて、かなり具体的な活動のところを、今日ご発表いただいたので、この最終的な議論の行き着く先ほどを見つめながらも、時間の過ごし方をどうするか、というのは、また別の議論になるかもしれませんが、少なくとも先生がたのご発表についての部分について、モデルCをやっばりまずは意識して、この議論を進めることができると思いますけれども、よろしいでしょうか。そういうコンセンサスで。

秋元 これはわれわれが主張していることではありませんし、それは皆さん次第です。仏教グループは少なくとも今日までは、私が今、申し上げたように、モデルCをやってきました。第1段階として。しかしこれは、日本社会事業大学のプロジェクトですので、どちらのほうにかじを取るか、この第1段階でかじを取るか、方向性を定めるかというのは皆さま次第です。われわれ、仏教グループはイスラムグループに、いろいろ指図をするわけにはいきません。皆さま方の研究に非常に興味を持っていますが、われわれ側としましては、このように焦点を絞り込

んでいきたいと思っています。

ハタ 二つの問題があるわけですね。そのとおりだと思います。われわれとしては、最初に別のモデルを考える。今、非常に強くおっしゃいました。しかし、先生は先に非常にはっきりとおっしゃいました、憶えていらっしゃいますか。先生はIAのものを受け入れられないといったことをおっしゃった。私も同じ意見です。IAのものから離れて先にゆく。一者に行きます。しかし、残念ながら、私、現実主義者でもあります。やろうとしていることは記念碑的の大事業です。といえますのも、マレーシアにおいては、われわれ、対立という道を歩まざるを得ません。相手側の方は、一体、おまえ、何をしようとしているのかと言われると思います。特にマレーシアにおいては、イスラムソーシャルワークを作りたいというふうに言うと、向こうはまたか、イスラム何とか、イスラムこれこれと、言うけれども、ですから社会においては、いろいろともう分離があるわけです。もうすでに、非ムスリムのほうはいらいらしています。リベラルのムスリムもいらいらしてきている、といえますのも、ムスリムの社会というのは、一元的ではないわけです。

リベラルもいれば、保守派もいれば、全く無関心派もいます。とにかくイスラム教の中にもいろんな人がいますので、ですから確かに今の私の意見としては、そういう別れた方向に行こうと分離の道に行こうと、私もその考え方は支持します。それからまた同時に、今の5分前のお話を考えてみますと、われわれ、そういうふうなカリキュラムのアプローチは必要です。それまでは、やはり私のほうが強調したかったこと。この二つの問題、分けたほうがいいのではないかと、最終的には何か一つ。ただまあ、考え方としては分けて考えたほうがいいのではない

か、最初から混同しては、難しいのではないか。アディ先生はどうでしょうか。カリキュラム、ジャカルタでどういうふうにされますか。イスラム、それからこちら、変なことにカナダの人、カナダの組織がやっているわけですね。私はちょっと懐疑的です。外国、インドネシアと関係ない人が、そういう概念を導入する。一体どういうことなんだと。

藤岡 何かアディ先生から。

アディ これは情報提供なんですけれども、カリキュラム、この私の大学のカリキュラムは、基本カリキュラムの基礎は、インドネシア、ソーシャルワーク学校連盟というのがありまして、そこがベースとなっております。10、あるいは15ぐらいのコースがあります。これは義務、必須です。これはインドネシア、ソーシャルワーク学校連盟が決めていることで、あともう一つは、その現地、大学によって別に独自で決めていい、ということです。人間の行動、倫理、ソーシャルワークの実践、ソーシャルワーク調査その他は、これは必須です。インドネシアのソーシャルワーク学校連盟が決めているものです。それから別のそれ以外は、大学独自で決めていいということで、簡単にイスラムの大学としては、新しいコースの成立は、イスラムに基づいてできるといえます。例えば今朝、ファンドレイジング、イスラムのその資金調達の話をしました。それからイスラムにおける社会的起業家精神。これは新しいイスラムのソーシャルワークの方法なわけです。もう一つ、欧米型のソーシャルワーク、例えば研究方法とかそういったもの。主要な定性的な研究方法、あるいは定量的な調査方法。イスラムにおいては、イスラム教ソーシャルワークで、新たなパラダイムとか、新たな観点とか、例えば参

加者が、直接イスラムのコミュニティに行くとか。イスラム教ソーシャルワークの学生が直接教会に行く。あるいはキリスト教福祉センターに行くとか、そういったことはジョグジャカルタの学生にとって重要なことです。また、10の大学、イスラム教国立大学でも、インドネシア全土において、こういったプログラムをやっていますので、そういう現象はあります。

藤岡 ありがとうございます。この研究、初年度ということで、今後の研究の方向性というものをここで議論もしながら内容に触れていくということですが、とても大事な議論をしていただいているというふうに思っているところです。昨日、モデルA、B、Cというふうなことで、仏教とソーシャルワークのほうは、モデルCをベースにしつつも、B、Aというふうに整理をされたわけですが、イスラム教とソーシャルワークも、そういう意味では、今日ご発表いただいたところから得る知見っていうものが、非常に、先ほどアディ先生からも少し触れられた、イスラム教のソーシャルワーク、イスラム教徒の方々の、ソーシャルワーク活動の中に、非常にグローバルな意味が非常に潜在的に含まれている、というようなところも学ぶこととして、あるかなと、そういうふうなことから、やっぱり出発するのが、まずはよろしいのではないかな、ということも私が考えたところでありますので、まだ時間はたっぷりありますので、フロアの方々、それから今日ご発表いただいているの方々から、具体的にかなりイスラム教圏におけるソーシャルワーク活動、それから具体的な施設のお話も、たくさんございました。そういうところでの具体的に、こういう活動も、少し知りたいとか、こういう活動はどういう意味があるんだろうかとかっていうふうな、そういうふうな

ご質問とかも、これから具体的に受けていく中で、まずはモデルCの部分の意味を、イスラム教とソーシャルワークにおいても掘り下げていければと思っておりますが、どうでしょうか。ご質問。子どもの施設のこともございましたし、経済的なところの部分もありましたが、いかがでしょうか。ヴィラーグさん、どうぞ。

ヴィラーグ ハタ先生に、もうちょっと個人的な活動について、お伺いしたいと思います。特に宗教のコース。それから宗教とソーシャルワークのコースについて、お聞きしたいと思います。今日のプレゼンテーションを聞いておまして、ほぼ全ての国において、非常に多様な社会であると。宗教的に、それから文化的に、それからまた民族的に、非常に多様な社会であると。全ての社会、今日ほとんどの国がそういう多様な社会であったと。そういう多様性のほうから、例えば例として、イスラム、あるいはまたイスラムのソーシャルワークという、そういう話を聞いたわけですが、社会の多様性というのは、特にアディ先生。それからまた、ハタ先生も仰いましたけれども、もっと多様性に焦点を当てて、社会のニーズを、他のグループのニーズをもっと理



ヴィラーグ ヴィクトル氏

解したいと、学生の中でもイスラムを实践するような学生は、キリスト教徒と、あるいはまた儒教のことも、もっと理解しなきゃいけないという話が出ました。だからハタ先生は、教えていらっしゃるコースは、非常に重要なので、ですから、もうちょっとそのコース、どういうふうに設立されたんでしょうか。

昨日、確かおっしゃったと思うんですが、イスラムだけではなく、他の宗教もおっしゃっていらっしゃるというふうに出したと思います。マレーシアの社会の中での、主要な宗教に関しておっしゃっていらっしゃると思います。二つの質問があります。先生がご自身で、イスラム教の信仰を实践していらっしゃいます。ですからこの宗教コースのイスラムの部分というのは、もういい意味での主観的であると思います。その他の宗教に関しては、もう少し客観的であると思います。そして神聖性がちょっと低いかもしれません。ですからこのコースに関しては、どういうふうにして、準備をするんでしょうか。自分の宗教ではないものに関してどういうふうに準備をしていらっしゃいますか。そして個人的なフィーリングに関してはどんな気持ちでしょうか。何か困難であると、心の中での葛藤というのはありますか。他の宗教に関して、教えなければいけないときに、何か心の葛藤はありますか。

ハタ ありがとうございます。最初の質問は比較的に簡単だと思います。私は宗教に関しては、仏教の専門家を招いています。Ph.D.の学生、スリランカから来ている人がいます。Ph.D.を持った講師がいますーコースをはじめるときにはすでに論文提出を済ましています。ドクター・ジバは、仏教をやっています。ですから、これやってくださいと言います。まだ初期の段階ですので、このクラスがちゃん

と教えられるようにまずはして、これを改善したい
と思います。ヒンズーに関しては、ヒンズー教を実
践している人もいます。これが宗教に関するコンテ
ストのところですか。その前に、まず全体的なところ
がありまして、私はまずこのクラスを落ち着かせる
というんでしょうか。「安定化」という言葉がいい
かと思いますが、他宗教についての反感、猜疑心固
まったものを乗り越える。私はもう大丈夫だと思っ
ています。他のすべての宗教を受容出来る。です
から全ての宗教に関しては、私はもう心が安心して
受け入れることができるようになってきていると思いま
す。有村先生が先ほどおっしゃってましたけれども、
宗教の中でこの神への道は本当にたくさんあるとい
うふうに言われています。ですからどんな宗教に属
していようと、やはり善ということを求めていると
思います。神への道、というのは、本当にいろいろ
あると思います。どの信仰ってというのは、違って
いると思いますけれども、それは関係ないと思います。
やはり共通点というのが多いと思います。そして利
他性、男、女、環境との関係の類似性を見る。これ
はいろんな宗教に共通です。フォーカスのところが
違っていたり、あるいはアプローチが違っているか
もしれませんが、それはまえがき部分、これはその宗教を比較をする、
というのはない。どの宗教がいいとか、悪いとか、そういうのはない。そ
ういうふうな考え方をしてはいけません。これは宗教に
関して、違いを知る、宗教に関して知る部分なんだ。
ということを行っています。そしてまた、基本的な
教えを知る。いろんな宗教の教えを知って、そして
その教えの中から、どこが精神性 (spiritual) のレ
ベルで共通なのか、共通点を各宗教の中から導き出
す。そしてそれに基づきまして人類を愛し、人類に
奉仕する。預言者、それからイエス、そしてまたブッ
ダ……。ですからこれが昨日わたしが、年をとった

人がわたしが若い講師だったときに、こういう人々
をどう見ると聞いてきた話しをした理由です。わ
たしは答えを持っていません。ずうっと今日まで
引っかかっていることです。わたしは彼がどこから
来ているのかを見始めているところです。少しでも
お答えになっていれればと思います。

アディ 時間はありますでしょうか。私の大学で
は、一つのコースがありまして、イスラムソーシャ
ルワーカーに関してのコースが一つあります。私た
ちも、やはり専門家をいろいろな他の宗教から招い
ています。私たちはガイドラインがありまして、仏
教の専門家はその信仰に関して教えるというのでは
なく、共通の価値観に関して、教えてほしいとい
うことを、よく言っています。人間観、それからどう
いうふうに他の人たちを助けるか、ということをお
教わっています。それからキリスト教の教会の
ほうからも招いていますけれども、その人たちにも
イデオロギーを教わってもらう、信仰を教わら
うということはやっていません。学生たちはこの宗教
の間の共通の価値観、というものを学んでほしいか
らです。

それから国立イスラム教大学でもそうなんです
が、やはりオープンマインドというか、心が開かれ
た状況です。カナダのマギル大学からの支援も受け
ていますし、本当にオープンな形の姿勢を取って
います。日本はやはりその均一的といいますか、同一
性が高いと思います。マレーシア、中国、インド、
マレー系、そういう人たちがたくさんいます。私
たちの学生もそうなんですけれども、中国人の友人
を、本当によく理解していますか、ということをお
聞いたりします。私たちは表面でしか、お互いを理
解していないと思います。宗教をお互いの宗教を、
よく深く理解しているわけではないと思います。そ

してステレオタイプ的な見方をしてしまっているのではないか。イスラム教はこうだ。ヒンズー教の人はこうだ。キリスト教徒はこうだ。中国人はこうだ。チャイニーズ・ニューイヤ、クリスマスはなんだ。そういうふうな形で、表面的にしか他の宗教を理解していないのではないかと、思っています。そしてもっと深く理解すると、共通点が多いんだ、ということが分かります。昨日ヘラ先生が、リストを出してくださっていましたが、これはもう私はもう仏教徒だといえるぐらい本当に共通的なところがイスラム教徒の間に多いと思います。

ただ私たちの外観、それから衣服、そういったものが違いを強調しているのではないかと思います。ですので、私は学生の頭を一回分解して、それからもう一回始めさせたいと思っています。マレーシアでは、暗記をするということが、重要視をされてきて、本当に質問に対して深く考えるところがあまりないというふうに思います。これが欧米の教育との違いではないかと思っています。ですからやはり一回、頭を打ち壊して、もう一回考えを始めてほしいと思っています。そして忍耐強くやってほしいと思っています。忍耐というのは、やはりあまりいい意味ではないというふうにあるインド人が言っていました。忍耐というと、もうこれは我慢している、という意味になると思います。初めてこれをインド人から聞いたときに、ああ、そうだなというふうに思いました。その忍耐っていうのは、本当に欲しいものを抑え付けて、我慢していると思います。ですけれども、やはりソーシャルワークの価値っていうのはありますし、宗教の価値、それから精神的な価値がありますけれども、受け入れるというその姿勢が大事だと思います。

藤岡 他はいかがですか。ご質問と。木村先

生どうぞ。

木村 お聞きしていて、先ほどのカリキュラムの中に、宗教とソーシャルワークっていう科目や、多様性とソーシャルワークという科目があり得るんじゃないかっていうお話を聞いて、今の議論も併せて聞いたときに、多様性の尊重っていうことと、秋元先生がおっしゃっている仏教ソーシャルワーク、あるいはイスラム教ソーシャルワーク、その上でのモデルCっていう議論とは、ちょっとまた別の話じゃないかなと思うんです。私もソーシャルワークの価値であるとかを、学生に教えるときには、やはりこう例えばグローバル定義にある、そこにある価値の基盤にあるもの、ということを経験に伝えていきたい。まさしく先ほどここで皆さんが議論なさっていたことだと思うんですけども、けれども今日の発表、中間報告をお聞きしていて、宗教心に基づく、特定の信仰に関する特定の価値といったものがあるのかなと、あるいは同じ、例えばウェルビーイングという言葉のところでも、そこに込められる意味というのが、また違ってくるのかなと感じたりしたんですが、このところは、今日ご発表いただいているイスラム圏の先生がたや、秋元先生や、日本の皆さんは、どのようにお考えなのか、ちょっとお聞かせいただけると、ありがたいです。

藤岡 いかがでしょうか。つまりイスラム教徒の方々が行うソーシャルワーク活動の中において、その価値っていうところの、基本的なところが、さらに表現するならば、どういうことがありますかっていうことでしょうか。それとも。

木村 今、ここで議論されていたことって、すごく共通性のところを、やはりイスラム教圏の先生が

たは、強く感じていらっしゃるのかなと思ったんですけれども、そのモデルCというのは、むしろイスラム教であったらイスラム教の独自性というものを際立たせたもの、というふうに私は解釈したんですが、昨日、私、参加もしていなかったので、その切り分けというか、意味合いというのが、ちょっと捉えきれないところがあるかと思うんですけれども、その点についていかがでしょうか、というようなところなんです。通じていますか。

サマド 原則、この近代的なソーシャルワークとイスラムの間に、原則が非常に大きく異なるかというところ、それはそうです。原理としてはいろいろありますし、和解しがたい差異があると思います。例えば人権の問題。われわれがこの国連などの説く人権に基づくと、この人間、人に焦点が当てられています。全てこのヒューマン、人間の周りを地球が回っていると。しかしイスラム、私の宗教では、焦点を当てるべき中心となるのが、創造者なのです。われわれは創造者に従わなければならない。創造者が与えた権利を守るべきであって、人間中心ではないのです。現在マレーシアの潮流 というのは、この人権というアジェンダを、ソーシャルワークの職業の中に、専門職の中に持ち込むという動きが広まっています。セミナーでも、この人権というものが、頻繁に登場します。これはジレンマを生み出します。これは昨日も申し上げましたが、イスラムの中では、神はわれわれにさまざまな権利を付与しました。ジェンダーの権利もあります。イスラムは女性にも権利を与えています。ムスリムたちは違いますが、権利は同じなのです。女性がしてはいけないこと、禁じられていることはいくつかあります。しかしそれが女性の権利を奪うということに等しいのでしょうか。そうではないのです。

それはまた別の問題だと思います。オーストラリアのジム・アイフがこれについて、彼は西洋人ですが、彼は今日的な人権というものの解釈に対して、非常に批判的 です。彼は宗教が独自の人権の解釈をする際に、なぜ西洋は介入しなければならないのか、ということを行っています。人権のモデルが二つあって、そのどっちかを選択すると、人に求めるのはよくないと、あたかもジョージ・ブッシュです。われわれの側に付くか、敵かと、そのような選択、二者の間の選択に人を置くのは残酷であります。ほかの人々からおまえは間違っているといわれるのではなく、自分の与えられた今まで持ってきた価値観を持って暮らしていくこと、それがそのような権利も与えられるべきです。

サマド 皆さまにとってはバングラデシュの状況が不思議に映るかもしれませんが、しかし、1971年から、われわれは銃で戦うことができました。銃で戦わざるを得なかったのです。大学なども分断されました。片方は軍に偏っていました。リベラルではない人たちです。軍事政権を支持する人たちでした。右寄りの人たちです。そしてその反対側の派閥というのは、いわゆるリベラル、社会民主主義の人たちです。われわれは一つの宗教についてのシラバスを導入すれば、わが国ではこれは問題を起こします。これはイスラムの原理主義が幅を利かせているのだと、そのような不安をおおります。

その場合、ソーシャルワークと宗教、ハタ先生がおっしゃっていることですけれども、われわれは学生に対して質問を投げかけます。教科書の中でも、そして大学でも。その質問と問い掛けというのは、ソーシャルワークとイスラムです。そしてこの質問というのは、この問い掛けというのは、パキスタン、われわれが西パキスタンの一部だった時代から言わ

れてきていることです。しかしながら、このイスラムとソーシャルワークについての文献でも限られていました。主要な宗教、それぞれの国の主要な宗教の役割は、私にとっては仏教、ヒンズー、キリスト教とイスラムですけれども、どの宗教が欠けても、バングラデシュではどの宗教の視点が欠けても通用しません。教師たちも、学生の間でも、そして知識人の間でも、この全ての宗教を取り入れない視点というのは通用しません。受け入れられることはできません。宗教とソーシャルワーク、ソーシャルワークと宗教。いずれにしても、全てを網羅することは必要です。

藤岡 ご質問は、皆さん、じゃあ菊池 さんでしょうか。

菊池 ここまでのお話を聞いて、一つ教えていただきたいことがありまして、昨日と今日の先生がたのお話を聞いておりまして、そのズル先生のお話の中で、国連の人権の考え方と、そのムスリムの考え方の人権の考え方が違うというお話は、一ついただきました。それと同時に同性愛者のこと、コーランの中では、その同性愛というのは禁止されている。しかしそのアディ先生の話では、そのコーランの中では禁止されているけど、彼をサポートしていく、というお話をいただきました。そこでご質問というか、教えていただきたいところなのですが、ムスリムとしての考え方と、イスラムソーシャルワーカーとしての考え方というものは、異なってくるのでしょうか。例えば脳死の問題だとか、障害を持った赤ちゃんを産むかどうか。そういったソーシャルワーカーが考えなければいけない倫理的な問題にぶち当たったときに、ムスリムとしての考え方と、イスラムソーシャルワーカーとしての考え方というものは違

いるのかどうかという、もし先生がたのお考えがあったら、ちょっと教えていただきたいと思いません。

藤岡 どなたでも。

ハタ 質問をもう一度はつきりさせてください。例えば、障がいの持っている赤ん坊がまだおなかの中にいると、そして何か障がいがある、ということを知るに至ったということですね。これは私、個人的な見解を申し上げます。われわれはお腹の中にあるものどうこうするということはありません。赤ちゃんは生まれて来させます。他に選択肢があるのでしょうか。中絶をするのでしょうか。しかし中絶をするにしても、中絶ができる期間というのがあります。わたしは女性ではありませんし、医学の専門家ではありませんが、ある月齢を過ぎると、母胎にも大きな危険を及ぼします。私の宗教的な恩師が言っていますが、妊婦がいる場合、最初の40日は、何もするな、スキャンもするな、超音波もかけるな。われわれの宗教の下では、天使たちがこの胎児を守っている。クラスで天使、目に見えないものについて話します。学生は気味悪がるのですが、そのような考え方すらイスラムにはあるわけです。ですからもし、患者さんが来て、どうすればよいかと相談された場合、私はこの医学の専門家ではないので、医学の素人として、まず医者に行けと言います。それはこの中絶を勧めたり、そのような助言をするのが、それは私の立場、役割ではありません。しかしなら、イスラムの視点からいいますと、この妊娠の不継続を命じるような権限はありません。

____ 同性愛の話をしました。イスラムでは、これは罪であります。しかしイスラムのソーシャル

ワーカーとしては、同性愛者もLGBTですけれども、人間として受け入れています。よって彼らを受け入れて尊重し、尊敬します。行動も受け入れます。人間として尊重するのです。

—— 奨励するのか、それとも辞めたほうがいいとか、というのか。それが問題です。それが今のご質問だったと思います。

—— ソーシャルワーカーとして、イスラムソーシャルワーカーとしては、別に同性愛を奨励するわけではありません。

ワンワディ わたしは、わたしは看護婦ですが、私はそういったことを聞いたことはありません、40日がどうのこうのという話、始めてお聞きしました。しかし....

—— ただこれはある地位の男性から聞いたことです。賢人と呼ばれる人、賢人という人がいったのです。これは賢人の言葉です.... スーヒ・サンズ、スーヒ・フスという人。その心、精神。われわれ多くの人たちよりも、高い所にいる人です。その言葉。私は初めて聞いたときに、何の話だろうかと思ったんですが、しかし赤ちゃんはスキャンをかけるなど。本当に深刻な事態でない限り、どうして赤ちゃんをスキャンする必要があるのでしょうか？経済的にはスキャンは、医者にとってはお金がもうかります。無料だと思いませんか。スキャンは。

ワンワディ 私、そのアラーの作ったもの、生まれたときからということはいうんですけれども、タイではハタ先生もおっしゃいましたが、医者の方に行けど。タイでは二つの条件の下では、墮胎

ができます。まず母体の健康の度合い、もうひとつは祈り。ただまあ出来ますが、多くの要素を考慮します。

木村 確認ですけれども、今、3人の方がおっしゃいましたことは、タイならタイのイスラム教に基づくソーシャルワーカーについてのことなのか、ソーシャルワーカーは一律そのように考えるのか、一部のなのでしょうか？あるいはマレーシアや、インドネシアの国々で共通して、そのようなソーシャルワーク教育をなさっているというふうに捉えてよろしいのでしょうか。ハタ先生は、先ほど、個人の見解ですがと付け足したかと思うんですけれども。

ハタ やはり中絶ということですね。中絶の話ですね。今のは。

木村 はい。中絶を例にして、あるいは他のことについてでも結構です。

ハタ 中絶については、イスラムは中絶には反対していません。最初に、前提としてイスラムは中絶に反対ではありません。特定の条件の下では認められています、母胎が危険だといったときには。ちょっと物議を醸すことを言うかもしれませんが、私を嫌わないうでください。とにかく、今、よく言われているのは、例えばフェミニストの間で、私の体は私のものだ、だから好きなことを私はできるんだということを言います。3カ月までなら中絶出来るんだと。イスラムは、それについては、反対です。いいのでしょうか。ただ赤ちゃんは、経済的な理由ではだめですが、個人的な理由、例えば事故でもだめですが、あるいはレイプの場合においてさえも中絶は駄目ですが、その母胎が危険であったり赤ちゃんが

危険であるということであれば、イスラムは認めます。それからまた、これ、そういうふうなことは、マレーシアにおいて、標準的な考え方、それはノーです。ソーシャルワークにおいては違います。ただ他の先生で、同じ、あるいは違う意見があるでしょう。それからまた、学生にもいろんな形で、いろんな意見を教えています。自らの判断を学生も下すわけです。

あと一分だけ。私のほう、木村先生に対し申し上げますけれども、ある本が出版されました。数年前ですけれども、これはイスラムの本ではありません。ピーター・シンガーという人、オーストラリアの人が出版した本で、この本。誤った殺人の下に、胎児殺し、動物殺しその他多くのことが書かれています。倫理的な問題です。ですからイスラムだけの問題ではありません。倫理的な人間の問題です。ですから、そういったことは人間としては受けられないということなのです。

藤岡 広がり過ぎているように思うので、この話題は、かなりこのこと自体としての、非常に重要な議題なので、ちょっと今回はイスラムとのソーシャルワークなので、ちょっと戻したいと思いますが、それに関係してのことでしょうか。有村先生。よろしいでしょうか。

有村 今の話とは、一回外れちゃうかもしれないんですけども、だけど今の話ともちょっと関連して。

藤岡 今の話はちょっと外れましょう。

有村 直接的には関係ないんですけども、やっぱり今までのお話を聞いていて思っていたのは、やっぱり昨日と今日のお話を聞いて、やっぱり私たちが

尊重しているものについては、すごく共通点として希望が見いだされると思うんです。いろんな違いがあったりするわけですし、そういう立場もあるんですけども、しかし、それは理解するのですが、私たちが、例えば何を尊重しているかとか、人をどうやって支えていくのか、そのプラス面に言い換えて、いろんな共通言語を作っていくならば、やっぱりそのほうがモデルCの構築というところでは、私たちの提示する世界観みたいなものが、よりそれぞれの宗教の良さも含めて、伝わるのではないかな、というふうに思って、ちょっと発言をさせていただきました。コメント、質問になるのかならないのか、分からないんですけど、皆さんにもお伺いしてみたいところです。

藤岡 ちょっと時間もかなり来ているので、そろそろまとめの話に入っていかなければいけないと思っているんですけども、藤森先生のほうからも、何かご質問とか、ご発言がいただければ。

藤森 淑徳大学という社会事業大学とは違うところに所属していますが、仏教とソーシャルワークの縁、こういった学びの場の機会をいただけたことを、ありがたく思います。質問ではなくて、少し仏教とソーシャルワークと考えてきたものとしてのコメントなんですが、昨日、秋元先生が仏教とソーシャルワークのモデルの話をしていただけたと思いますが、少し内幕を話しますと、仏教だからといって、全然一つではありません。日本の仏教とスリランカの仏教もだいぶ違います。それは大乘仏教と上座部仏教との違い。でもじゃあ、ベトナムも分類できれば、大乘仏教ですが、日本とはだいぶ違います。そして日本の仏教の中も、例えば全日本仏教会という、仏教の全体をまとめる組織がありますが、その中の、そ

ここに加盟している宗派だけでも、教団だけでも59もあります。みんなそれぞれ大事にしている教義ですとか、信念とか、そういったものが違っています。僕が仏教とソーシャルワークのことを考える際に、最初から仏教だから、何でも共通、一緒でできるねというふうに出発したら、うまくいかないと思っています。仏教なんだけども、日本とスリランカはこんなに違う。ベトナムもこんなに違う。他のそれぞれ、ミャンマーやラオス、さまざま仏教を主たる、タイもそうですが、それぞれの国もこんなに違う、違うことをまず明らかにするということは、そのことを通じて、自分たちの価値を、もう一度認識できることだと考えています。

違うわれわれは、こんな価値を持っている。その上で、でもそんな違う価値を持っているんだけど、仏教というキーワードで、実は一つになれる、というところ。違うところから出発して、共通のものを見つけることができれば、それは国や文化を越えて、一つの仮定義のようなものが可能になると思っています。ですので、イスラムのお話もすごく参考になったのですが、もし次のまた機会があるのであれば、実は今、細かい各論の話では、皆さんの見解がちょっと違ったように、インドネシアではインドネシア特有のイスラムの理解があったり、マレーシアにはマレーシア固有の何か、理解。またバングラデシュには、バングラデシュの歴史や文化に基づいた、ちょっと他の国とは違うイスラム教のソーシャルワークの理解というのが、あると思うので、まずその違いを一層くっきり出してもらったところから、違うんだけど、ここは一緒だということが見つけられれば、その先にはアジアのソーシャルワークとして、欧米とは違う、アジア共通の価値みたいなことを、一緒に提示することができるのかなと感じました。ですので、また勉強の機会を

いただければと思います。今日はありがとうございました。

藤岡 ありがとうございます。

ヘラ これは最後のコメントになると思いますが、仏教は仏教文化とは違います。仏教は中央の原則があって、グローバルレベルでは、いろいろな仏教の文化があります。2万4000の宗派があります。いろんな違った文化があります。ですが、中核的な文化は同じです。そういったことから、秋元先生、それからまたハタ先生のご意見に賛成です。昨日おっしゃってましたけれども、この原則というものは仏教であっても、イスラム教であっても、原則は共通である。もちろん違っている点もありますが、原則は同じです。人類、人間として共通点があります。それから仏教では、いつも生けるものの権利、生きとし生けるもの、人間界であっても、動物界であっても、生きとし生けるもの、もちろん植物、それから動物の世界があって、これがないと人間の世界っていうのは、生き残ることができません。ですから仏教というのはこの点で違っているかもしれません。以上です。

藤岡 それではヘラ先生からは、まとめの話をいただいたところですが、松尾さんのほうから少しありますか。まとめに近い話かもしれません。

松尾 ありがとうございます。日本語でお話しします。藤森先生ありがとうございました。今回イスラムのソーシャルワークのアクティビティについて、研究の中間報告を皆さんに出していただきました。お題としては、それぞれの国の情報ですとか、ケースを、ケーススタディを出していただくのと、それ

からなぜするのかということについて、それぞれの国々からの報告をお願いしました。それぞれの国々の報告をもとに、イスラムのいうソーシャルワーク、クォーターション付けますが、ソーシャルワークの活動というのは、どういうものなのかということを示唆していただこうというのが今回の研究のねらいです。藤森先生がおっしゃるように、それぞれの国が、それぞれ背景があったり、ちょっとずつ違う。歴史的な背景があって、違うところもあるということが、今回この中間報告会で、少し光が当たったような気がします。今度1月30日が最終の報告の日になりますけれども、もしできましたら、今回のこの話し合いをもとに、その辺りのところを、ちょっと付け加えていただけると、とてもいいのではないかなと、新たな宿題を出して申し訳ないのですが、ぜひご検討いただくとありがたいです。よろしくお願ひいたします。

藤岡 ありがとうございます。最後に一言ずつ、ヘラ先生は既にいただきましたが、コメント、昨日、今日とご発表いただいた先生がたからいただければということをおっしゃっているんですが、その前に、少しまとめということでもないんですが、これからの課題を、私のほうから、お話しさせていただければ、短くですが。特に日本でこの会議を開催することの意味は非常に大きいと思っております。日本は、日本人にとっての宗教とは何ですか、という質問が非常に難しい質問でありまして、それぞれの家には、うちは仏教ですとか、キリスト教ですとはいいいながらも、お正月には神社に参ったりというようなこともする中で、常にその宗教とソーシャルワークというテーマは日本人にとっても非常に重要なテーマであるわけです。その中で、秋元先生が昨日整理していただいたモデルCから説き起こす。Aとかも

もちろんあるし、それからBの特徴も、今日はかなりBの部分も出てきたと思っているんですけども、そこを少しこだわってCというところから出発するというのは、宗教が非常に明確に背景にあるソーシャルワーカーの人たちに限らないで、日本のソーシャルワーカーにとっても非常に大きな問いにつながるということで、あるいは色々なヒントがそこに含まれているということで、そこで昨日、今日、あらためてお聞きすることができたな、ということ、私のまとめの話にさせていただければと思います。

ちょっと時間がなくて、お聞きできなかったことの中で、皆さん、こう生活の中で人への奉仕をするってことが大事。それから経済的な支援も宗教的な活動の中で当然大事というふうなことを実践していく。それから苦しんでいる人たち、困っている人々を助けるという行為は、極めて宗教的な行為なので、あえてソーシャルワークということを行わなくても当然われわれはやっていることであると。ただソーシャルワークという観点から捉え直してみると、じゃあ具体的にどのような方法で困っている人々を助けていくのかということ、ソーシャルワークの中では、自立支援、インデペンデントというその自立支援というのにも含まれているんですが、でもそれって、コミュニティとか、共生という観点からいったときに、自立をうながすってということは、どういう意味を持っているかということ、やっぱりいわゆる西洋ベースのソーシャルワークにおいても、問い直しをするべきことではないかな、ということをおっしゃったところで、その辺りの答えが、実はこの宗教とソーシャルワークというテーマにちりばめられていて隠されているので、あまり早く答えを出さないで、もっと議論をしていこうという秋元先生のご提言もありましたが、一方でわれわれは、あの

カリキュラムで教えていかななくてはいけないので、その辺の部分は、どうしても頭の隅には置かなくてはいけないところかな、ということをおもったところ。以上、これは主催者としてのまとめとさせていただきます。この2日間を通して、最後にメッセージを送っていただければということで、ハタ先生から順番に、そして秋元先生に最後にお願ひできればと思います。それではハタ先生。

ハタ ありがとうございます。もう他には言うことはないんですけども、これは本当にいいステップだと思います。2015年にこのようにお話をいたしました。この第1ステップから、これからまた続けていきたいと思っています。これが生産的な道になりなってもらいたいと思っています。日本社会事業大学の皆さまが、本当にありがとうございます。秋元先生も、本当にありがとうございます。そしてまた、加奈さん、松尾さん、ありがとうございました。

藤岡 最後のコメントをお願ひできますでしょうか。

藤森 日本社会事業大。それからまた、所長、そして松尾さん、秋元先生、今後も一緒に協力をして、これを続けていきたいと思っています。そして明確な結果が出てくれればと思っています。ありがとうございます。

アディ 日本社会事業大学の皆さま、それから淑徳大学の皆さま、ありがとうございます。私たち、今回これ初めてお出ししたんですが、宿題も新たにいただきましたが、これはまだ予備的な段階にあると思っています。ジャカルタに戻りまして、これからまだたくさん研究を続けていかなければならない

と思います。松尾さん、ありがとうございます。秋元先生、ありがとうございます。そして皆さま、ありがとうございます。次回またお目にかかりたいと思います。

ワンワディ 皆さま、ありがとうございました。この分野を研究する良い機会となりました。イスラムソーシャルワークについて、この博士号を取得の際に活用してきたこの知識を活用していきたいと思っています。そしてタマサート大学での仕事にも役立てたいと思います。皆さま、ありがとうございました。

秋元 私たちの主催者がすべてを要約してくださったので、もうこれ以上申し上げるのはふさわしくないと思います。いくら言いたいことがあっても、違うことをちょっと言ってみたくても、もうここで発言するのは不適切かと思っています。皆さま、海外参加者の皆さま、遠くから来ていただきありがとうございます。15時間の遅れがあつてから到着なされた方もいらっしゃる。迷子になった方もいます。このキャンパスにたどり着くのに、いろいろご苦労があつたかと思っています。そしてこの部屋におられる他の参加者の方々。国内、そして国外からのその他の関係者の皆さま、非常に重要な会議に出席していただきましてありがとうございました。この会議が歴史的な会議であつたといつても大げさではないと思います。これからも努力を続けていきたいと思っています。ありがとうございます。

藤岡 今回の記念すべき会議に出席していただきまして、ありがとうございます。会場に来ていただきました一般参加の方々、それから学内の先生方、そしてお手伝いいただき大変だった学生の皆さま。それから一般参加、遠くから来た方々も、本当にあ

りがとうございます。そして何よりもこの会議の成功は、本当に通訳の方々にかかっておりまして、本当に昨日、今日と難しい通訳だったと思うんですけど、本当に見事にこなされまして、心から感謝申し上げたいと思います。拍手で皆さまのご努力をねぎらいます。本当にありがとうございました。99パーセント通訳の方々のお力だと思っております。それでは皆さま、これでこの会を閉めたいと思いますので、本当にどうもありがとうございました。

平成 27 年度
全国生活協同組合連合会助成事業

第 24 回 環太平洋社会福祉セミナー
「アジア型ソーシャルワークを構築する」

報 告 書

平成 28 年 3 月 発行

発行 学校法人 日本社会事業大学

編集 社会事業研究所

〒 204-8555

東京都清瀬市竹丘 3 - 1 - 30

T E L 042-496-3050

印刷 株式会社 共 進
